社会教育課

桧峯遺跡

発掘調査報告書

昭和56年度

前橋市教育委員会
佐田建設株式会社

横から　（1：1）

上から　（1：2）

下から　（1：2）

62号住居址より出土した奈良三彩小壺
―― 1981. 11. 25. 発見 ――

序

健康と明るい精神は、健全なスポーツを通じて得られるものであるという精神は、会長佐田一郎の早くからの考えでありましたが、当社が五代運動場を造るにあたり、前橋市教育委員会に同地区桧峯遺跡の発掘調査を御依頼申し上げました処、私どもの考えを充分御理解いただき、快く発掘調査に応じて載いたことを先ず感謝致します。

今回発掘調査致しました桧峯遺跡からは、奈良三彩小壺ほか貴重な成果を得ることができましたが、この調査を通じ社員の古代文化に対する心の目が開かれたことは、私の最も喜んで居る事であります。

この調査の実施にあたり終始御協力載きました各位及び地元の皆さんに深く感謝するものであります。

昭和 57 年 3 月

佐田建設株式会社

社長　佐　田　武　夫

序

佐田建設株式会社の計画されたグランド予定地は埋蔵文化財の存在が早くから知られていたところです。

協議の結果、佐田建設株式会社の全面的なご協力のもとに十分な発掘調査が実施でき、奈良三彩小壺をはじめとした多くの成果をおさめることができました。まさに、奈良三彩小壺は、その協力体制の証といえましょう。

さらに、民間の方々に埋蔵文化財に対するより一層のご理解をいただけたことに大なる喜びを感じる次第です。

最後になりましたが、佐田建設株式会社社長佐田武夫氏をはじめとする多くの方々のご協力に厚く感謝申し上げます。本報告書がより多くの方々にご活用いただけることを願ってやみません。

昭和 57 年 3 月

前橋市教育委員会

教育長　金 井 博 之

凡　　例

1　本書は、群馬県前橋市上泉町字桧峯と五代町字桧嶺において、佐田建設株式会社が計画したグランド建設予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は佐田建設株式会社の依頼により、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が担当した。調査担当者は以下の通りである。

松本浩一　　福田紀雄　　中澤充裕
布施和男　　入内島裕美　　杉浦つや子

3　遺構の実測は、佐田建設株式会社土木本部技術部の前野光男、堀越好治、小暮直隆が担当した。

4　本書の執筆および編集は、中澤充裕、杉浦つや子が担当した。

5　遺物の実測およびトレースは、渡辺美鈴、加部二生、安藤友美が担当した。遺構・遺物の写真は、鷹巣大城が撮影した。

6　奈良三彩小壺については、群馬県埋蔵文化財調査事業団次長井上唯雄氏、奈良国立文化財研究所考古第一室長工楽善通氏、同所考古第二室長森郁夫氏にご指導をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

また、社宝の三彩小壺を快く拝見させていただきご協力していただいた貫前神社神主三嶋通雄氏に感謝申し上げる。

7　出土遺物の整理保管は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が行っている。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅱ　発　掘　調　査 …… 5

1　発掘調査にいたるまで …… 5
2　調査の方法 …… 5
3　地　　層 …… 6
4　調査の経過 …… 6
5　遺構および出土遺物 …… 9
(1)　5号住居址 …… 9
(2)　8号住居址 …… 13
(3)　21号住居址 …… 15
(4)　32号住居址 …… 29
(5)　33号住居址 …… 33
(6)　43号住居址 …… 37
(7)　46号住居址 …… 39
(8)　47号住居址 …… 41
(9)　55号住居址 …… 43
(10)　62号住居址 …… 47
(11)　76号住居址 …… 51
(12)　掘立柱建物跡 …… 56
(13)　1号ピット …… 56

Ⅲ　ま　と　め …… 57

1　遺　　構 …… 57
2　遺　　物 …… 64
3　奈良三彩小壺 …… 66

挿　図　目　次

図１　遺跡の位置と環境…… 4
図２　発掘区位置図…… 4
図３　遺構分布図……折込
図４　５号住居址実測図…… 9
図５　遺物実測図……11
図６　遺物実測図……12
図７　８号住居址実測図……13
図８　遺物実測図……14
図９　21号住居址実測図……15
図10　竈実測図（側面）……17
図11　遺物実測図……18
図12　遺物実測図……19
図13　遺物実測図……20
図14　遺物実測図……21
図15　遺物実測図……22
図16　遺物実測図……23
図17　遺物実測図……24
図18　遺物実測図……25
図19　遺物実測図……26
図20　遺物実測図……27
図21　遺物実測図……28
図22　32号住居址実測図……29
図23　遺物実測図……31
図24　遺物実測図……32
図25　33号住居址実測図……33
図26　遺物実測図……35
図27　遺物実測図……36
図28　43号住居址実測図……37
図29　遺物実測図……38
図30　46号住居址実測図……39
図31　遺物実測図……40
図32　47号住居址実測図……41
図33　遺物実測図……42
図34　55号住居址実測図……43
図35　遺物実測図……45
図36　遺物実測図……46
図37　62号住居址実測図……47
図38　奈良三彩小壺実測図……49
図39　遺物実測図……50
図40　76号住居址実測図……51
図41　遺物実測図……53
図42　遺物実測図……54
図43　遺物実測図……55
図44　掘立柱建物跡実測図……56
図45　１号ピット実測図……56
図46　１号ピット出土遺物実測図……56
図47　50号住居址実測図……57
図48　42号住居址竈……58
図49　４号住居址ピット……58
図50　遺構分布図……折込
図51　遺物実測図……64
図52　甕実測図……65
図53　土師器坏実測図……65
図54　須恵器坏椀実測図……66
図55　奈良三彩小壺実測図……67
図56　桧峯遺跡と貫前神社の奈良三彩小壺…69

表　目　次

表１　周辺の遺跡…… 3
表２　鬼高期住居址規模……57
表３　鬼高期住居址西壁の走向……57
表４　真間期住居址規模……57
表５　真間期住居址西壁の走向……57
表６　国分期住居址規模……58
表７　国分期住居址西壁の走向……58
表８　住居址一覧……59・60・61・62・63
表９　奈良三彩小壺出土遺跡……66

Ⅰ　遺跡の位置と環境

桧峯遺跡は赤城山南麓の群馬県前橋市上泉町字桧峯、五代町字桧嶺に所在し、市立芳賀中学校の南東約1.3km、大正用水第三号隧道の北に接して位置する。

赤城山はその裾野を四方に長くひき、山頂部から流れ出る河川によって幾多の開析谷が刻みつけられている。開析谷に挟まれた舌状の台地は、古くから人々に生活の舞台を提供している。本遺跡もそうした舌状の台地上にあって、標高153m～166mにかけて展開される陽当りのよい傾斜地である。

本遺跡2.3km南には、古利根川の段崖が比高差５m～６mで北西～南東にかけて、その姿をとどめている。

現在、遺跡周辺一帯の台地には桑園、牧草地、そして菜園が展開し、開析谷にあたる箇所には水田が開けている。

次に本遺跡の歴史的環境をみていきたい。

時代	遺跡名	性格	内容
縄文	芳賀北部団地	集落跡	竪穴住居址27
	芳賀東部工業団地	集落跡	竪穴住居址58
古墳	芳賀東部工業団地	集落跡・古墳	竪穴住居址75（古墳前期）、古墳４（７世紀）
	芳賀西部工業団地	古墳群か	古墳31（円墳が多い）
	桧峯古墳	古墳	円墳、７世紀初、石室は横穴式、両袖型、直刀、刀子、鉄鏃、耳環、勾玉、管玉等出土
	オブ塚古墳	古墳	前方後円墳、石室は横穴式、袖無型、人骨、直刀、刀子、鉄鏃、耳環、須恵器等出土
	大日塚古墳	古墳	前方後円墳、７世紀前半か、石室は横穴式か、村人により明治に発掘、鏡、金環等の出土品は東京帝室博物館をはじめ群馬県師範学校等に寄付。
奈良、平安	芳賀北部団地	集落跡	竪穴住居址231
	芳賀東部工業団地	集落跡	竪穴住居址420、掘立柱建物跡189
	推定国府跡（元総社町周辺）	官衙跡	国府を決定づけるものは発掘されていないが、国府跡と推定されている。
	国分寺跡	寺院跡	三彩破片出土。
	山王廃寺跡	寺院跡	水瓶をはじめとした緑釉陶器がセットで出土。三彩破片出土。「放光寺」ヘラ書瓦出土。

表１　周辺の遺跡

古墳については、昭和13年の「古墳綜覧」によると本遺跡周辺に26基もの古墳の存在したことが記されているものの、現在では平夷され昔日のおもかげはない。

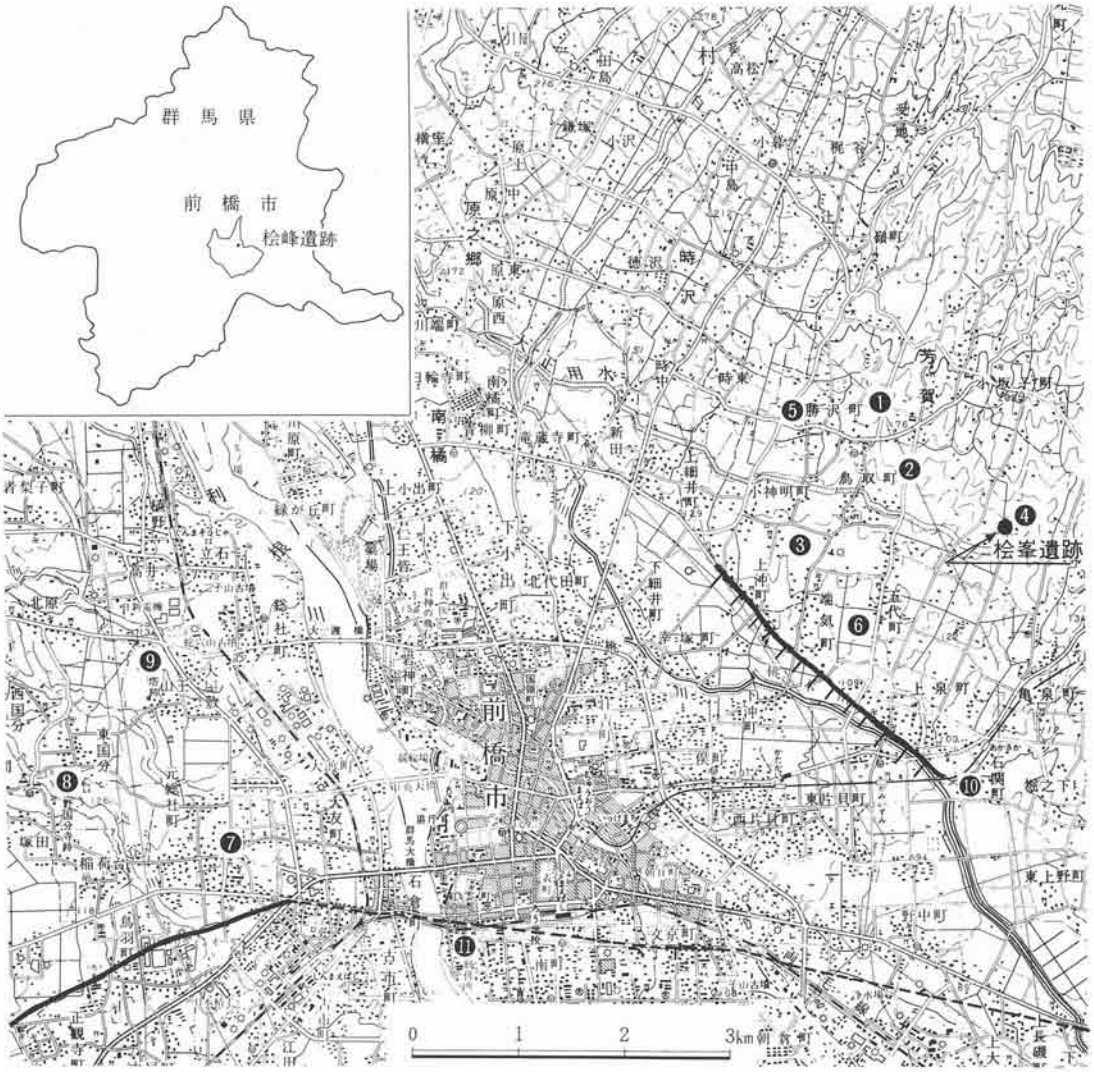


図１　遺跡の位置と環境

1．芳賀北部団地遺跡
2．芳賀東部工業団地遺跡
3．芳賀西部工業団地遺跡
4．桧峯遺跡
5．オブ塚古墳
6．大日塚古墳
7．推定国府跡
8．国分寺跡
9．山王廃寺跡
10．古利根川左岸
11．推定東山道

東山道については諸説あって、現段階では確定していない。本書では金坂清則氏の推定東山道(「上野国府とその付近の東山道、および群馬、佐位駅家について」『歴史地理学紀要16』1974）を参考にした。また群馬県史編さん室石川正之助氏からもご教示いただいた。記して感謝を表する次第である。

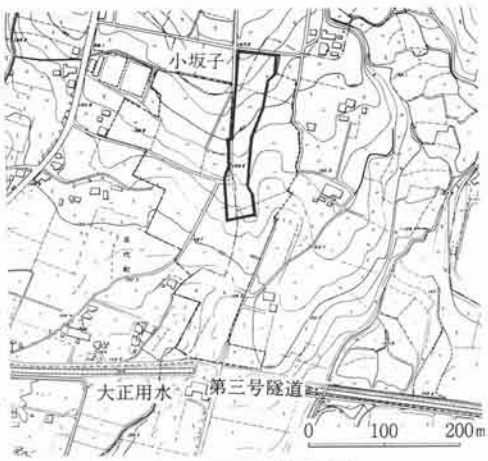


図２　発掘区位置図

II 発 掘 調 査

1 発掘調査にいたるまで

○昭和56年７月

佐田建設株式会社では前橋市上泉町字桧峯にグランド（面積約54000㎡、以下、佐田グランドと称す）建設を計画している旨の連絡が、群馬県教育委員会文化財保護課より前橋市教育委員会にあった。

○昭和56年８月24日

前橋市教育委員会は、市建築部建築課に認可状況を確認するとともに、造成について教育委員会の意見を述べた。直ちに、建築課より佐田建設株式会社に対し、佐田グランド造成について教育委員会事務局と協議するよう行政指導が行われた。

○昭和56年８月28日

佐田建設株式会社と前橋市教育委員会社会教育課とで、佐田グランド建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議する。協議の結果は、

(1) ９月末の牧草刈り取り後、佐田建設株式会社が試掘を入れる。

(2) 試掘には前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係職員が立ち合う。

(3) 試掘の結果遺構が発見された際には、あらためてその取り扱いについて協議する。

○昭和56年９月30日～10月１日

試掘を行う。バックホーによって、２ｍ幅のトレンチを南北に長く入れる。総数10本。そのうち、南東に傾斜する面から住居址10箇、溝１条を確認する。また、西側トレンチ内には遺構が発見されなかったことも確認できた。

○昭和56年10月１日

佐田建設株式会社と前橋市教育委員会とで、埋蔵文化財の取り扱いについて協議する。結果は、

(1) 記録保存を前提として発掘調査を実施する。

(2) 発掘調査にかかる費用は、佐田建設株式会社で全額負担する。支出負担行為も同社が行う。

(3) 発掘調査担当者は、前橋市教育委員会から派遣する。

(4) 発掘調査は、今回の造成で土を削り取る区画のうち、南東に面した斜面を中心とする。その面積は約8100㎡、調査期間は昭和56年10月下旬～12月下旬とする。

2 調 査 の 方 法

今回の発掘調査では、バックホーによって遺構が確認される面まで表土剝ぎを実施した。遺構が確認され次第、手掘りでの調査に切りかえた。また、遺構の位置をおさえるべく調査区に20ｍ間隔のメッシュを設定した。調査区の南端ほぼ中央に任意の杭を打ち、Ｂ―12と命名する。Ｂ―12杭を基準に南北列の杭は磁北に合わせ設定した（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅライン）。その結果、東西列の杭は１～12までを配した。

3 地　　層

Ⅰ層　表土（耕作土）。厚さ15～20cm

Ⅱ層　B軽石(注1)を混ぜる砂質黒色土層。調査区南部では一部B軽石の純層も確認された。厚さ５～10cm。

Ⅲ層　F軽石(注2)とC軽石(注3)を含む黒褐色土層。所によりF軽石やC軽石の混じりの多少により２～３層に区別される場合がある。また、ごく少量の炭化物や焼土粒を入れる場合もある。厚さ25～40cm。

Ⅳ層　ローム漸移層。茶褐色を呈す。

Ⅴ層　ローム層。

本遺跡における地層は概ね上記の通りである。なお、遺構はローム漸移層直上で確認されるものが大部分である。そうした遺構の掘り込み基盤はⅢ層に求められることも確認されている。

（注１）　天仁元年（1108年）あるいは弘安四年（1281年）降下と推定される浅間山噴出軽石で、地層の注記はBと記す。

（注２）　６世紀代に降下したと推定される榛名山二ツ岳噴出軽石。FA および FP の二種類が確認されているが、軽石単体では FA・FP の識別は不可能故、今回はF軽石とし、地層の注記はFと記す。

（注３）　４世紀ごろの降下と考えられる浅間山噴出軽石で、地層の注記はCと記す。

（注）はいずれも、新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル157』、1979による。

4 調 査 の 経 過

昭和56年10月21日　晴のち曇

１号住居址荒掘り開始。作業員10名。

10月23日　晴

１号住居址の床面精査。２、３、４、５号住居址の荒掘着手。佐田建設株式会社技術部の金子以下５名による20m杭設置およびベンチマーク移動を実施する。

発　掘　前

10月27日　晴

作業員18名に増加する。完掘なった住居址の遺物遺構平面実測について佐田建設株式会社と前橋市教育委員会で協議する。結果は、佐田建設株式会社から２名派遣することになった。

10月28日　晴

２号住居址～11号住居址の地層断面の実測および写真撮影。13号住居址～19号住居址荒掘途中。

午後、佐田建設株式会社社長以下重役、役員による発掘現場視察が行われる。

作　業　風　景

II 発 掘 調 査

11月4日　曇

1号住居址～11号住居址のベルトを除去する。12号住居址～15号住居址の地層断面実測。本日より佐田建設株式会社土木本部技術部の前野、堀越、小暮による遺物出土状況および遺構平面の実測が始まる。

作業員が26名と増加する。

11月9日　晴

6号住居址～8号住居址の遺物遺構実測終了する。

市立桂萱小学校児童および保護者による体験発掘。参加者は20名。52号住居址と53号住居址を発掘する。

11月25日　曇

21号住居址～26号住居址の遺構全体写真撮影済。48号、55号、57号住居址の遺物出土状況写真も撮影済。62号住居址にて午後2時ごろ三彩小壺発見。

11月30日　晴

71号住居址～73号住居址の荒掘着手。

午後4時ごろ群馬県埋蔵文化財調査事業団井上唯雄次長に三彩小壺を見ていただく。三彩小壺は奈良三彩で発色、保存状態ともにすぐれており逸品とのことであった。なお、奈良三彩小壺の実測図およびコメントは井上唯雄氏の手を煩わせた。

12月4日　晴

天候にめぐまれハイライダー（高所作業車）を使って遺跡全体写真の撮影が完了する。

12月5日　晴

本日より12月19日まで発掘現場プレハブにて出土遺物の整理にかかる。

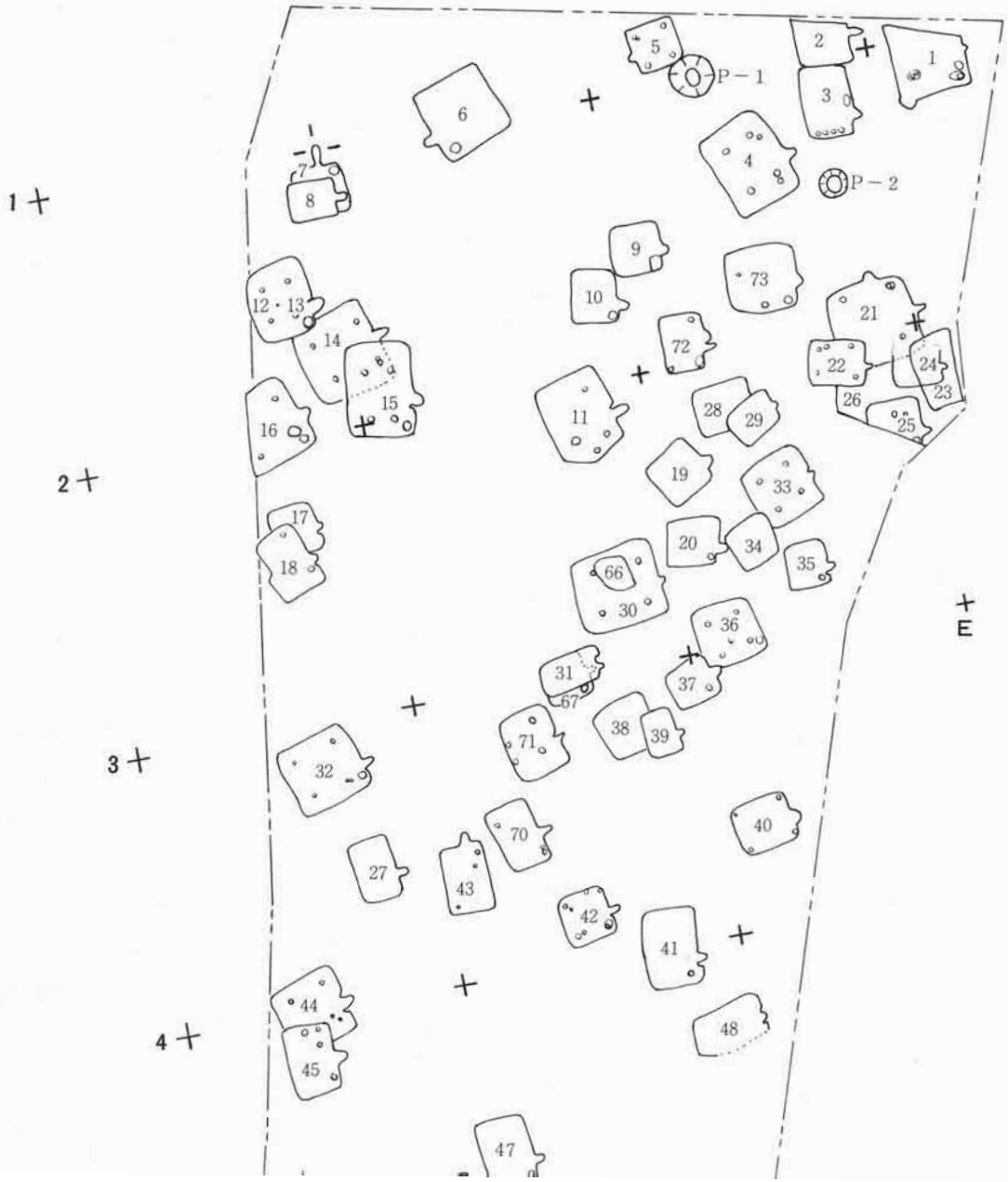
12月21日　晴

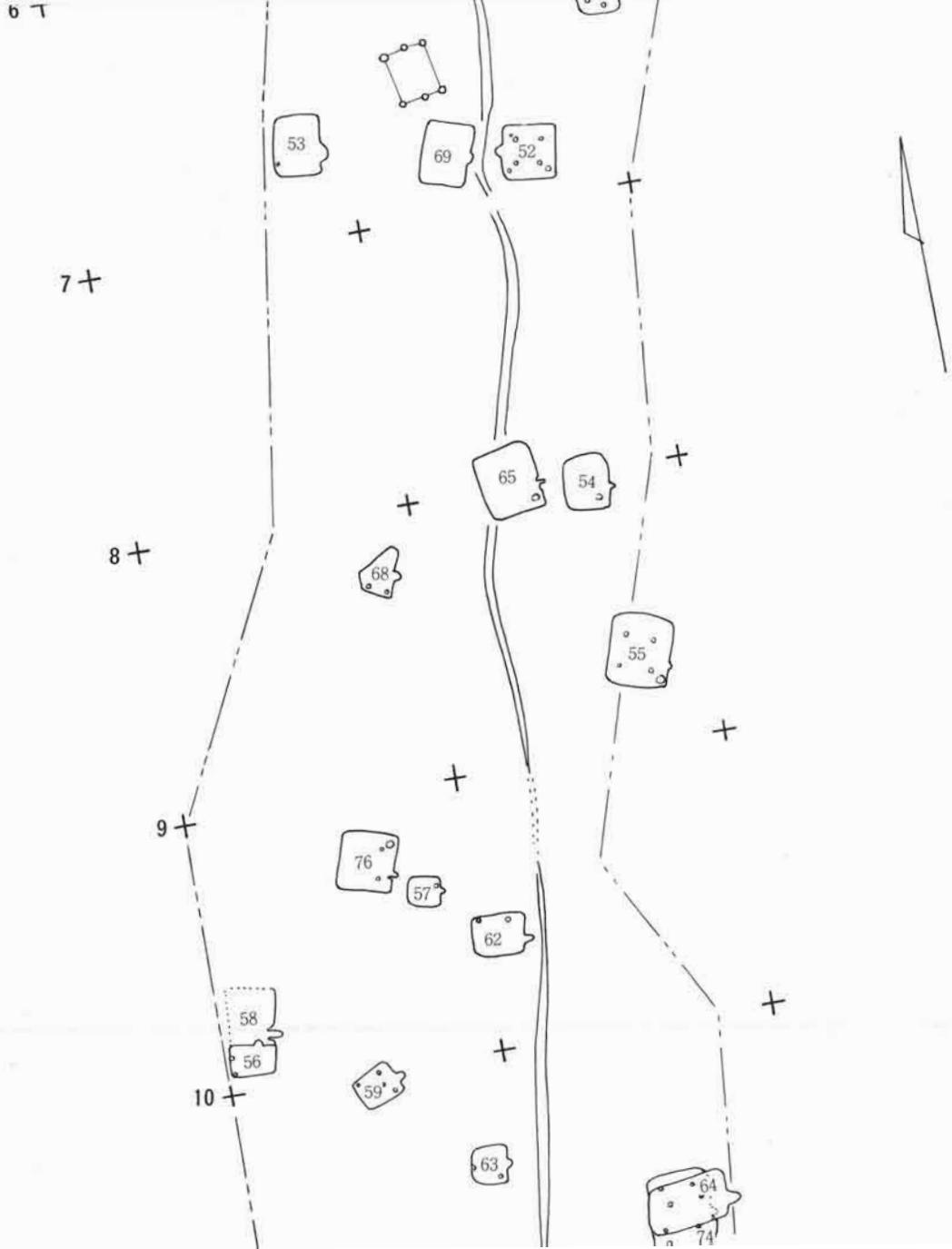
発掘現場プレハブの明け渡し。遺物は元総社町の分室に搬入する。

作 業 風 景

遺 跡 遠 景

ハイライダーを使っての撮影


P－1
P－2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
47
48
66
67
70
71
72
73
E


6
7
8
9
10
53
69
52
65
54
68
55
76
57
62
58
56
59
63
64
74

遺跡全体（北より）

5　遺構および出土遺物

(1)　5号住居址

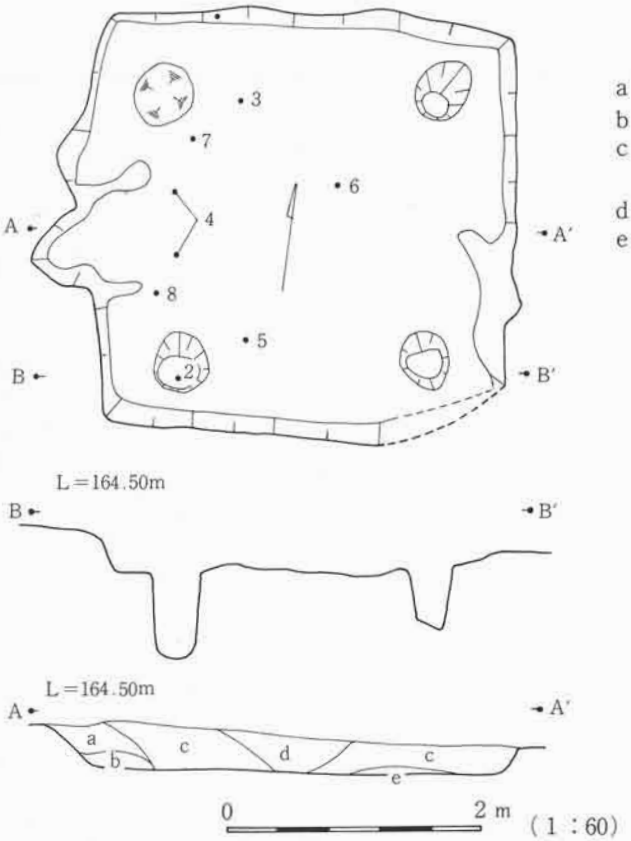


図4　5号住居址実測図

a　白褐色土　多量の白色粘土を含む。
b　赤 色 土　焼土ブロック主体。
c　茶褐色土　多量のF、C、ごく少量の焼土粒、炭化物を含む。
d　黒褐色土　多量のF、Cを含む。
e　茶褐色土　少量のC、多量のローム粒を含む。

位　　置　発掘区最北端東寄り

規　　模　東西3.2m　南北3.1m

形　　状　正方形

西壁走向　N—12°—W

周　　溝　なし

柱　　穴　4個

北東 Pit（52cm×40cm−39cm　楕円形）

北西 Pit（46×50−29　円形）

南西 Pit（48×44−65　円形）

南東 Pit（46×40−67　楕円形）

貯 蔵 穴　なし

床　　竈付近が固い。褐色ロームブックを主体として、F、C、黒色土を少量混ぜる貼床。厚さ13cm前後。

竈　　西壁やや南寄り。袖部先端に長甕使用。燃焼部は壁内で急勾配の煙道を有す。構築素材は白色粘土を若干含む粘質土。

出土状況　竈南側袖先端に長甕が伏せられ完形で出土。北側袖部の甕は前方へ押し出された状態であった。竈の焚口からは甕が潰れた状態で出土。床面中央部と南西 Pit 付近では、甕（口縁部）が上向きで出土している。南西 Pit 内からは坏が完形で出土。

住居址全体

遺物出土状況

竈付近遺物出土状況

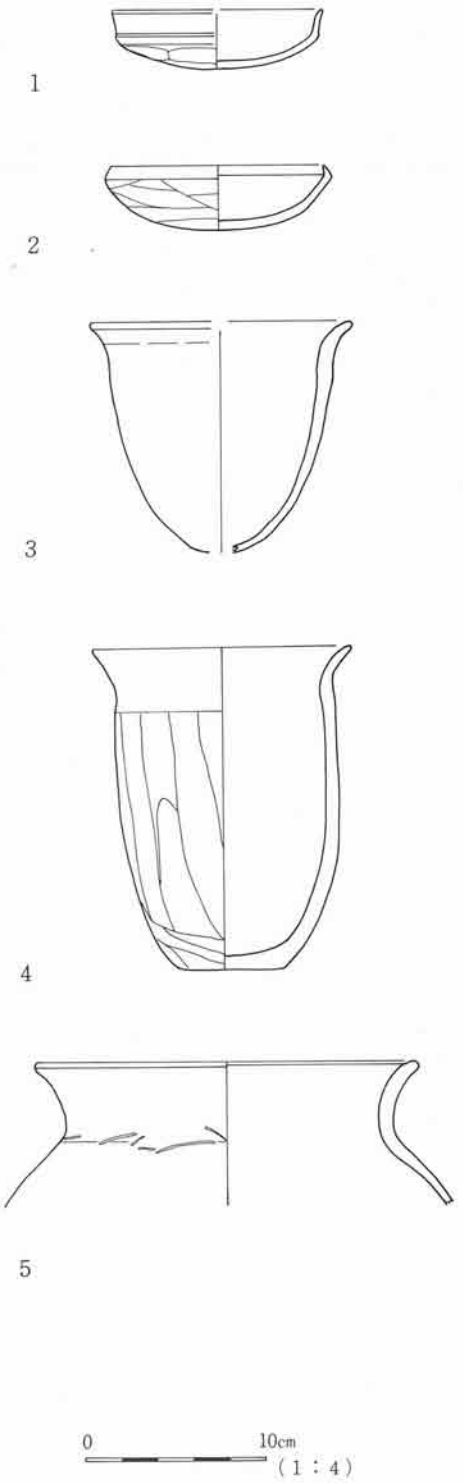


図5　遺物実測図

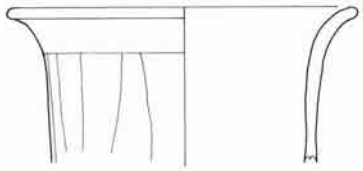
1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
焼　成　良
胎　土　良（砂粒少量含有）
技法等　口縁部及び内面横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部と体部の境に稜を有する。

2　坏（土師器）
色　調　赤褐色
焼　成　良
胎　土　良（砂粒少量含有）
技法等　口縁部及び内面横ナデ。底部中央不定方向の、周縁部横方向のヘラ削。口縁部は短かく、内彎し、体部との境に稜を有する。

3　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　小石粒、石英が目立つ。
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削底部にかけては横方向ヘラ削。器肌は荒れており、口縁部から底部にかけスス付着。

4　甕（土師器）
色　調　淡褐色
胎　土　雲母含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削、底部にかけて横方向ヘラ削。底部は不定方向ヘラ削。

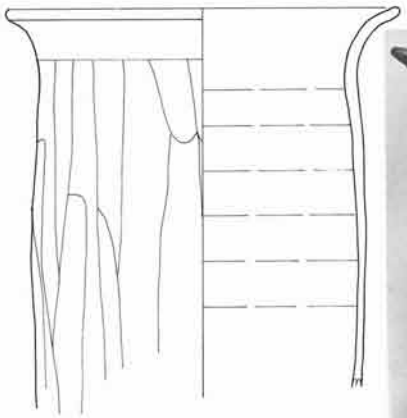
5　甕（土師器）
色　調　橙褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部にヘラ先で傷つけた跡がある。



6

6　甕（土師器）

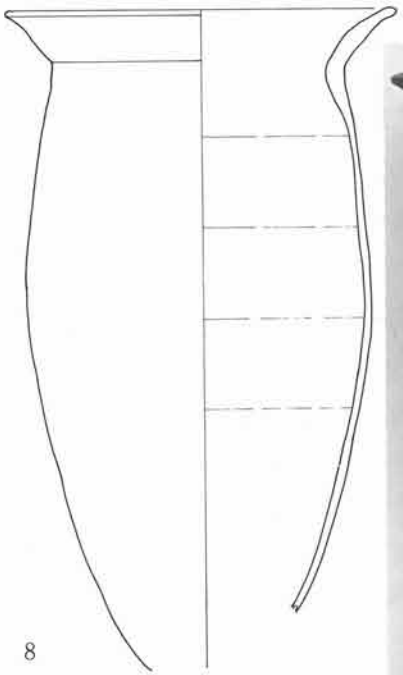
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒、雲母含有
焼成　やや良
技法等　口縁部横ナデ、体部縦方向ヘラ削。頸部はしまりを欠く。



7

7　甕（土師器）

色　調　淡赤褐色
胎　土　石英、砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削。内面に粘土紐まきあげ痕が残る。頸部はしまりを欠く。



8

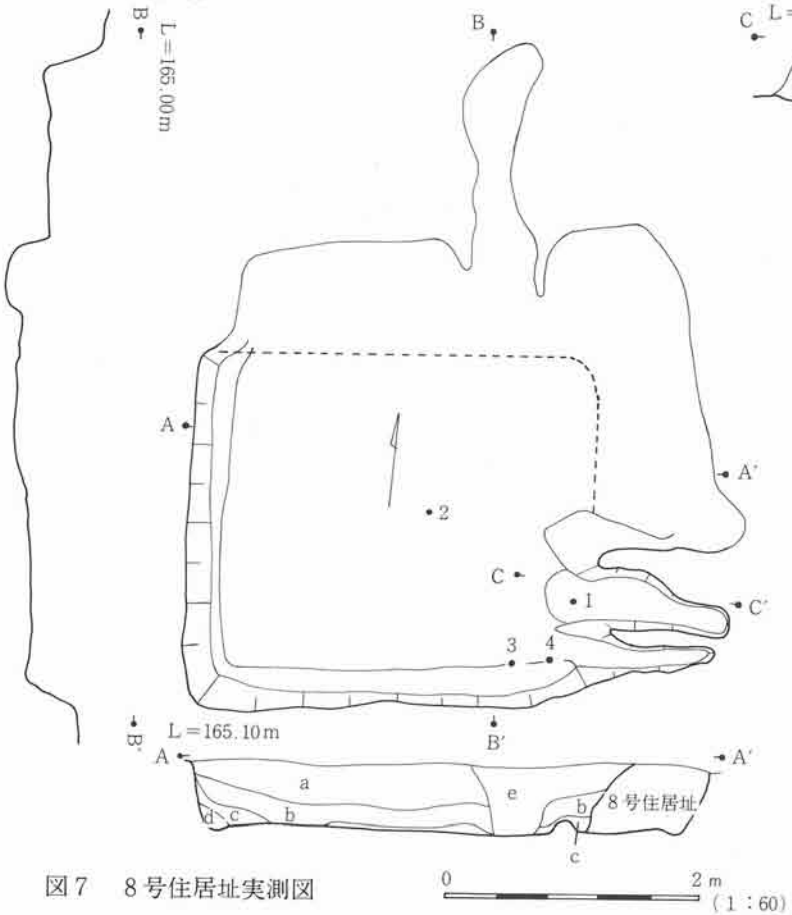
8　甕（土師器）

色　調　淡茶褐色
胎　土　雲母、砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部内外面横ナデ。体部縦方向ヘラ削、内面に粘土紐まきあげ痕が残る。頸部は弱くしまり、体部はゆるやかな膨らみを有す。

0　10cm
（1：4）

図6　遺物実測図

(2) 8号住居址



a　黒褐色土
F、C、ロームブロックを含む。

b　黒褐色土
少量のF、Cを含む。

c　茶褐色土
ロームブロックと黒褐色土の混土。

d　茶褐色土
ロームブロックを含む。しまりなし。

e　茶褐色土
水道管敷設のための溝。

ア　赤褐色土
少量の燃土ブロックを含む。

イ　褐色土
少量の燃土ブロックを含む。粘性あり。

ウ　赤色土
多量の燃土ブロックと暗褐色土の混土。ぼろぼろしている。

エ　黒褐色土
多量の褐色粘質土ブロック主体。

図7　8号住居址実測図

位　　置　発掘区北西端

規　　模　東西3.0m　南北2.7m

形　　状　長方形

西壁走向　N－3°－E

周　　溝　西壁下と南壁下で確認

柱　　穴　なし

貯 蔵 穴　穴は認められなかったが、竈南側に口縁部のみの甕2個体が検出された。西の甕は埋めた状態であり、貯蔵施設とも考えられる。なお、甕の中から遺物は検出されなかった。

床　　竈付近が固い。黒色土と褐色ロームブロックの混土を主体として、F、C、焼土粒を少量混ぜる貼床。厚さ17cm前後。

竈　　東壁南東隅近く。燃焼部は壁外。構築素材は褐色粘質土。

出土状況　竈近くからの遺物出土が多い。貯蔵穴の項でふれた如く、竈2個体出土。竈内では坏が上向きの状態にて出土する。

そ の 他　7号住居坏と重複する。本住居址が新。

竈および貯蔵穴

住居址全体

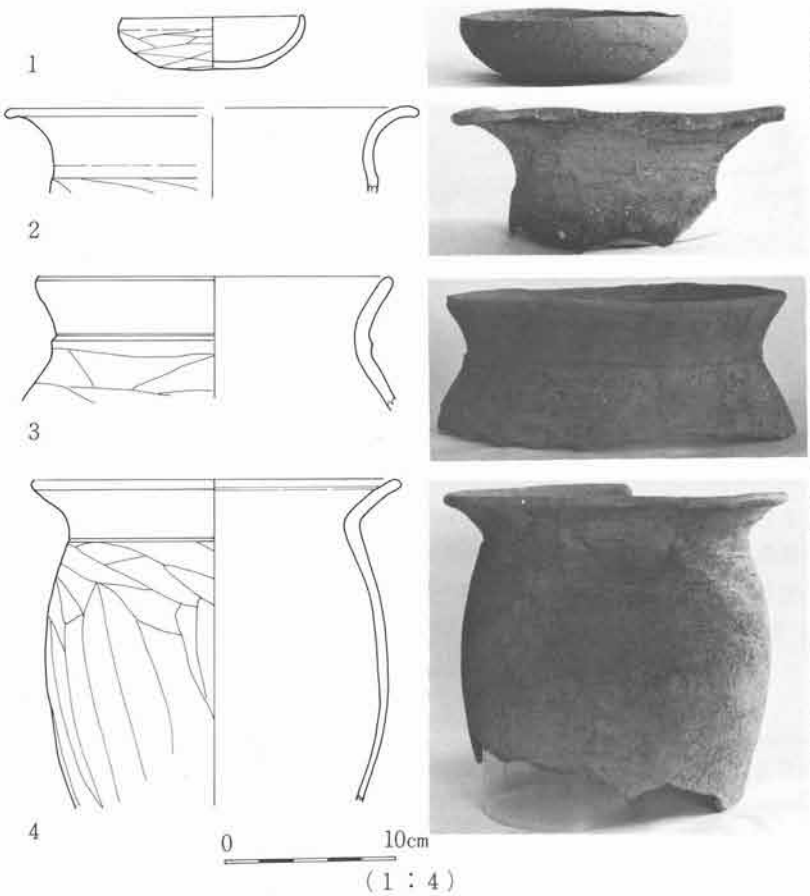


図8　遺物実測図

1　坏（土師器）

色　調　赤褐色
胎　土　雲母・長石等含有
焼　成　良
技法等　底部手持ちヘラ削。内面及び口縁部横ナデ。口縁部は短かく内傾し、体部との境に稜は見られない。

2　甕（土師器）

色　調　赤褐色
胎　土　雲母粒含有
焼　成　良
技法等　内面及び口縁部横ナデ。口縁部は大きく開き、端部ではほぼ水平になる。

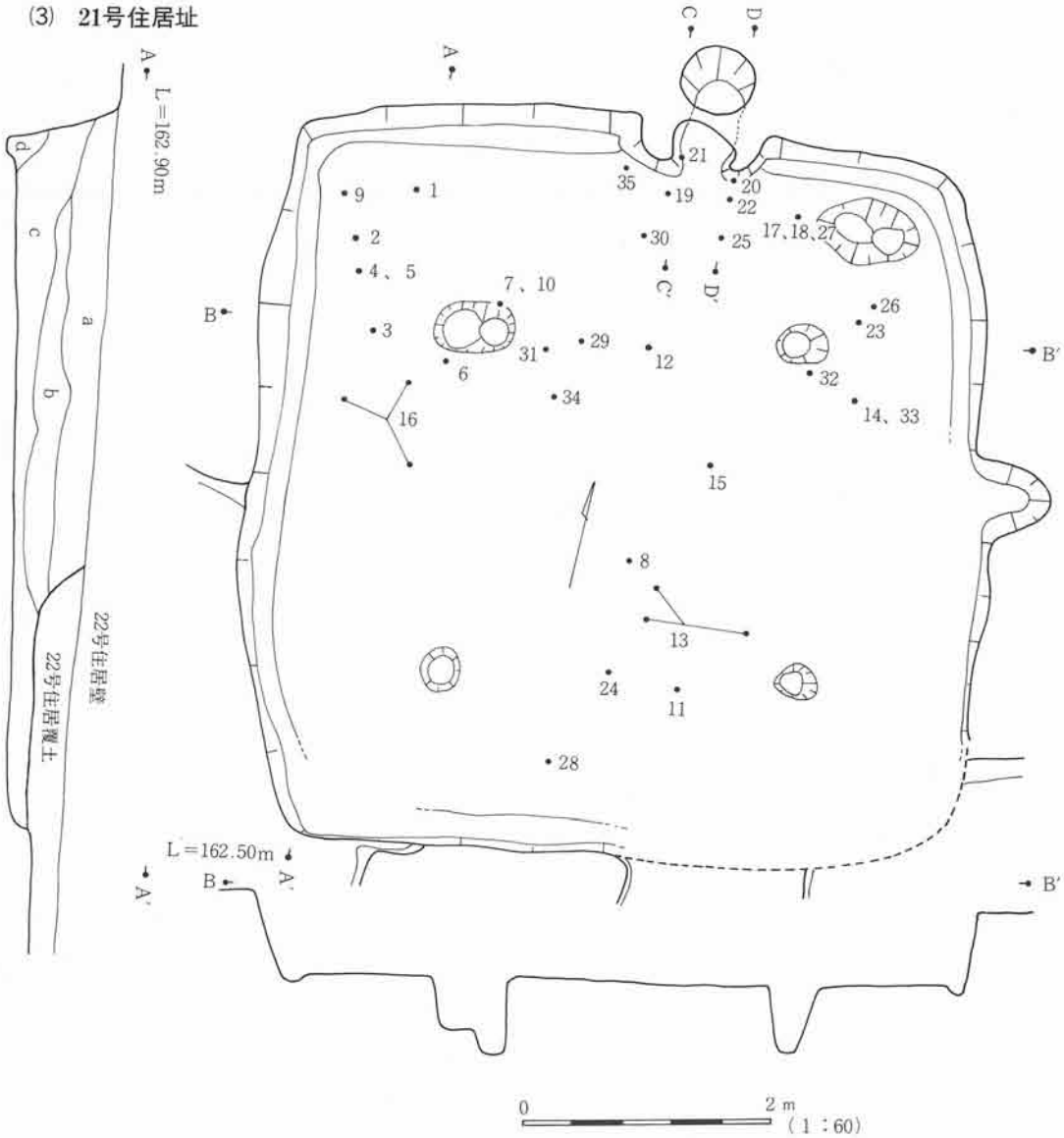
3　甕（土師器）

色　調　赤褐色
胎　土　良（雲母含有）
焼　成　良
技法等　口縁部内外面横ナデ。厚くしっかりしたつくり。口縁部と体部の境に稜を有す。

4　甕（土師器）

色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部内外面横ナデ。肩部斜方向の、体部縦方向のヘラ削。口縁部と体部の境に不明瞭な稜を有し、頸部はしまり、肩が張る。

(3) 21号住居址



a　茶褐色土　多量のF、C、小豆大の転石を含む。
b　茶褐色土　多量のC、少量のF、砂を含む。
c　茶褐色土　多量のC、少量のF、ロームブロックを含む。
d　褐 色 土　ローム粒主体。しまりなし。

図9　21号住居址実測図

位　　置	発掘区北東端	柱　　穴	4個
規　　模	東西5.5m　南北5.8m		北東 Pit（40cm×38cm−51cm 円形）
形　　状	長方形		北西 Pit（66×40−58　楕円形）
西壁走向	N−10°−W		南西 Pit（36×34−50　円形）
周　　溝	全周		南東 Pit（36×28−46　楕円形）

貯蔵穴　北東隅（80cm×54cm－76cm　楕円形）

床　全面にわたり固くしまる。黒色土と褐色ローブロックの混土を主体として、F、C、焼土粒、炭化物を少量入れる貼床。厚さ12cm前後。

竈　北壁東寄りと東壁中央の二箇所に設置。二基の竈構築の新旧は不明だが、東壁のものは中途で使用を放棄された形跡がうかがえる。北壁のものは、規模が大きく袖部および燃焼部壁の芯に長甕を3個体分ずつ使用している。

出土状況　北壁の竈東脇から前方にかけて、長甕が潰れた状態で8個体分出土。坏類は北西隅から出土する傾向がみられた。

その他　22号、23号、24号住居址と重複する。本住居址がいずれよりも旧。

住居址全体

北西隅遺物出土状況

竈　全　体（正面）

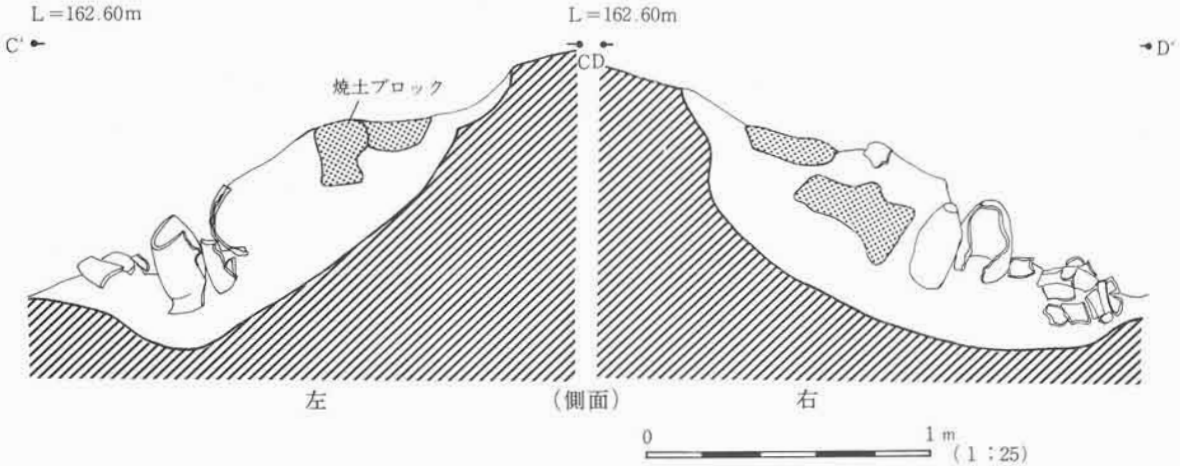


図10　竈実測図（側面）

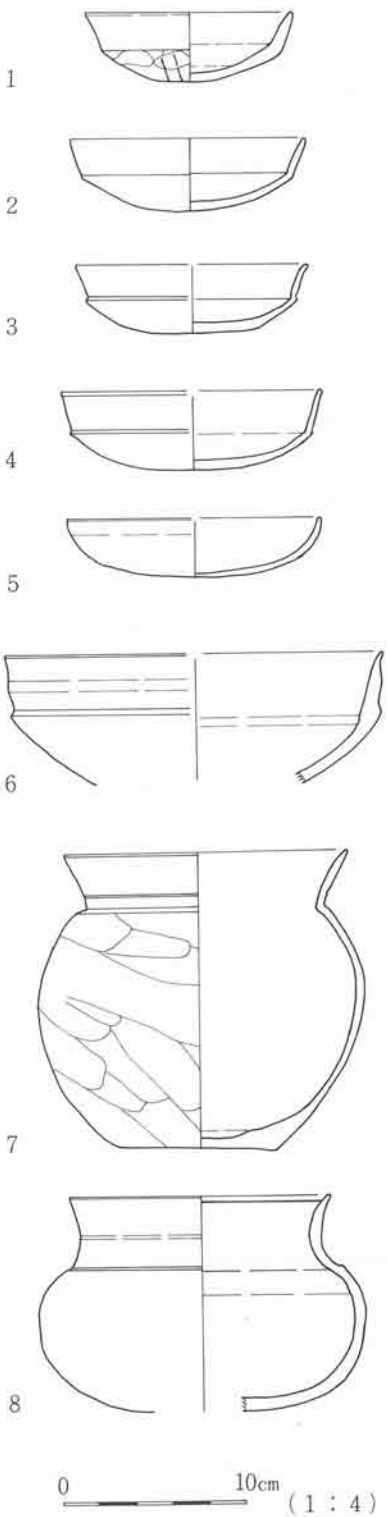


図11　遺物実測図

1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良好
技法等　口縁部横ナデ。底部ヘラ削。口縁部と体部の境に稜を有する。

2　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部は外反し、体部との境に稜を有す。比較的ていねいなつくり。

3　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部と体部の境に明瞭な稜を有す。

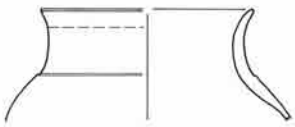
4　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部と底部の境に稜を有す。口縁部にゆがみあり。

5　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。短かい口縁部と体部との境には稜は認められない。

6　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁は直立し、体部との境に明瞭な稜を有す。

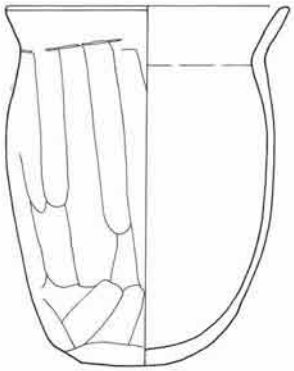
7　小型壺（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向の、底部不定方向のヘラ削。口縁部に一条の沈線を有し、体部との境に稜をもつ。底部は不安定な平底。

8　小型壺（土師器）
色　調　暗赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向のヘラ削。体部は扁球形。口縁部は直立し、体部との境に稜を有す。



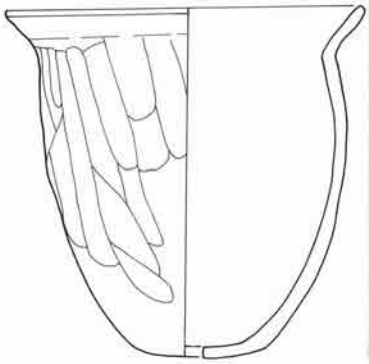
9

9　小型壺（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向のヘラ削。口縁部は直立し、体部との境に稜を有す。ていねいなつくり。



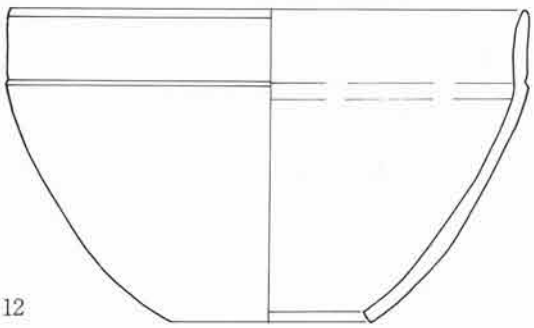
10

10　小型甕（土師器）
色　調　暗茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部にヘラ先で傷つけた痕跡あり。



11

11　甑（土師器）
色　調　暗赤褐色
胎　土　石英・砂粒含有（少量）
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。底孔は工具で切取る。

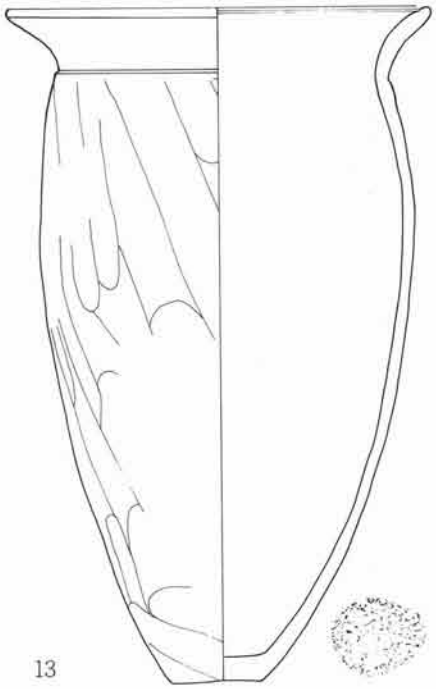


12

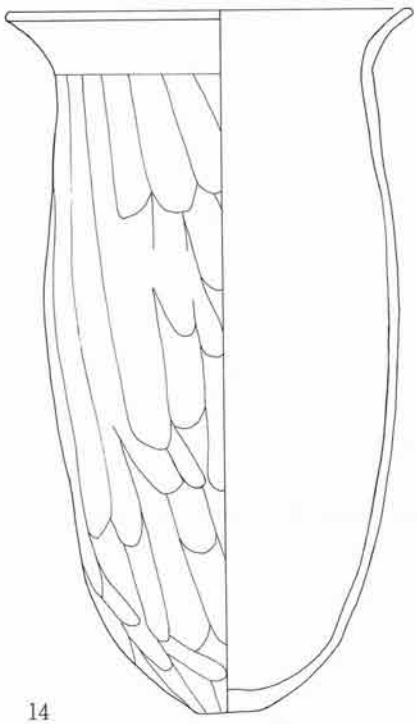
12　甑（土師器）
色　調　暗赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部ヘラ削。器肌が荒れている。二次焼成を受ける。底孔は工具で切取る。直立する口縁部と体部との境に稜を有す。

0　10cm（1：4）

図12　遺物実測図



13



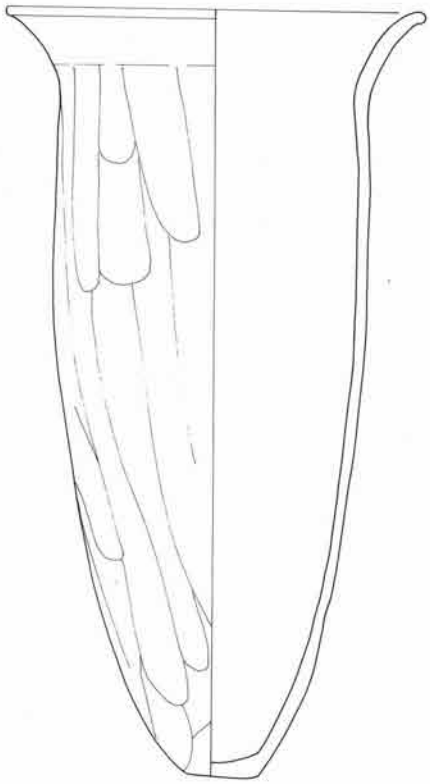
14

0　10cm（1：4）

図13　遺物実測図

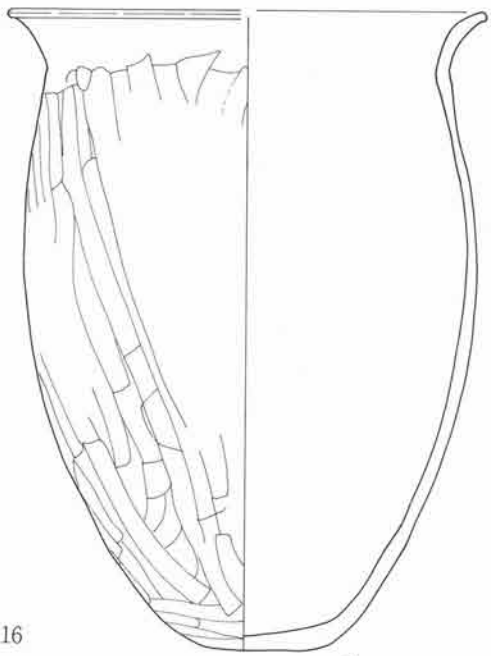
13　甕（土師器）
色　調　淡赤褐色
胎　土　少石粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方のヘラ削。頸部はしまり、稜を有す。胴部はゆるやかな膨らみを有す。平底を呈する底部は、小さく不安定。比較的ていねいなつくり。

14　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。内面に粘土紐の凹凸が残る。頸部は弱くしまり、胴部はゆるやかな膨らみを有す。底部は小さく非常に不安定。



15

15　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部はしまりを欠き、ゆるく大きく開く口縁部へスムーズに続く。胴部はほとんど膨らみを欠く。

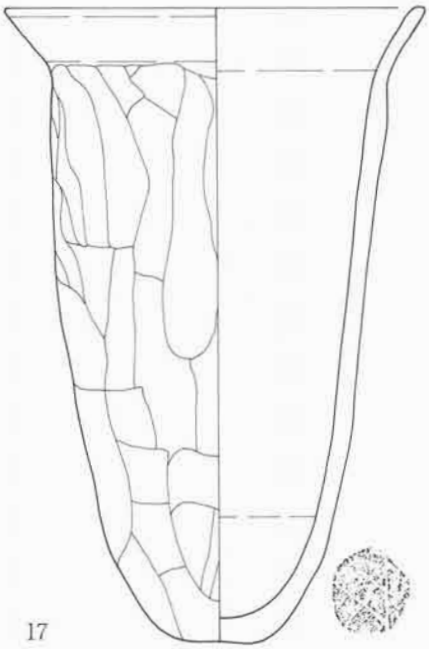


16

16　甕（土師器）
色　調　暗茶褐色
胎　土　砂粒・雲母・石英含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。底部周辺横方向ヘラ削。内外面に焼土付着。底部は不安定な平底。頸部は弱くしまり、胴部の膨らみは比較的大きい。

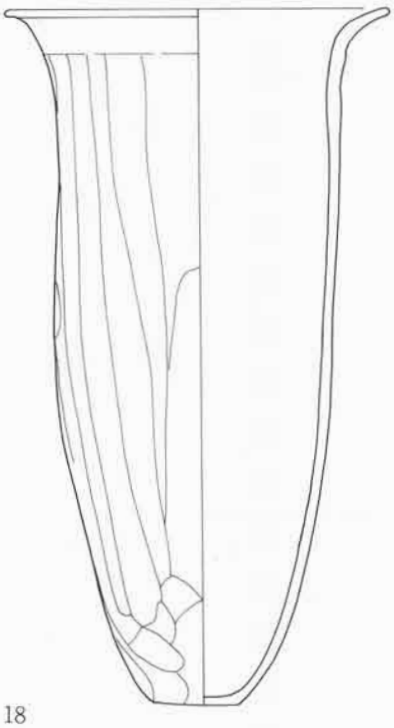
0　10cm
（1：4）

図14　遺物実測図



17

17　甕（土師器）
色　調　暗茶褐色
胎　土　石英・雲母等含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。口縁部は直線的に開く。頸部は弱くしまる。底部は小さく不安定な平底。

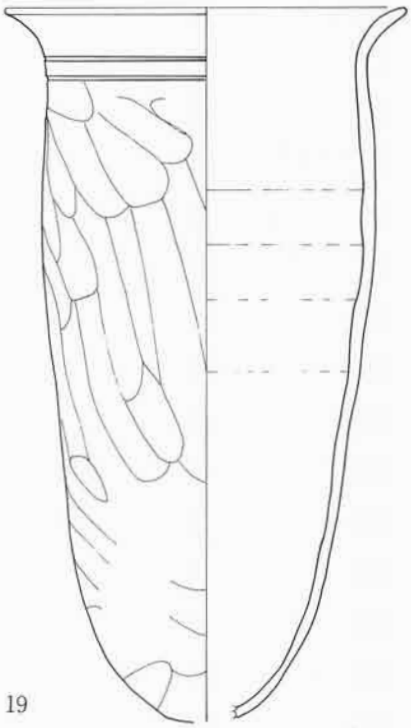


18

18　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部はしまりを欠き、口縁部は大きく外反する。胴部はほとんど膨らみを欠く。

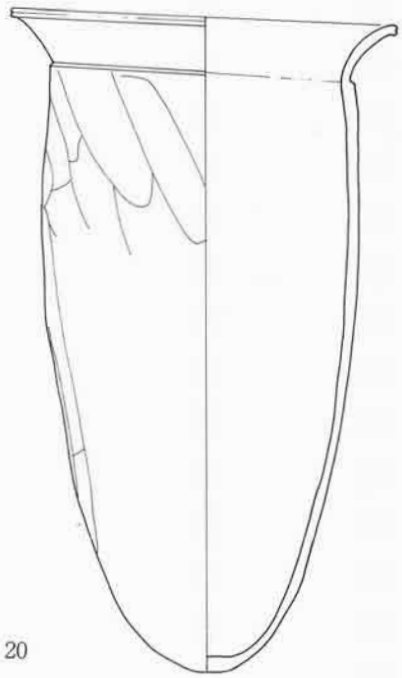
0　10cm
（1：4）

図15　遺物実測図



19

19　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。内面に粘土紐の凹凸が残る。頸部は弱くしまり、不明瞭ながら、二条の沈線を有す。

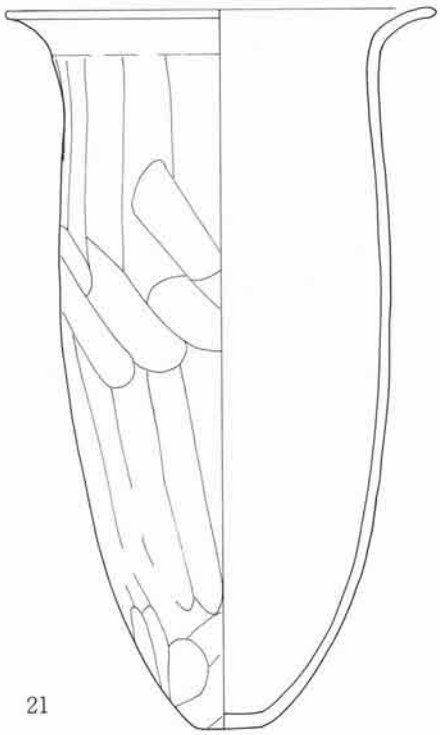


20

0　10cm
（1：4）

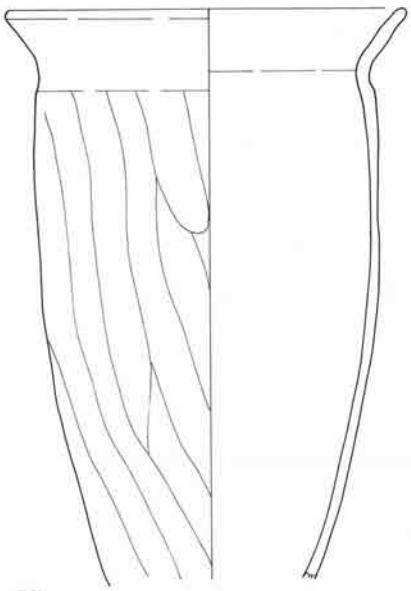
図16　遺物実測図

20　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。焼土が多く付着し、器肌の荒れが目立つ。頸部は弱くしまり、稜を有す。口唇部に段あり。底部は小さく、非常に不安定。



21

21　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削内面に粘土紐の凹凸が残る。頸部はしまりを欠き、大きく開く口縁部へスムーズに続く。胴部はほとんど膨らみを欠く。底部は小さく、非常に不安定。

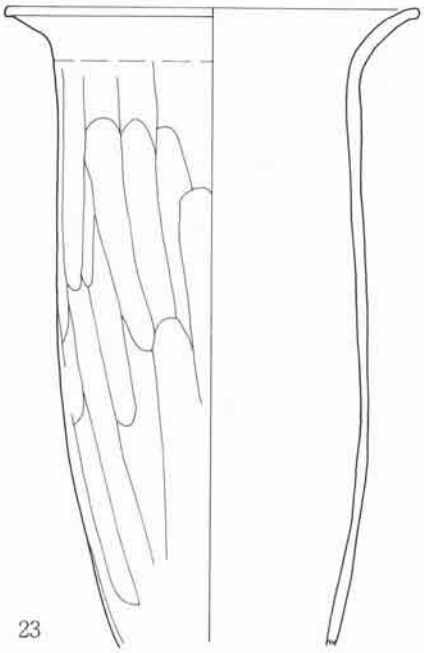


22

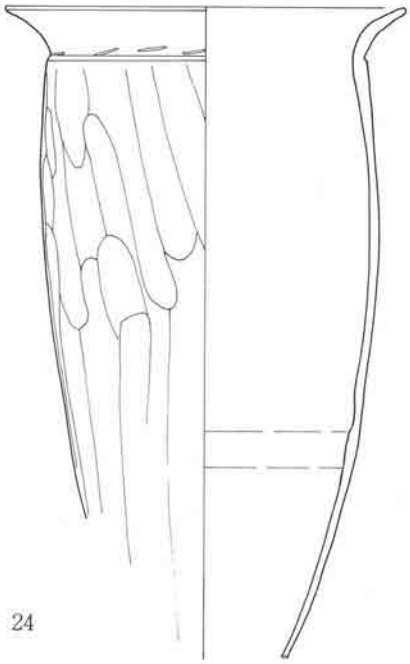
22　甕（土師器）
色　調　淡赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部は弱くしまり、口縁部は直線的に開く。

0　10cm
（1：4）

図17　遺物実測図



23



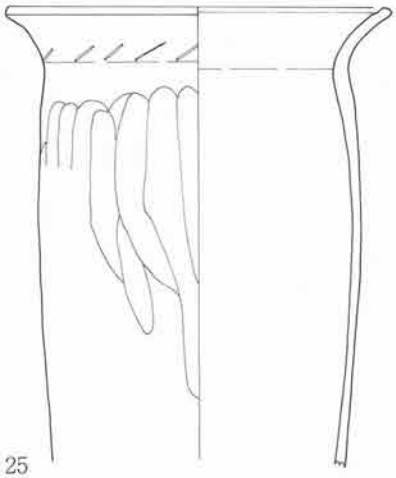
24

0　10cm
（1：4）

図18　遺物実測図

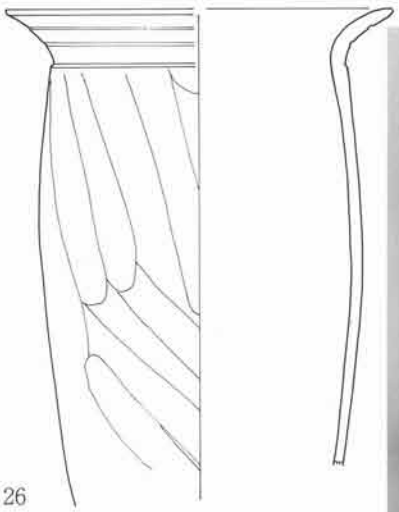
23　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部はしまりを欠き、大きく外反する口縁部へとスムーズに続く。胴部はほとんど膨らみを欠く。

24　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部顕著な縦方向ヘラ削。内面に粘土紐の凹凸残る。頸部は弱くしまり、稜を有す。ヘラ先でつけた傷が残る。



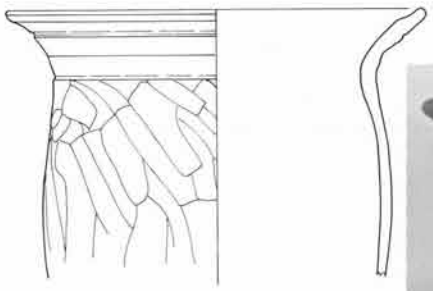
25

25　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部は弱くしまり、ヘラ先でつけた傷がある。口縁部は直線的に外反する。



26

26　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向主体のヘラ削。内面に粘土紐の凹凸が残る。頸部は弱くしまり、稜を有する。口縁部には、不明瞭な二条の沈線が認められる。

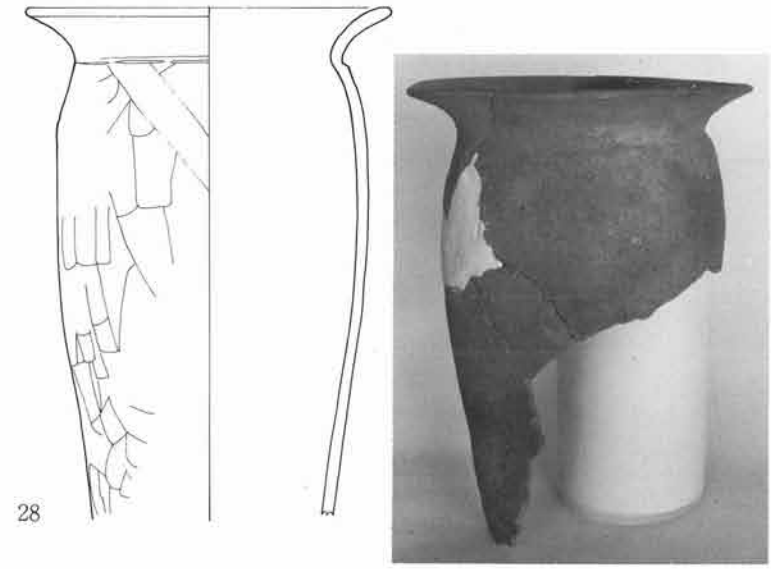


27

27　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向のヘラ削。焼土が付着する。頸部は弱くしまり、稜を有す。口縁部は段をもつ。

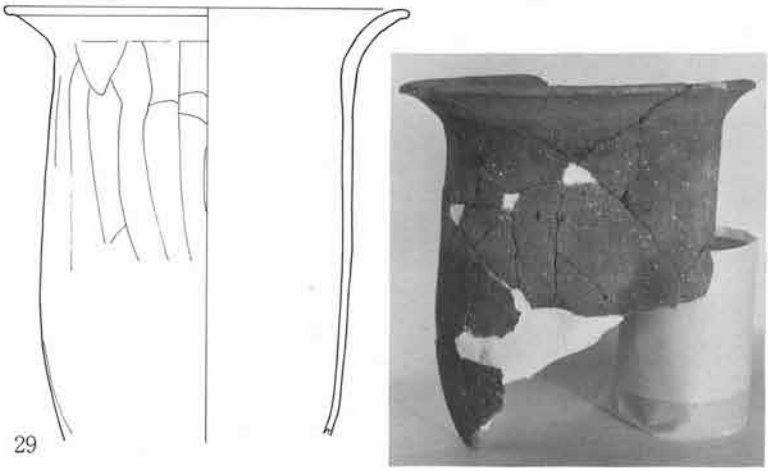
0　10cm
（1：4）

図19　遺物実測図



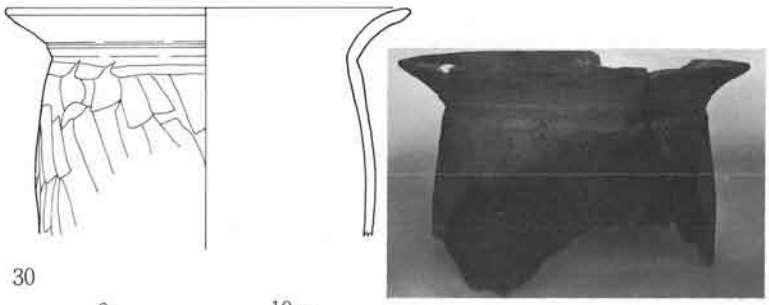
28

28　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向主体のヘラ削。頸部はしまり、不明瞭な稜を有す。ヘラ先でつけた傷がある。弱く肩が張る。



29

29　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向へラ削。頸部はしまりを欠き、大きく外反する口縁部へスムーズに続く。

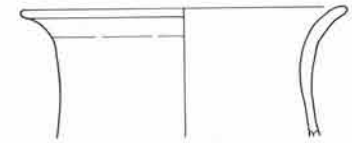


30

30　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。頸部は弱くしまり、不明瞭な稜を有す。

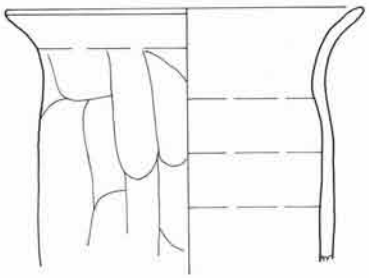
0　10cm
（1：4）

図20　遺物実測図

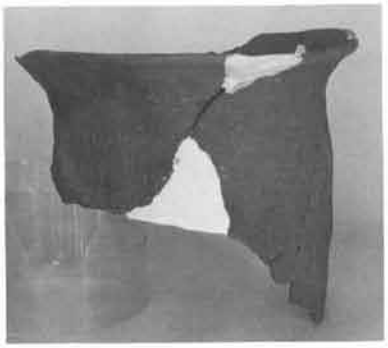


31

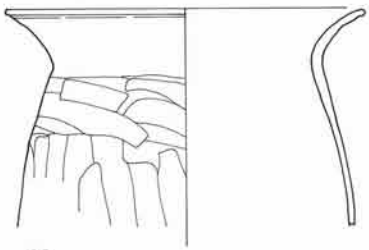
31　甕（土師器）
色調　茶褐色
胎土　石英・砂粒含有
焼成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。頸部はしまりを欠き、外反する口縁部へスムーズに続く。



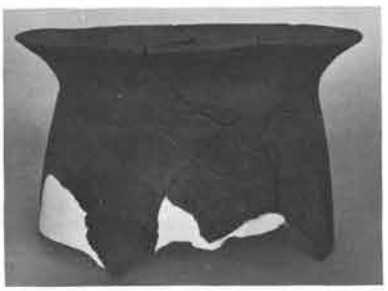
32



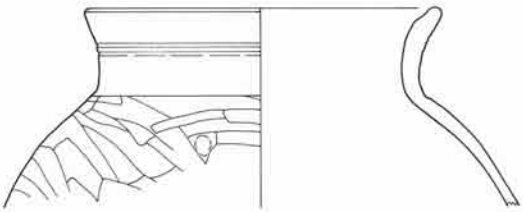
32　甕（土師器）
色調　暗赤褐色
胎土　小石粒少量含有
焼成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。内面に粘土紐の凹凸がある。頸部はしまりを欠き、外反する口縁部へスムーズに続く。



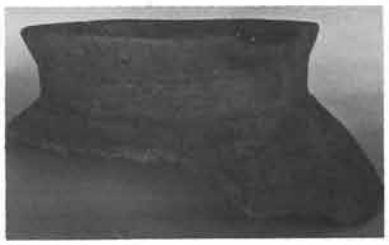
33



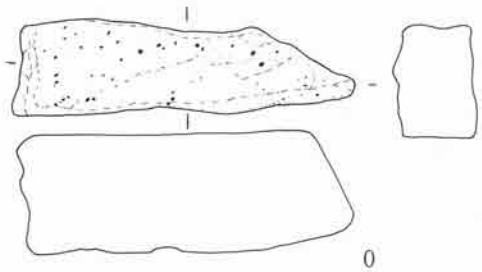
33　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向の他は縦方向のヘラ削。頸部は弱くしまる。口縁部にゆがみあり。



34



34　甕（土師器）
色　調　淡橙色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削。肩が張る。口縁部は直立し、端部でゆるく外反する。段を有す。量感があり、しっかりしたつくり。



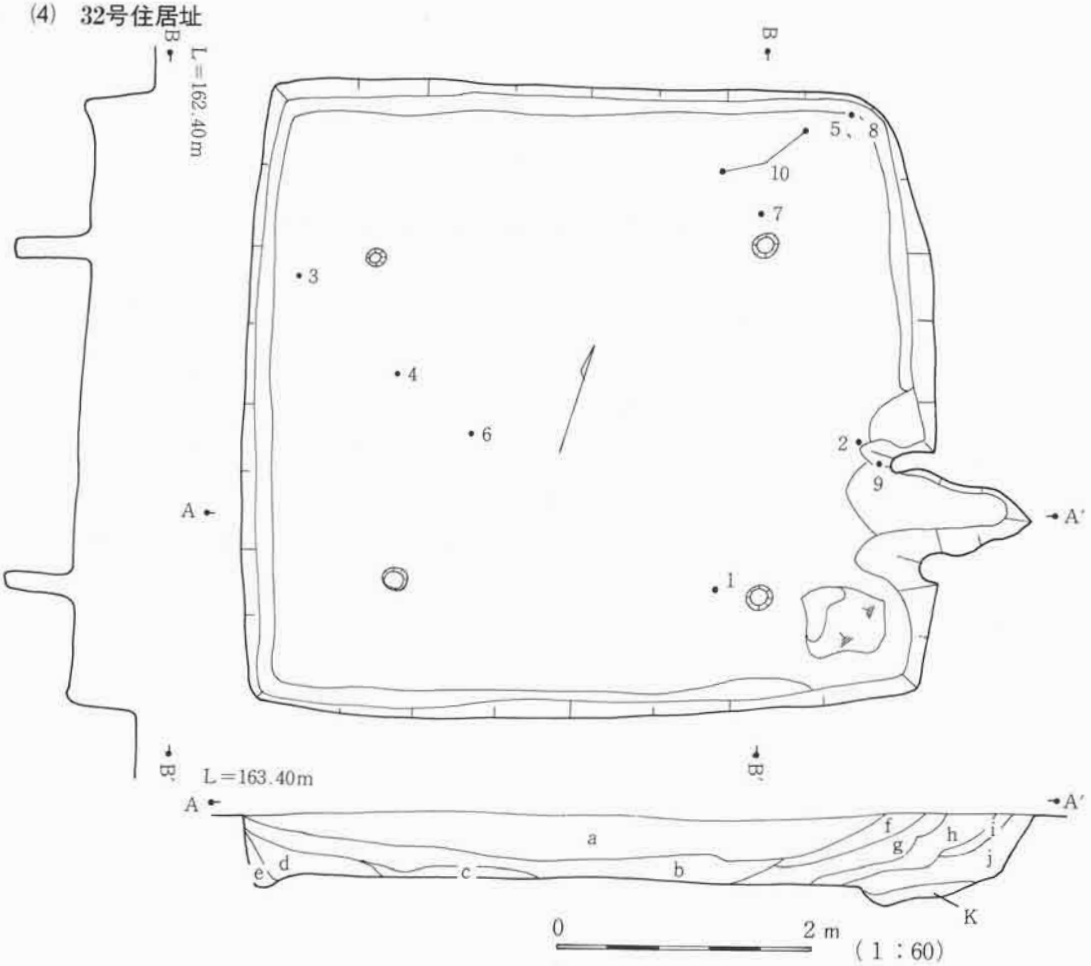
35

0　10cm
（1：4）

35　砥　石

図21　遺物実測図

(4) 32号住居址



a　茶褐色土　多量のF、C、ロームブロックを含み、砂質。
b　黒褐色土　少量のF、C、ロームブロックを含む。
c　褐 色 土　ローム粒主体。
d　黒褐色土　少量のF、C、多量のロームブロックを含む。
e　茶褐色土　少量のロームブロックを含む。しまりなし。
f　黒褐色土　少量のF、C、白色粘土を含む。
g　灰褐色土　多量の白色粘色、少量の焼土ブロックを含む。
h　茶褐色土　少量の焼土ブロック、白色粘土を含む。
i　白褐色土　白色粘土層。
j　赤 色 土　多量の焼土ブロックを含む。ぼろぼろしている。
k　黒褐色土　上部に多量の灰を含む。

図22　32号住居址実測図

位　　置　発掘区西端北寄り

規　　模　東西5.2m　南北4.8m

形　　状　長方形

西壁走向　N−16°−W

周　　溝　全周

柱　　穴　4箇

北東 Pit（20cm×20cm−63cm　円形）

北西 Pit（18cm×13cm−59cm　楕円形）

南西 Pit（20×19−51　円形）

南東 Pit（22×20−55　円形）

貯 蔵 穴　南東隅（50cm×60cm−53cm　不整形）

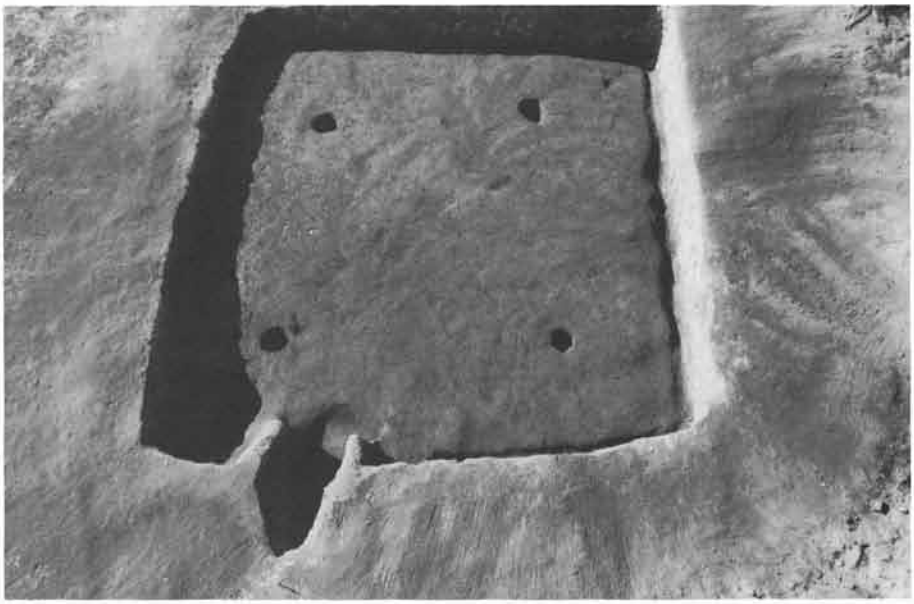
床　　全体的に固くしまる。黒色土と褐色ロームブロックの混土を主体として、F、Cを少量混ぜる貼床。厚さ

5㎝前後。

竈　東壁南寄り。北側袖部先端に長甕使用。燃焼部は壁内、構築素材は白色粘土が主体。

出土状況　住居内北東より長甕2個体分、甕1個体分が潰れた状態で検出。竈北側袖部付近からは坏がほぼ完形で見つかる。また竈前方西壁寄りでは単孔式甑がふせられた格好で出土している。近くに多孔式甑破片と椀形土器が完形でみつかる。

その他　床面および壁面に焼土、さらには家屋を構成していたと思われる材が炭化して少量検出されている。おそらく火災に遇った住居ではなかろうか。



住居址全体

遺物出土状況

II－5　遺構および出土遺物（32号住居址）

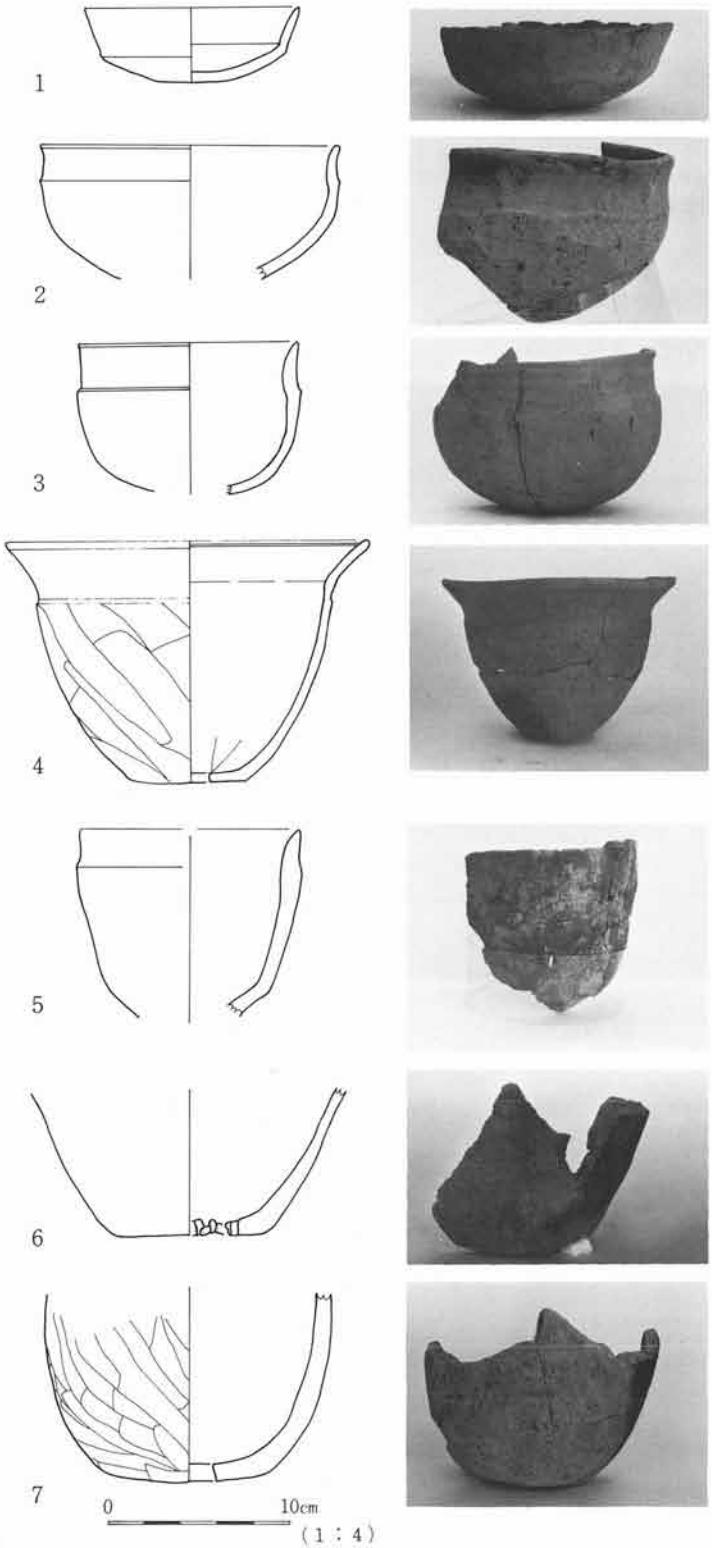


図23　遺物実測図

1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部横方向ヘラ削。尖りぎみの丸底、体部は浅い。体部と口縁部の境に稜を有す。

2　坏（土師器）
色　調　外面赤褐色、内面黒灰色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向ヘラ削。口唇部にゆがみがあり、体部は深い丸底。口縁部と体部の境に稜を有す。

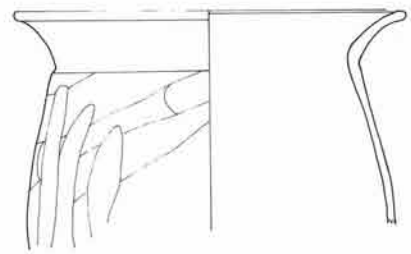
3　埦（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向の、底部不定方向のヘラ削。体部は深い丸底。口縁部と体部の境に稜を有す。

4　甑（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向ヘラ削。底部の円孔は工具で切りとる。

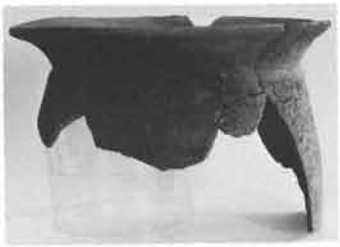
5　甑（？）（土師器）
色　調　内面淡茶褐色、外面赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部ヘラ削。外面の器肌は荒れている。器肉が厚く、ぼってりしたつくり。

6　多孔式甑（土師器）
色　調　体部黒色、底部及び内面淡黄色
胎　土　石英粒多量に含有
焼　成　軟、脆い
技法等　体部ヘラ削。底孔は現状で5孔確認できる。

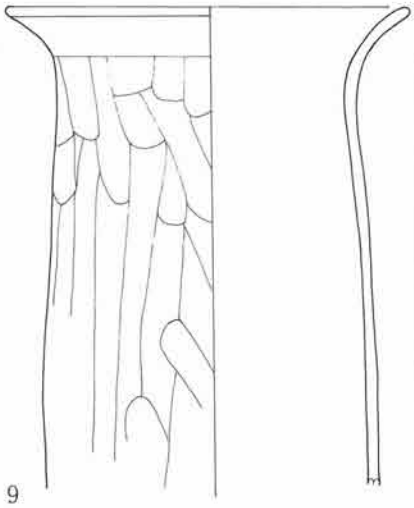
7　甑（土師器）
色　調　淡黄褐色
胎　土　砂粒、雲母含有
焼　成　良
技法等　残存する体部は斜方向ヘラ削。肉厚でしっかりしている。底部の円孔は工具で切りとる。底部は不安定。



8

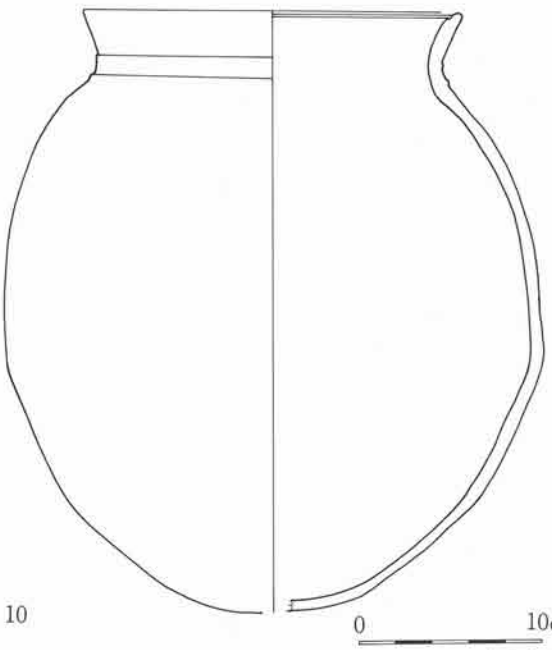


8　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向及び縦方向のヘラ削。頸部はしまりがあり稜を有す。口縁部は大きく開く。



9

9　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部はしまりを欠き、外反する口縁部へスムーズに続く。体部は直線的。



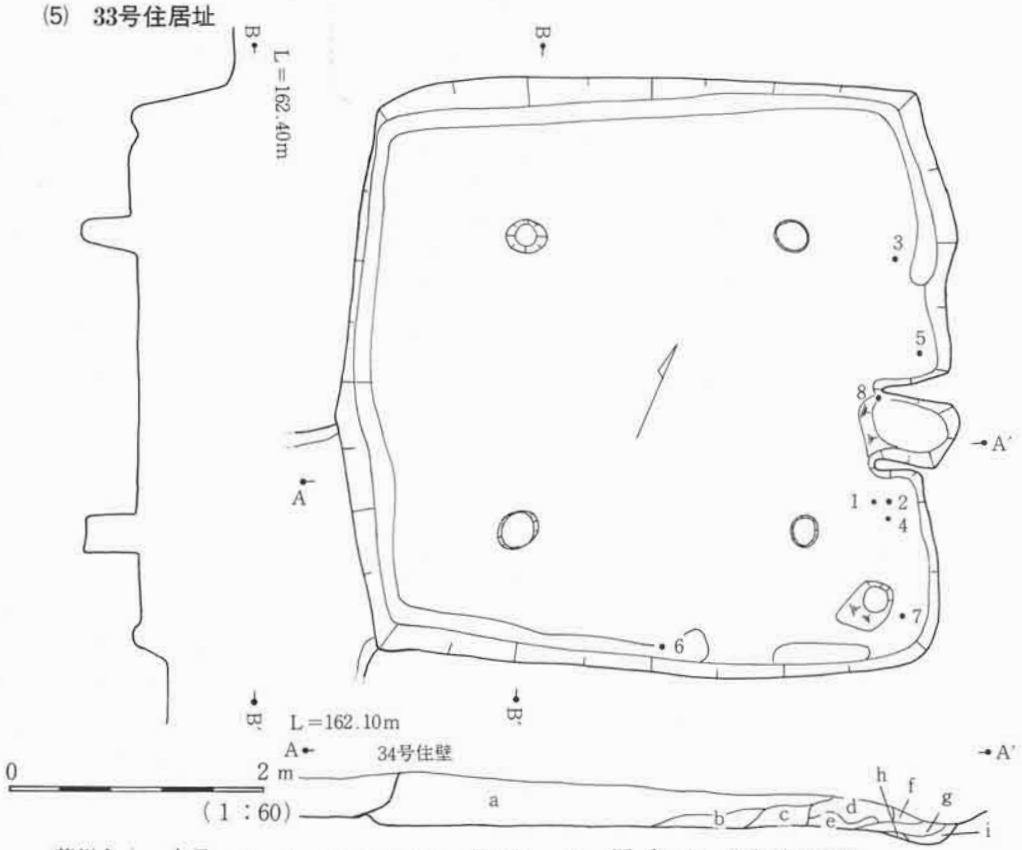
10

0　10cm
（1：4）

10　甕（土師器）
色　調　茶褐色及び赤褐色
胎　土　砂粒多量に含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向主体のヘラ削。外面の器肌は荒れている。球形の体部より立ちあがる口縁部は弱く外反し、段を有す。

図24　遺物実測図

(5) 33号住居址



a	茶褐色土	多量のF、C、ロームブロックを含む。
b	黒褐色土	多量のF、Cを含む。
c	茶褐色土	少量のF、C、ごく少量の焼土粒を含む。
d	灰褐色土	少量のF、C、焼土ブロックを含む。
e	灰色土	白色粘土主体。
f	赤褐色土	少量の焼土ブロックを含む。
g	灰褐色土	少量の白色粘土と焼土ブロックを含む。
h	赤褐色土	焼土ブロックとローム粒との混土。
i	黒褐色土	少量のロームブロックを含む。

図25　33号住居址実測図

位　　置　発掘区北東部

規　　模　東西4.4m　南北4.5m

形　　状　正方形

西壁走向　N—23°—W

周　　溝　ほぼ全周

柱　　穴　4個

北東 Pit（26cm×26cm−43cm　円形）

北西 Pit（32×26−34　楕円形）

南西 Pit（34×28−37　楕円形）

南東 Pit（20×26−45　楕円形）

貯蔵穴　南東隅（40cm×30cm−60cm　四辺形）

床　　全般にやわらかい。褐色ロームブロックを主体として、黒色土、F、Cを少量混ぜる貼床。厚さ9cm前後。

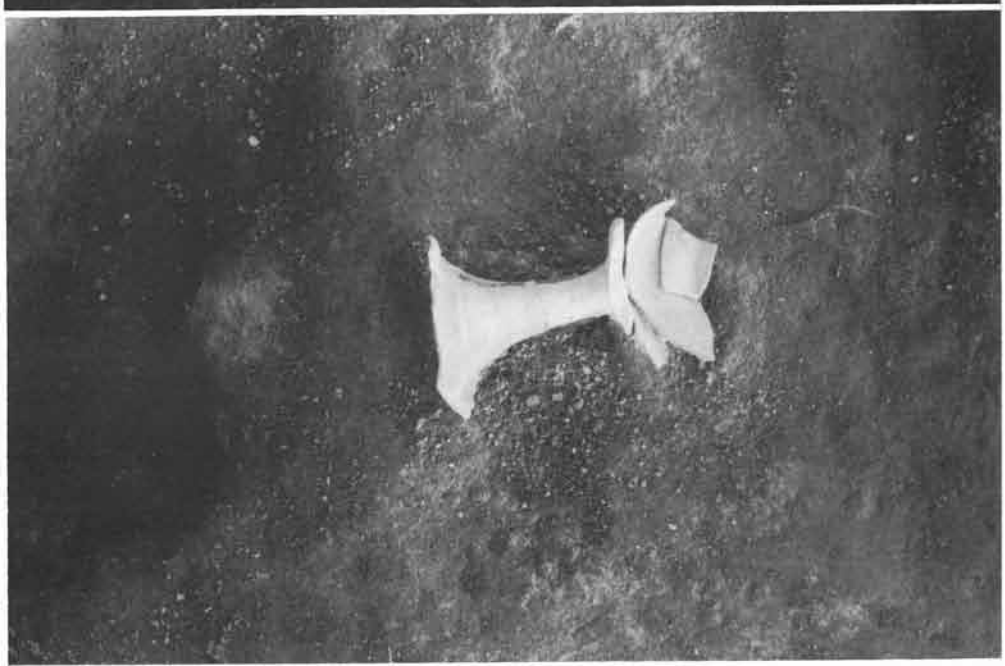
竈　　東壁やや南寄り。北側袖部先端に長甕使用。南側袖部先端および燃焼部壁一部に安山岩使用。燃焼部は壁内。構築素材は石および粘質土。

出土状況　竈の両脇から遺物の出土をみた。横倒しの状態で須恵器の高坏が、その近くには横に傾いた完形の小型甕が出る。竈を挟んで反対側では、単孔式甑が壊れた状態で出土している。

その他　34号住居址と重複する。本住居址が新。

住居址全体

竈付近遺物出土状況



高坏出土状況

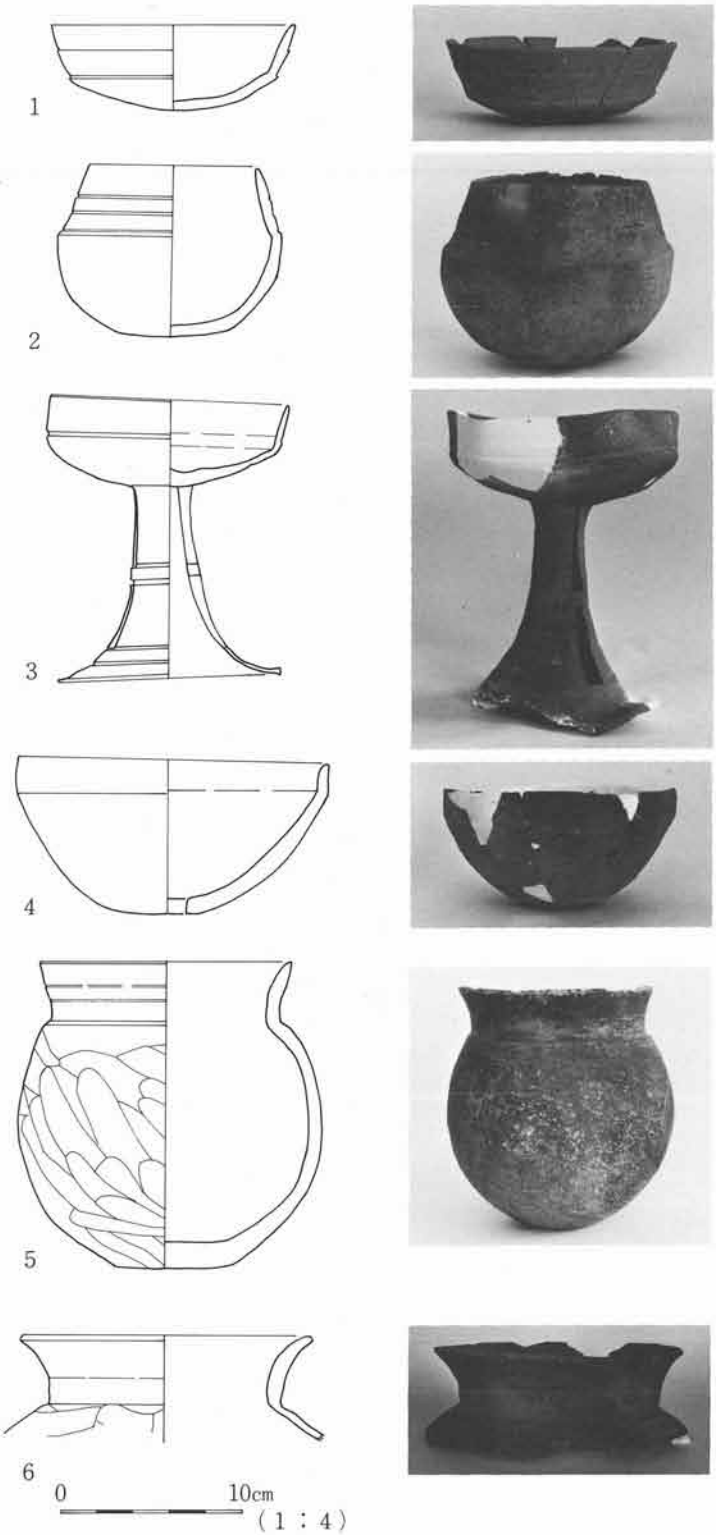


図26　遺物実測図

1　埦（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　石英・砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部及び内面横ナデ。底部不定方向ヘラ削。ほとんど直に開く口縁部は段を有す。量感があり、全体的にていねいなつくり。

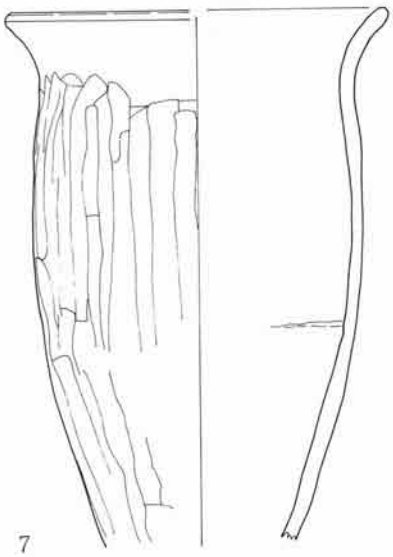
2　埦（土師器）
色　調　黒紫色
胎　土　石英・雲母含有
焼　成　悪い
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向ヘラ削。定部不定方向ヘラ削。器肌が荒れている。深い丸底。口縁部は内傾し、二条の沈線を有す。

3　高坏（須恵器）
色　調　青灰色
胎　土　小石粒含有
焼　成　堅緻
技法等　右回転ロクロナデ。脚部と接合後回転ヘラ削。脚部は二段透かし（上段三角形、下段台形）を二方向に持つ。透かし部分は鋭利な工具使用の痕跡がみられる。透かし相互間と下段透かしの下部に低い凹凸帯がみられる。全体的にゆがみが大きい。

4　甑（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。底部不定方向ヘラ削。底部の円孔は工具で切りとる。口縁部は直立する。全体に器肉があり、量感がある。

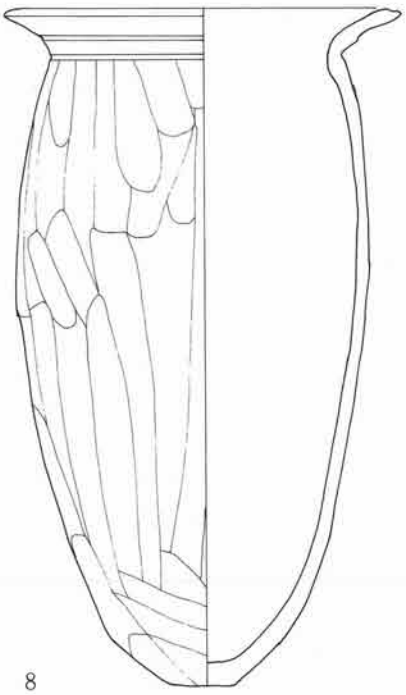
5　小型壺（土師器）
色　調　黒褐色
胎　土　石英・雲母含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部斜方向ヘラ削。底部不定方向ヘラ削。器面が一部荒れている。肩が張り、口縁部には二条の沈線を有す。

6　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削。肩は大きく張出す。



7

7　甕（土師器）
色　調　淡赤褐色
胎　土　砂粒、雲母、石英含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部は弱くしまり、口縁部は外反し肉厚。ずん胴。



8

8　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。底部周辺は斜方向ヘラ削。頸部はしまり、口縁部は大きく外反する。口縁部には二条の沈線を有す。

0　10cm
（1：4）

図27　遺物実測図

(6) 43号住居址

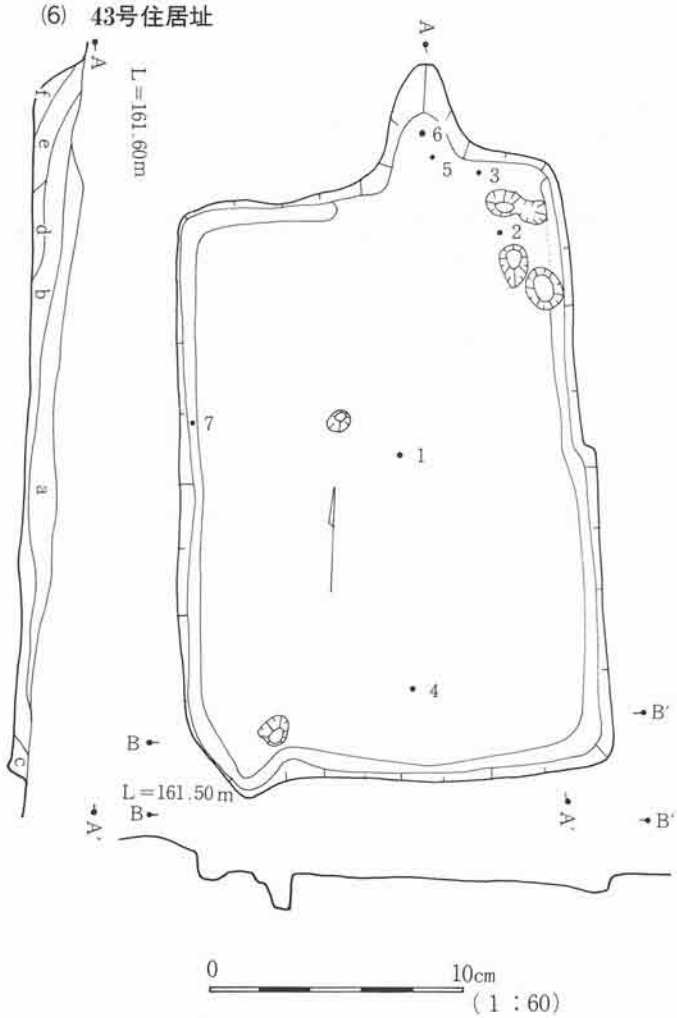


図28　43号住居址実測図

a　茶褐色土　多量のF、C、ローム粒を含む。
b　茶褐色土　多量のF、C、黒色土、少量の焼土粒を含む。
c　茶褐色土　少量のF、ロームブロックを含む。
d　灰褐色土　多量の白色粘土、少量のF、焼土粒を含む。
e　赤褐色土　多量の焼土粒、白色粘土、ごく少量の炭化物を含む。
f　茶褐色土　多量のローム粒、少量の焼土粒を含む。しまりなし。

位　　置　発掘区北部
規　　模　東西3.1m　南北4.5m（南北が極端に長い）
形　　状　長方形
西壁走向　N
周　　溝　ほぼ全周
柱　　穴　なし
貯 蔵 穴　北東隅（30cm×20cm－12cm　楕円形）
床　　全般にやわらかい。ローム床。
竈　　北壁東寄り。燃焼部は壁外。構築素材は白色粘土が主体。
出土状況　竈および貯蔵穴周辺からの遺物出土が多い。貯蔵穴付近から出土した高台付椀は2個とも伏せた状態にあった。

住居址全体

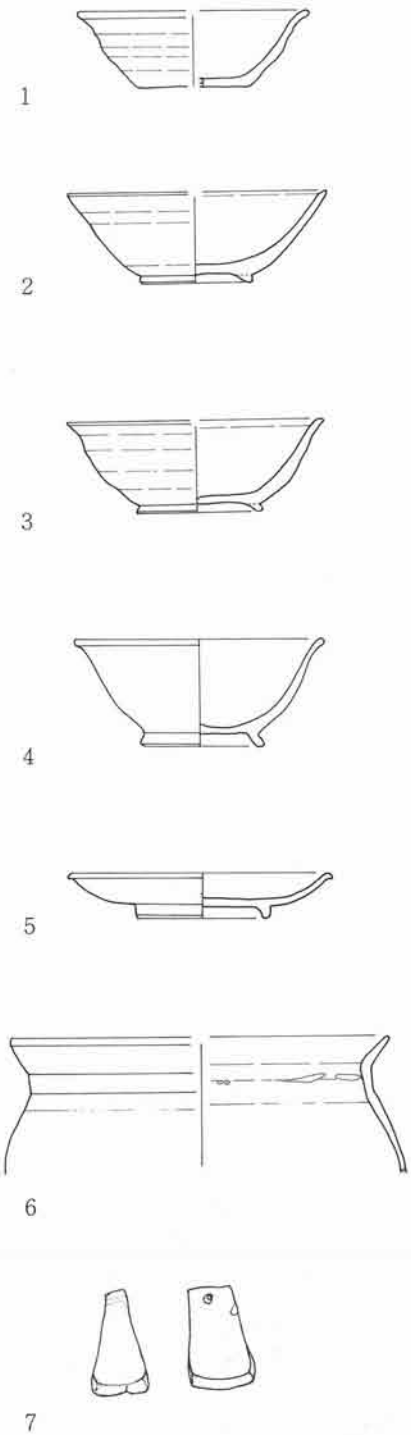


図29　遺物実測図

1　椀（須恵器）
色　調　青灰色
胎　土　小石粒含有
焼　成　良
技法等　右回転ロクロ使用。器面にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。

2　高台付椀（須恵器）
色　調　灰褐色
胎　土　小石・砂粒含有
焼　成　悪い
技法等　右回転ロクロ成形。回転糸切り後高台貼付け。

3　高台付椀（須恵器）
色　調　一部灰褐色、一部灰色
胎　土　砂粒・小石粒多く含む
焼　成　悪い。いぶしがかる
技法等　右回転ロクロ使用。器面にロクロ痕の凹凸が残る。底部回転糸切後高台貼付け。雑なつくり。

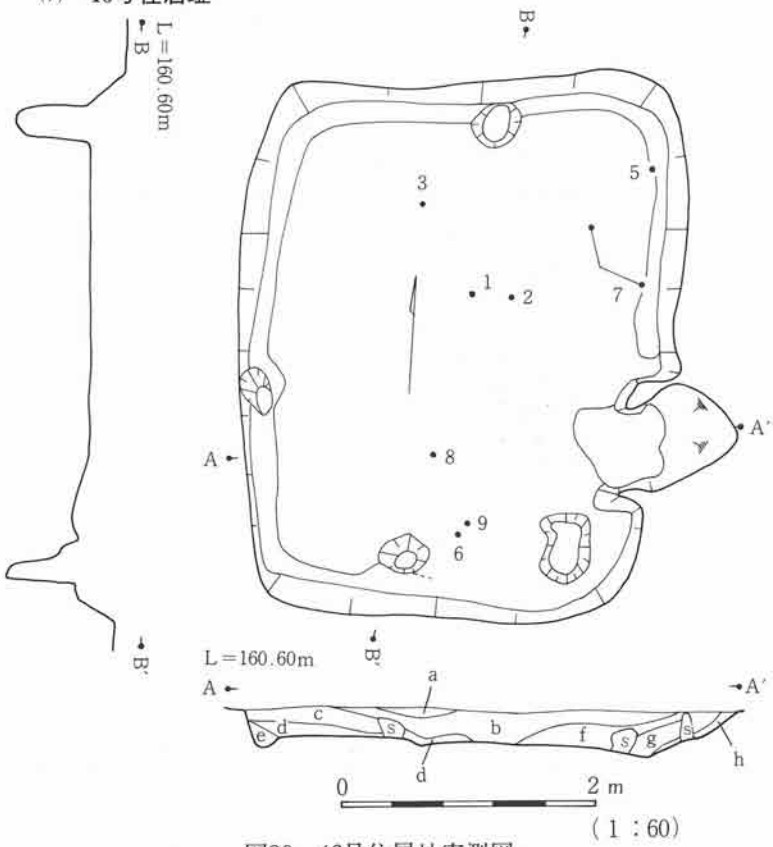
4　高台付椀（須恵器）
色　調　灰橙色
胎　土　砂粒含有
焼　成　悪い
技法等　右回転ロクロ使用。底部回転糸切後高台貼付け。

5　高台付皿（灰釉、0―53号窯式）
色　調　灰白色、釉は縁褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　右回転ロクロ使用。体部外面にロクロ痕の凹凸が残る。底部回転ヘラ削後高台貼付。釉は刷毛塗り。

6　甕（土師器）
色　調　暗赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削。器肉は薄い。

7　砥石

(7) 46号住居址



a　黒褐色土　多量のF、Cを含む。
b　茶褐色土　多量のF、C、少量の焼土粒を含む。
c　茶褐色土　多量のF、C、少量のロームブロックを含む。
d　茶褐色土　多量のロームブロック、少量のC、炭化物を含む。
e　茶褐色土　ローム粒主体。しまりなし。
f　茶褐色土　多量のc、焼土粒、灰を含む。
g　赤褐色土　多量の焼土ブロックと炭化物、灰との混土。
h　赤褐色土　少量の炭化物と焼土粒を含む。
s　石

図30　46号住居址実測図

位　　置　発掘区西端で中央より北寄り

規　　模　東西3.1m　南北3.9m

形　　状　長方形

西壁走向　N－1°－E

周　　溝　ほぼ全周

柱　　穴　3個、壁に接する位置で確認。
北壁下 Pit（35cm×40cm－60cm　楕円形）
西壁下 Pit（40×25－42　楕円形）
南壁下 Pit（40×32－60　楕円形）

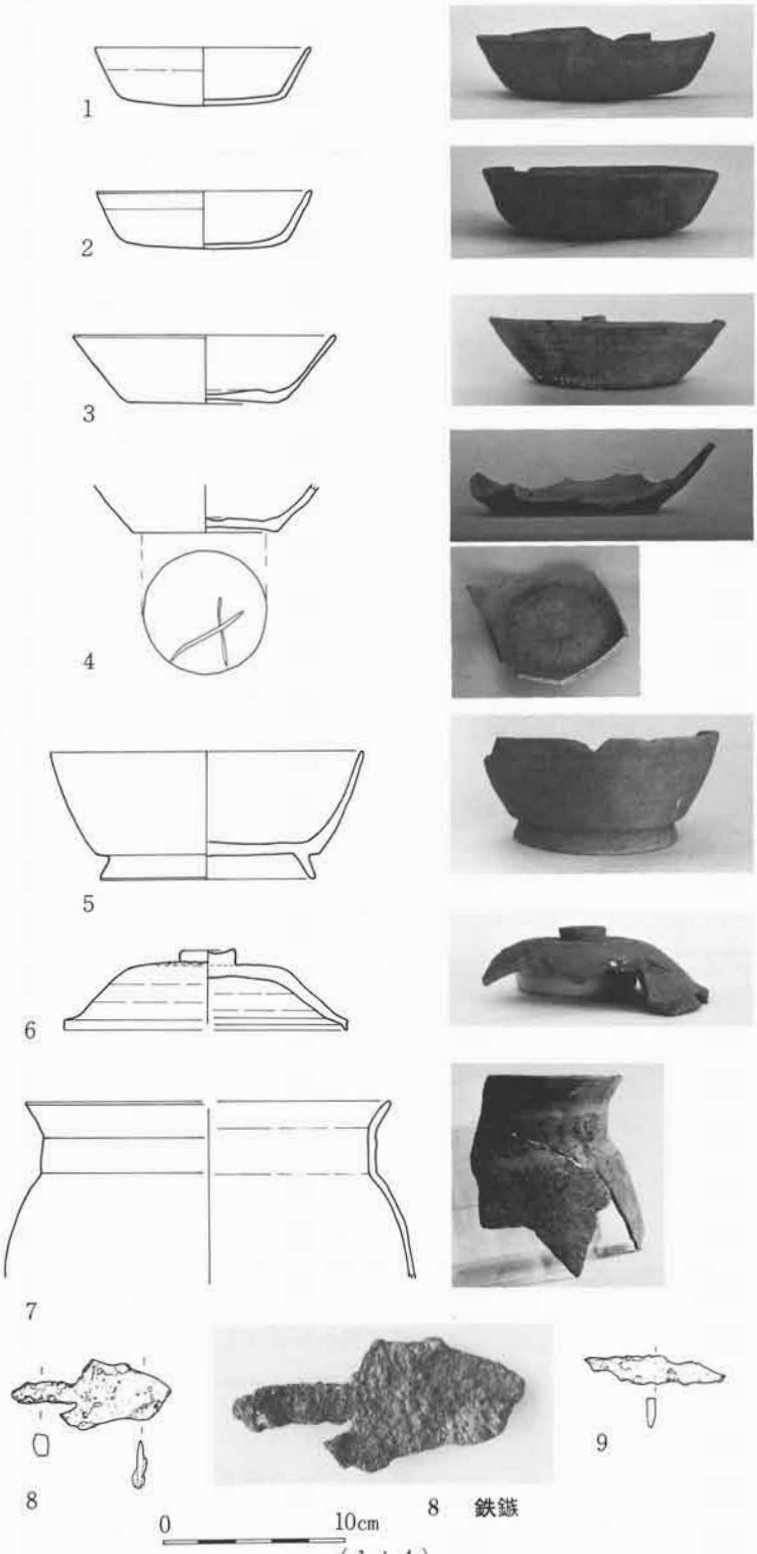
貯 蔵 穴　南東隅（58cm×35cm－12cm　不整形）

床　　竈周辺および中央部がしまる。黒色土を主体として、F、Cを少量混ぜる貼床。厚さ3cm前後。

竈　　東壁南寄り。北側袖部に砂岩使用。燃焼部は壁中。構築素材に石も多く使用。

出土状況　床面中央部と北西隅近くから坏3個体が出土。1個は上向きで残りは伏せた状態であった。また、東壁際の高台付埦は流れ込みと断定した。

遺物出土状況



8　鉄鏃

図31　遺物実測図

1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　雲母等含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。器肉は薄い。スス付着。

2　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。低部不定方向ヘラ削。

3　坏（土師器）
色　調　灰色
胎　土　良
焼　成　やや良
技法等　右回転ロクロ使用。内面底部、体部外面にロクロ痕による凹凸が残る。底部回転糸切未調整。底径は口径の½より大きい。

4　坏（須恵器）……埋土中
色　調　内面灰白色、外面灰色
胎　土　良（砂粒少量含有）
焼　成　良
技法等　右回転ロクロ使用水びき成形。内面底部にロクロ痕による凹凸が残る。底部回転糸切未調整。内面底部にヘラ書。

5　高台付埦（須恵器）
色　調　灰褐色
胎　土　小石粒少量含有
焼　成　やや良
技法等　右回転ロクロ使用水びき成形。底部回転糸切り後高台貼付け。ふん張りの強い高台が底部端部より内側に付く。

6　蓋（須恵器）
色　調　青灰色
胎　土　長石・石英粒等多い
焼　成　良
技法等　天井部回転ヘラ削調整。内外面ともロクロ痕は明瞭。ツマミは擬宝珠状。天井は高く平ら。端部は小さく折れる。

7　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削。口縁部に指圧痕の凹凸がある。器肉は薄い。

9　刀子

(8) 47号住居址

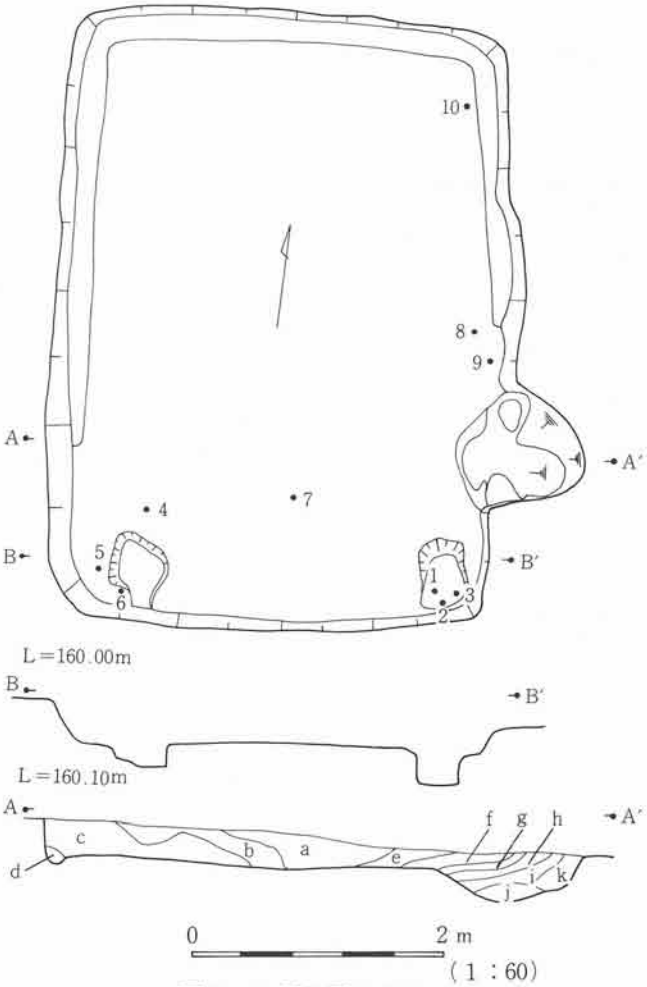


図32　47号住居址実測図

貯　蔵　穴

a	茶褐色土	多量のC、ローム粒、少量のF、焼土粒を含む。
b	黒褐色土	多量のF、C、少量の焼土粒、炭化物を含む。
C	茶褐色土	多量のF、Cを含む。
d	茶褐色土	少量のF、ロームブロックを含む。しまりなし。
e	茶褐色土	多量のF、C、少量の焼土粒を含む。
f	灰褐色土	少量のF、C、焼土粒、白色粘土を含む。
g	灰褐色土	多量の白色粘土、少量のF、C、焼土粒を含む。
h	黒 色 土	少量のF、C、焼土粒を含む。
i	赤褐色土	少量の焼土粒を含む。
j	灰褐色土	多量の灰、焼土ブロックを含む。
k	黒褐色土	多量の黒色土、焼土ブロック、少量のF、Cを含む。

位　　置　発掘区中央よりやや北寄り

規　　模　東西3.5m　南北4.8m

形　　状　長方形

西壁走向　N－6°－W

周　　溝　南壁下を除いた箇所で確認

柱　　穴　なし

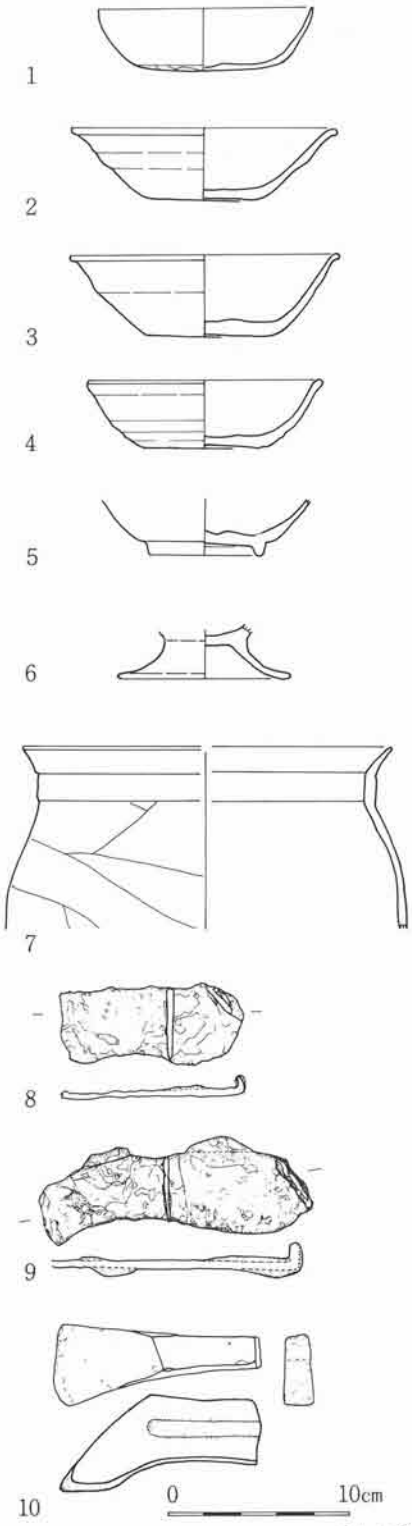
貯 蔵 穴　南東隅（60cm×38cm－48cm　長方形）。上端の東側と西側に平扁な石が据えられていた。

床　　全般に軟弱。黒色土と褐色ロームブロックを主体として、F、Cを少量混ぜる貼床。厚さ3cm前後。

竈　　燃焼部は壁外。構築素材に白色粘土も使用。

出土状況　床面中央より南寄りに遺物の出土をみる。とくに貯蔵穴内からはほぼ完形の坏3個体が口縁部を上にして出土している。

竈北側から出土した鉄製鎌2丁は端が床に着くものの、流れ込みの様相も窺える。なお、1mほど離れて大部使いこんだ砥石が1個みつかっている。



（1：60）

図33　遺物実測図

8　鉄製鎌

9　鉄製鎌

10　砥石

1　坏（土師器）
色　調　灰橙色
胎　土　雲母等含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。体部ヘラ削り後ナデ。

2　坏（須恵器）
色　調　灰白色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや悪い
技法等　右回転ロクロ使用。底部回転糸切未調整。体部にロクロ痕による凹凸が明瞭に残る。底径は口径の½より小さい。

3　高台付椀（須恵器）
色　調　灰白色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　右回転ロクロ使用。底部回転糸切後高台貼付け。全体にていねいなつくり。高台を欠く。

4　坏（須恵器）
色　調　灰白色
胎　土　小石粒含有
焼　成　悪い、ややいぶしがかる。
技法等　右回転ロクロ使用。底部回転糸切未調整。器面にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。

5　高台付椀（須恵器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　良
焼　成　やや悪い
技法等　右回転ロクロ使用。内面底部にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。底部回転糸切後高台はりつけ、高台は雑なつくり。

6　台付甕脚部（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　回転ナデ調整。八の字に大きく開き器高が低く安定している。

7　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部横方向ヘラ削。体部の器肉に比して、口縁部が厚い。

(9) 55号住居址

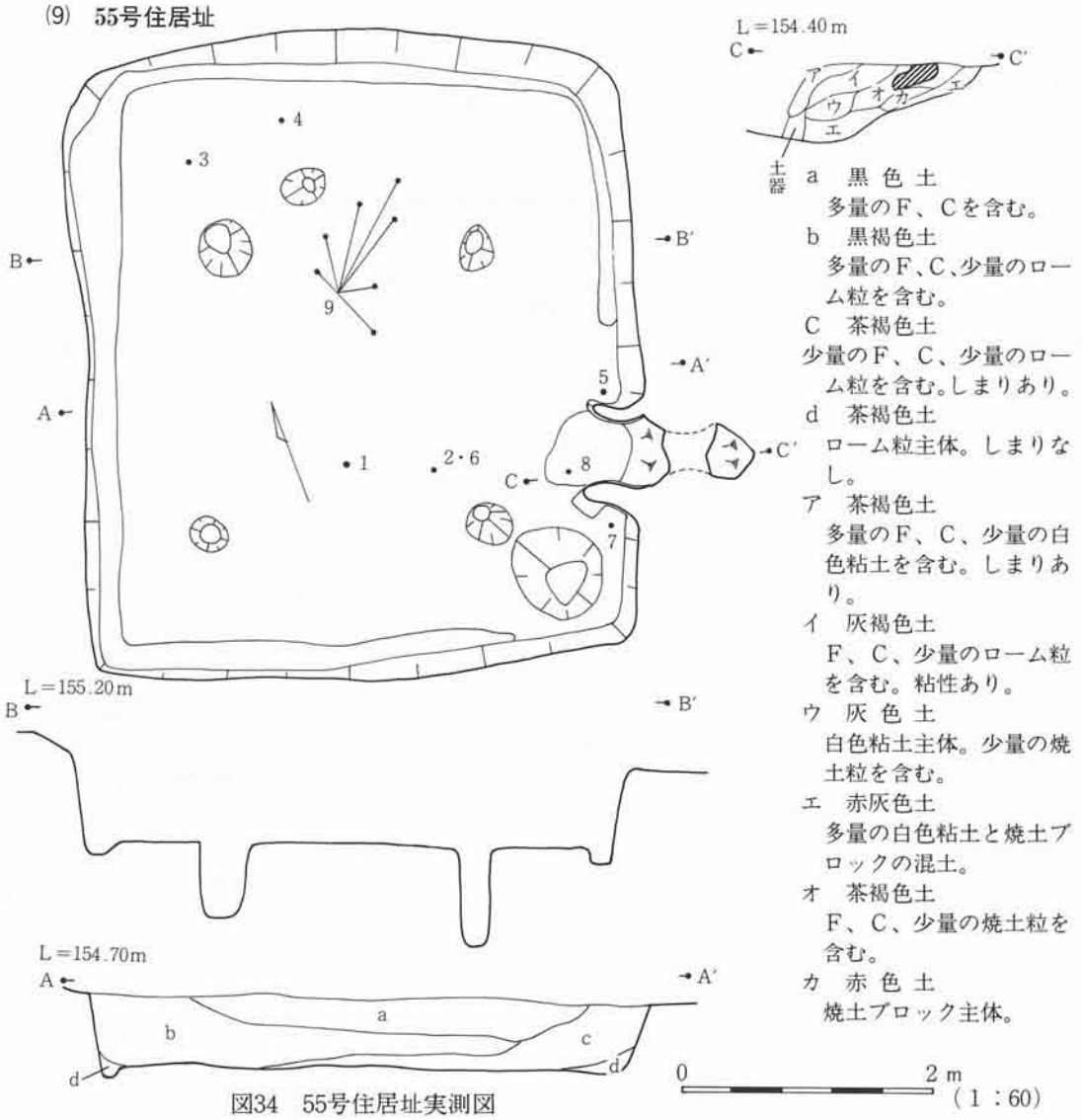


図34 55号住居址実測図

位　置　発掘区東端でやや南寄り

規　模　東西4.2m　南北4.8m

形　状　長方形

西壁走向　N—20°—E

周　溝　全周

柱　穴　4個

北東（40cm×26cm－82cm　不整形）

北西（42×44－58　円形）

南西（30×30－74　円形）

南東（40×34－60　円形）

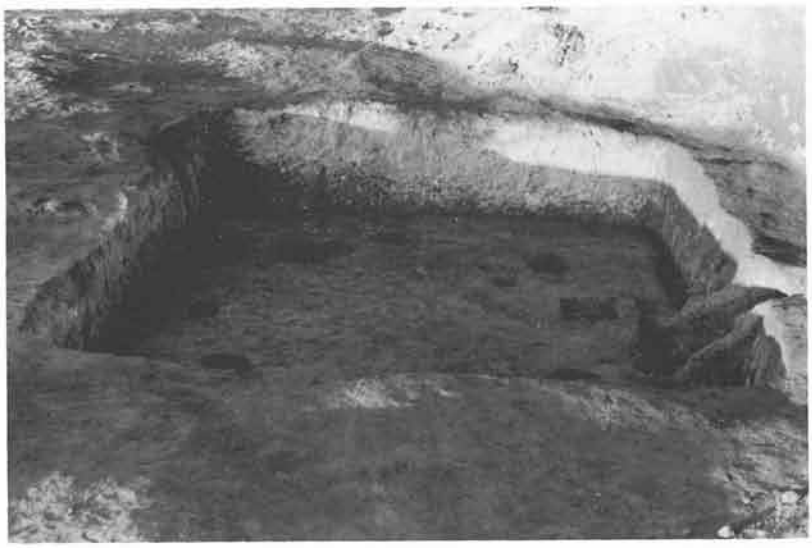
貯蔵穴　南東隅（86cm×68cm－66cm　円形）

床　全般にかたい。黒色土を主体として、褐色ロームブロック、F、C、焼土粒を少量混ぜる貼床。厚さ13cm前後。

竈　東壁南寄り。南側袖部先端に長甕使用。北側先端部の甕は確認されなかった。燃焼部は壁内。構築素材は白色粘土主体。

出土状況　北西部分で坏（大型）2個体が出土。うち1個体は流れ込みの様相を呈

す。竈前の甕は３個体分確認したが、ひどく潰された状態であった。竈北側袖近くから出土した甕は口を西に向け、やや潰れた恰格であった。全体的に多くの土器が破片状態であった。



住居址全体

遺物出土状況

竈付近遺物出土状況

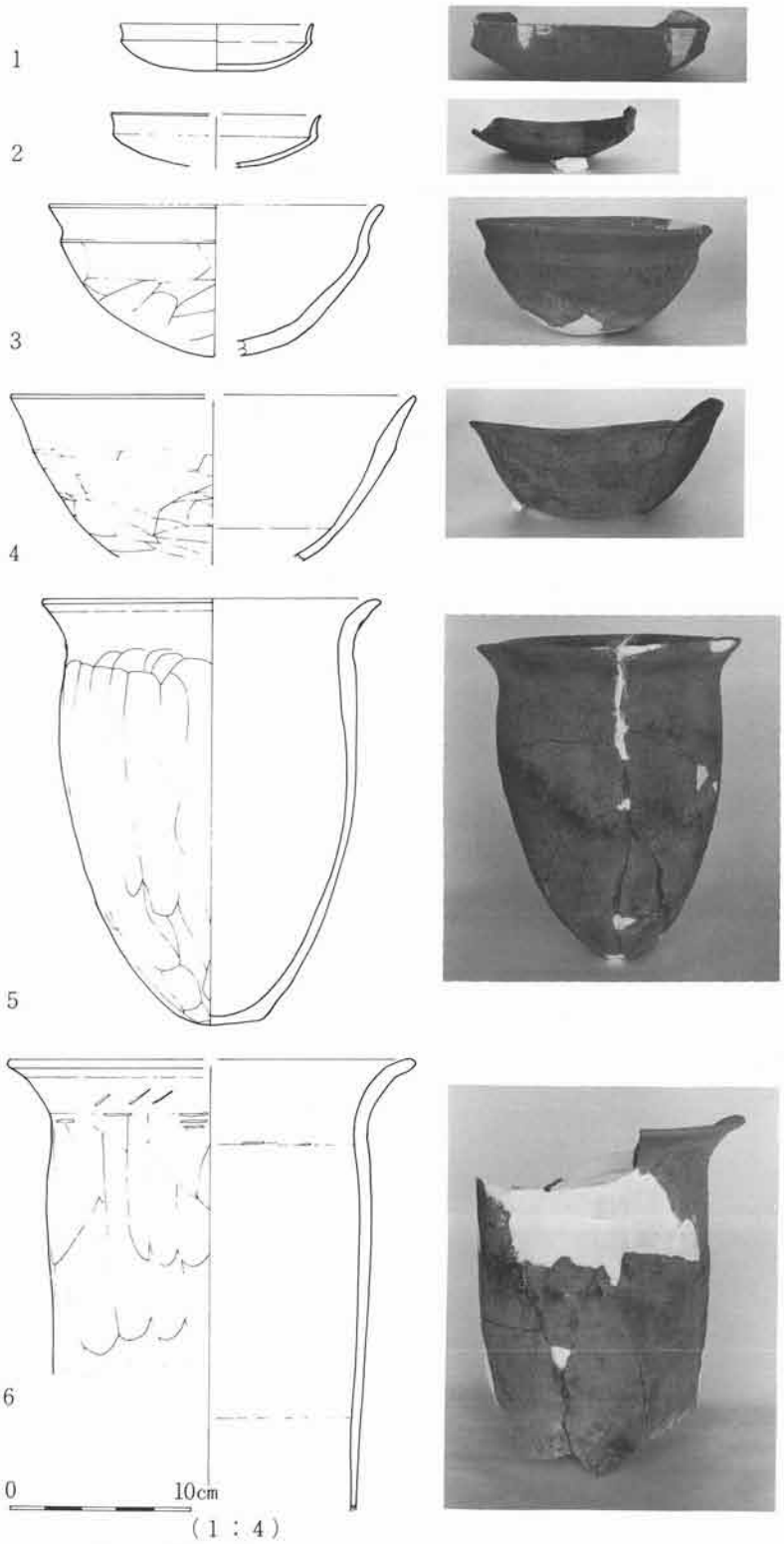


図35　遺物実測図

1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部と底部の境に明瞭な稜を有す。口縁部は直立し、端部で弱く外反する。

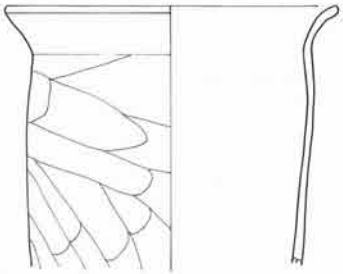
2　坏（土師器）
色　調　暗赤褐色
胎　土　良
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。口縁部と底部の境に稜を有す。口縁部は直立し、端部で弱く外反する。

3　坏（土師器）
色　調　橙褐色
胎　土　良（砂粒少量含有）
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向ヘラ削。底部は半球形。口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部は外反する。

4　坏（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向ヘラ削。口縁部は弱く外反し、体部は半球形。境に稜を有す。

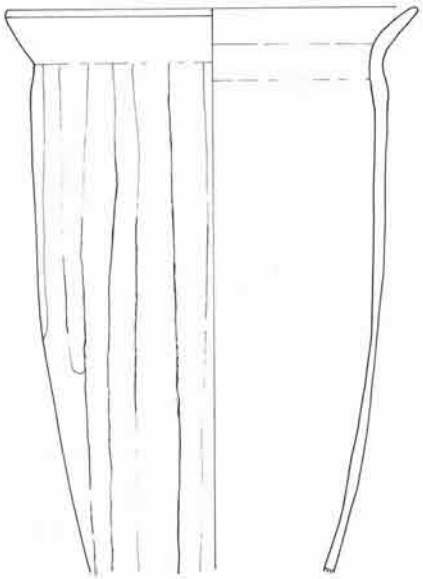
5　甕（土師器）
色　調　茶色
胎　土　砂粒・雲母含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。外面器肌が荒れ、焼土が付着。ゆがんでいる。底部は非常に不安定。

6　甕（土師器）
色　調　淡褐色
胎　土　砂粒・小石粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。内面に粘土紐まきあげ痕あり。頸部は弱くしまるが、胴部はほとんど膨らみがない。



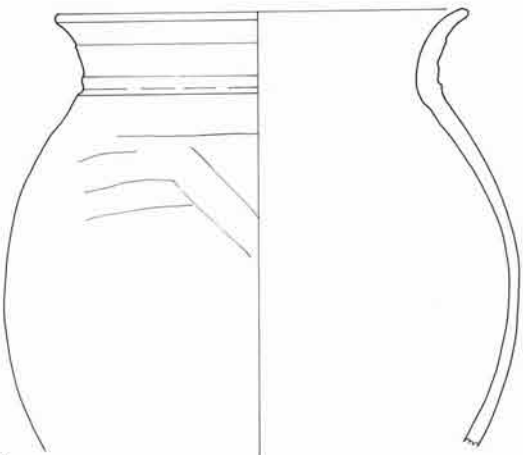
7

7　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　雲母・砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。肩部斜方向の胴部縦方向のヘラ削。頸部は弱くしまる。胴部は膨らみを欠く。



8

8　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。頸部は弱くしまり、肩部に段を有す。胴部は膨らみを欠く。



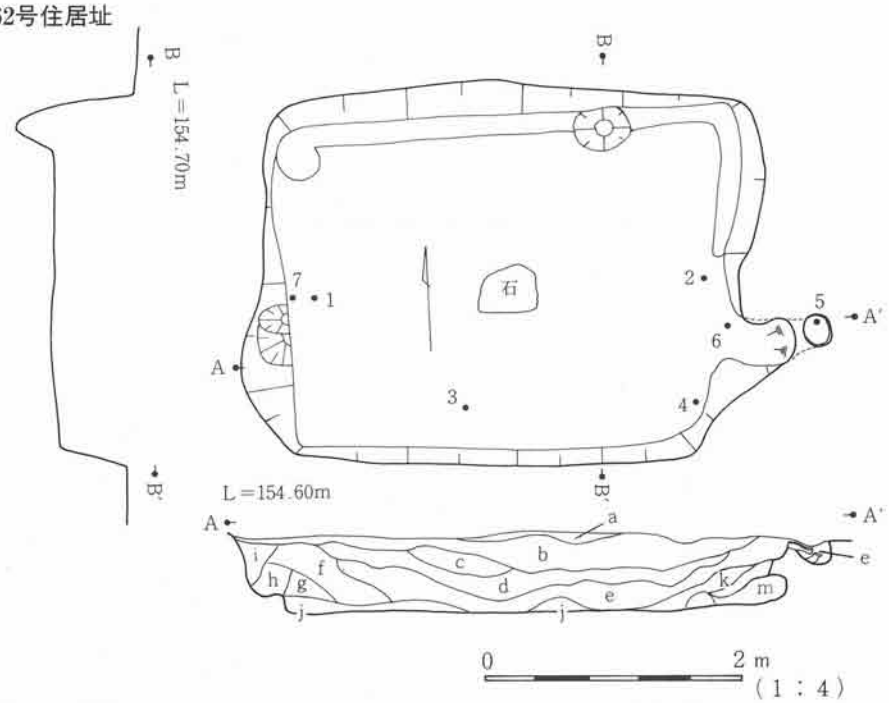
9

0　10cm
（1：4）

9　甕（土師器）
色　調　橙色
胎　土　砂粒・雲母・石英等含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部ヘラ削。口縁は外反し、段を有す。器面の荒れがひどいが、体部上半は横方向、中下半は斜方向の削りであることが認められる。

図36　遺物実測図

⑽ 62号住居址



a　黒色土　B軽石
b　黒色土　多量のF、Cを含む。しまりあり。
c　黒褐色土　多量のF、C、ローム粒を含む。
d　黒褐色土　C層より少ないものの多量のF、C、ローム粒を含む。
e　茶褐色土　少量のF、C、ロームブロックを含む。しまりあり。
f　茶褐色土　多量のF、C、少量のロームブロックを含む。
g　茶褐色土　少量のF、C、多量のロームブロックを含む。
h　茶褐色土　多量のF、C、ロームブロックを含む。
i　茶褐色土　ごく少量のF、C、少量のローム粒を含む。
j　褐色土　ごく少量のF、C、多量のローム粒を含む。粘性あり。
k　灰褐色土　多量の白色粘土、少量のF、C、ごく少量の焼土粒、炭化物を含む。
l　白褐色土　白色粘土主体。
m　褐色土　多量の焼土粒、少量の白色粘土を含む。

図37　62号住居址実測図

位　置　発掘区南部

規　模　東西3.5m　南北2.6m

形　状　長方形

西壁走向　N－2°－E

周　溝　北壁下のみ確認

柱　穴　なし。しかし、西壁および北壁下に柱穴らしきものが確認されたが、対応するピットは検出できなかった。

貯蔵穴　なし。

床　全般にやわらかい。黒色土と褐色ロームブロックを主体とした貼床。厚さ4cm前後。

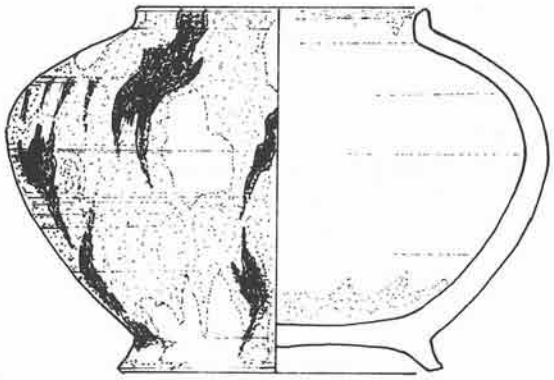
竈　東壁南寄り。燃焼部は壁外。構築素材は石と白色粘土使用。煙道部先端に甕の口縁部使用。

出土状況　西壁下よりほぼ完形の奈良三彩小壺が口を北に向けた状態で出土。レベルは床面の3cmほど上である。蓋は発見されなかった。その近くに匙状の鉄製品が検出された。匙状鉄製品は竈内からもみつかっている。床面中央には40cm×50cmほどの上面平坦な石が据えられた状態で出土している。竈脇からは、「宅」と墨書された坏が流れ込みの呈を示す。また、小型甕も口縁を住居内にして出土している。

住居址全体

遺物出土状況

遺物出土状況
（上方に三彩小壺）



1

0　5 cm
（1：1）

1. 法量
口径4.3cm、底径4.7cm、器高5.3cm、最大径8cm

2. 施釉
（上面から）各釉の配置は十字に緑釉を、更にそれの中央に褐釉を重ね、その間に斑点状に白釉を配している。
（横面から）全体に白釉、褐釉を三段に千鳥状に配している。釉は筆でていねいに塗り分けている。内面は白色。
発色
緑釉：緑色の発色は比較的濃い緑色で鮮やかである。（酸化銅の含有多いか）
褐釉：比較的強い色調で鮮明（鉄分が多い）
白釉：やや緑がかっているのは釉の塗る順序から来るものとみられる。

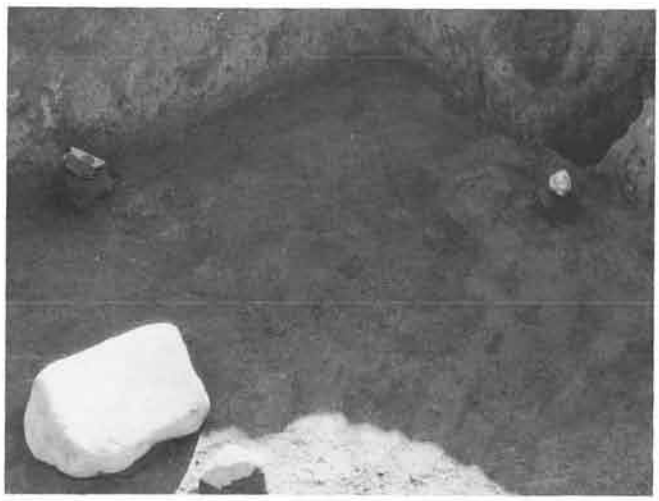
3. 素地
ザックリとした感じの卵殻色で胎土は精選され整っている。

4. 成形
ロクロ水挽き手法で作調はていねいでロクロ痕はほとんど見られない。回転は右方向で、仕上げ調整は布を用いたとみられ、その痕跡をとどめている。器肉はうすく精巧なつくりである。

5. 表面
滑沢でハロゲン化現象は見られない。

――井上唯雄氏　実測および注記――

図38　奈良三彩小壺実測図



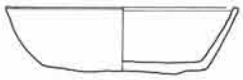
奈良三彩小壺出土状況

2

宅

2　坏（土師器）
色　調　暗橙褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削。底部外面に「宅」の墨書がある。不安定な平底を呈し、口唇部が内彎する。

3

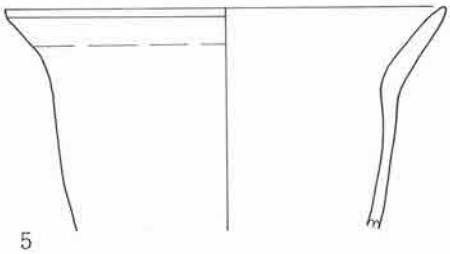


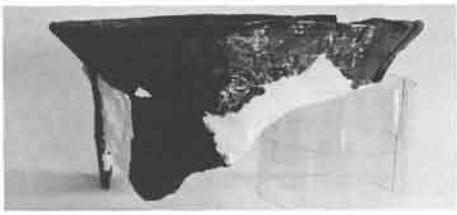
3　坏（須恵器）
色　調　黒灰色
胎　土　小石粒含有
焼　成　良
技法等　右回転ロクロ使用。器面に不明瞭なロクロ痕がみられる。底部回転糸切後、中心部を除き手持ヘラ削、後周辺部回転ヘラ削調整。

4

4　小型甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部方向ヘラ削。底部は不安定な平底を呈す。体部から口縁部にかけて、スス付着。

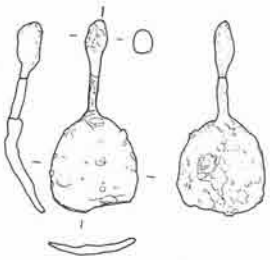
5





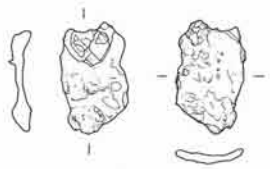
5　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや軟
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。口縁は厚く、しっかりしたつくり。頸部のしまりを欠く。

6



6　匙状鉄製品

7

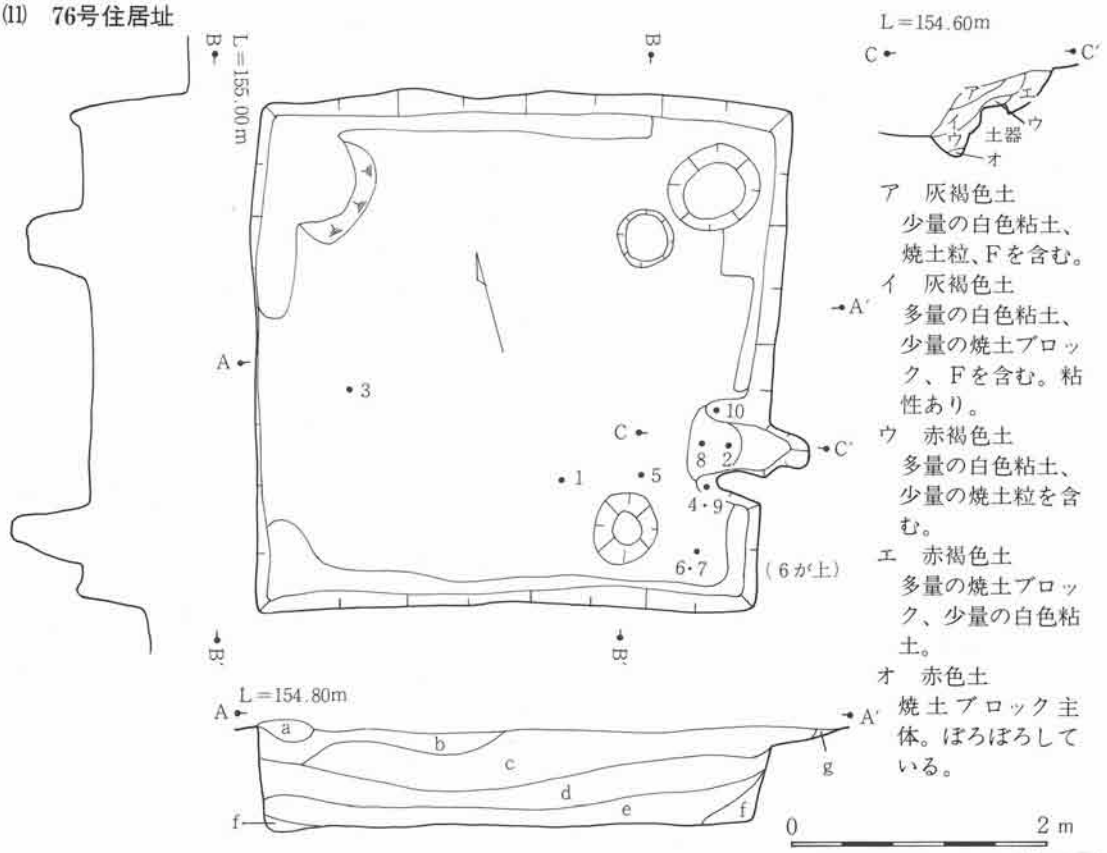


7　匙状鉄製品

0　10cm
（1：4）

図39　遺物実測図

(11) 76号住居址



ア　灰褐色土
少量の白色粘土、焼土粒、Fを含む。

イ　灰褐色土
多量の白色粘土、少量の焼土ブロック、Fを含む。粘性あり。

ウ　赤褐色土
多量の白色粘土、少量の焼土粒を含む。

エ　赤褐色土
多量の焼土ブロック、少量の白色粘土。

オ　赤色土
焼土ブロック主体。ぼろぼろしている。

a　茶褐色土　多量のF、C、砂を含む。かたくしまる。
b　茶褐色土　多量のF、Cを含む。かたくしまる。
c　茶褐色土　b層より少ないがF、Cを多く含む。
d　茶褐色土　少量のF、C、ロームブロックを含む。
e　黒褐色土　少量のF、C、黒色土を含む。
f　茶褐色土　ローム粒主体。しまりなし。
g　茶褐色土　漸移層。

図40　76号住居址実測図

位　置	発掘区南西部
規　模	東西4.0m　南北3.8m
形　状	正方形に近似
西壁走向	N—15°—E
周　溝	南壁下と北・西壁下の一部
柱　穴	なし
貯蔵穴	なし、しかし、南東隅に甕（口縁部）2個体が重ねられて置かれていた。穴にかわる貯蔵施設ではないだろうか。
床	全般にかたくしまる。ローム床。
竈	東壁南寄り。袖部両先端に長甕使用。燃焼部は壁中。構築素材は白色粘土を多く使用。
出土状況	遺物は竈周辺を中心として出土。ただし、高坏は坏底部と脚部が分離した状態で西壁下近くから出土。竈内でみつかった甕は口を住居内に向けていた。

住居址全体

竈付近遺物出土状況

高坏出土状況

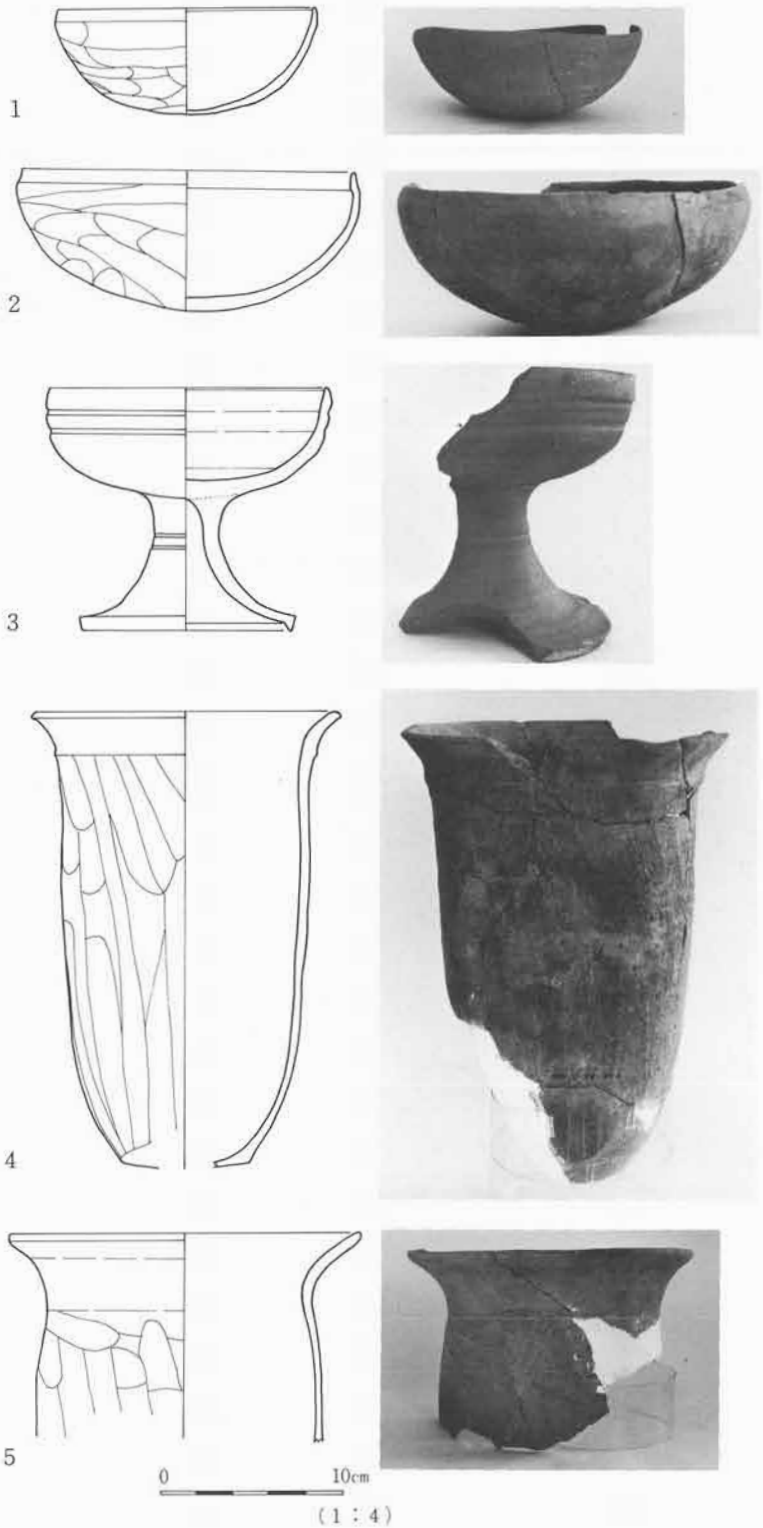


図41　遺物実測図

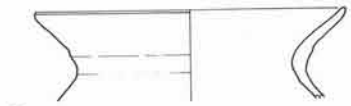
1　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向の、底部不定方向のヘラ削。深い丸底から短かい口縁部がやや内彎ぎみに立ちあがる。

2　坏（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒少量含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部横方向の、底部不定方向のヘラ削。口縁部と体部の境に稜を有す。口縁部は短かく、内彎する。比較的ていねいなつくり。

3　高坏（須恵器）
色　調　青灰色
胎　土　長石・雲母少量含有
焼　成　良
技法等　脚部坏部ともにロクロ成形。脚部とり付後回転ヘラ削調整。坏部脚部とも二条の沈線を有す。ていねいなつくり。

4　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　雲母粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削。口縁部と体部の境に稜を有す。

5　甕（土師器）
色　調　淡赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。胴部縦方向ヘラ削。頸部は弱くしまり、口縁部は大きく外反する。

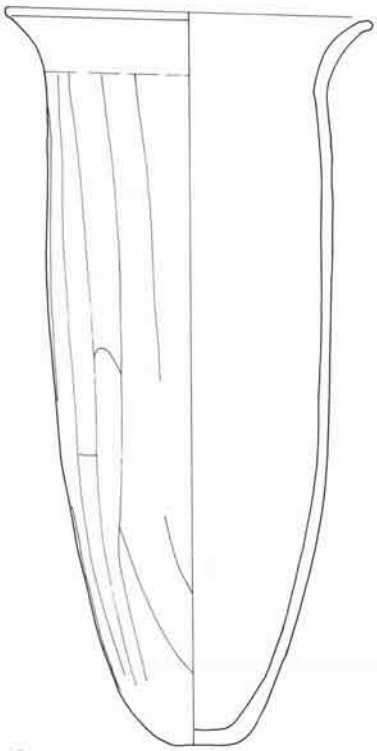


6

6　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部ヘラ削。頸部はしまり、口縁部は稜を有す。

7

7　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　石英・砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ後内面ヘラ研磨。体部斜方向ヘラ削後ヘラ研磨。

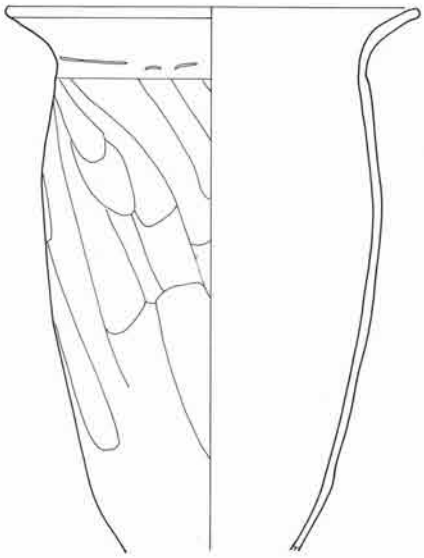


8

8　甕（土師器）
色　調　赤褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　やや良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向ヘラ削外面器肌が荒れている。頸部はしまりを欠き、膨らみのない体部は、ほぼ直線的に底部に至る。

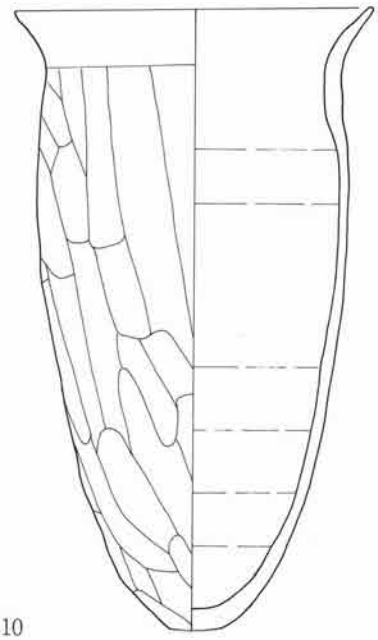
0　10cm
（1：4）

図42　遺物実測図



9

9　甕（土師器）
色　調　淡茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向主体のヘラ削。内外面とも器肌が荒れている。頸部にヘラ先で傷つけた痕跡あり。頸部はややしまり、口縁部は大きく外反する。



10

10　甕（土師器）
色　調　茶褐色
胎　土　砂粒含有
焼　成　良
技法等　口縁部横ナデ。体部縦方向のヘラ削。内面に粘土紐まきあげによる凹凸が残る、内面ナデ。ゆがんでいる。

0　10cm
（1：4）

図43　遺物実測図

(12)　掘立柱建物跡

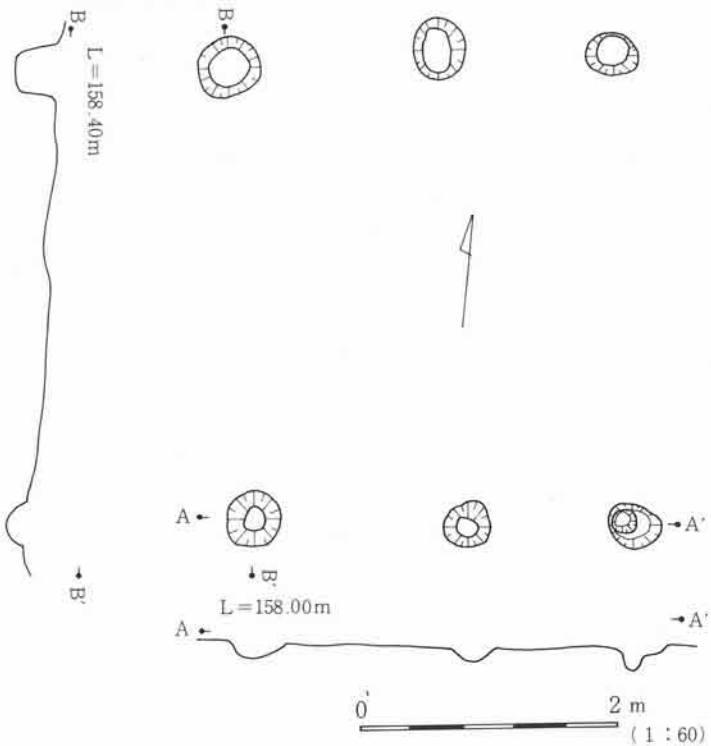


図44　掘立柱建物跡実測図

位　　置　発掘区ほぼ中央

規　　模　東西2間　3.0m

　　南北2間　3.6m

長軸走向　N－12°－W（西側）

そ の 他　本遺跡で検出された掘立柱建物跡は本址のみ。出土遺物がなく時期は不明。各Pit の覆土にはF、Cがかなり混入している。

(13)　1号ピット

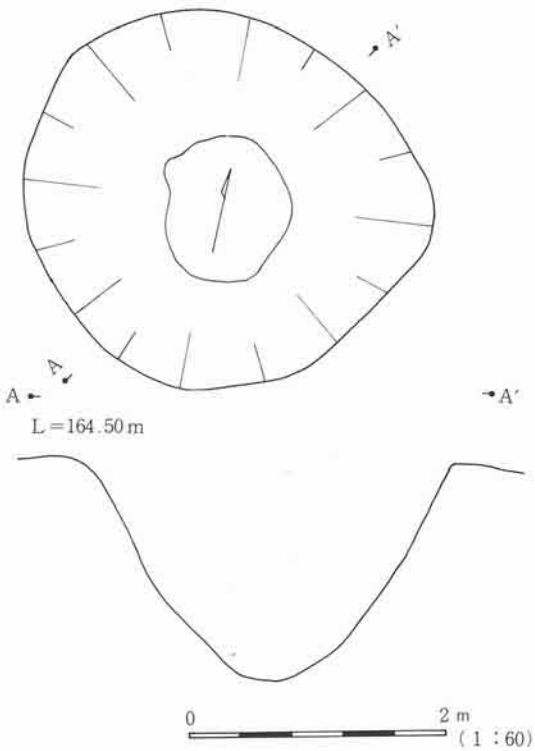


図45　1号ピット実測図

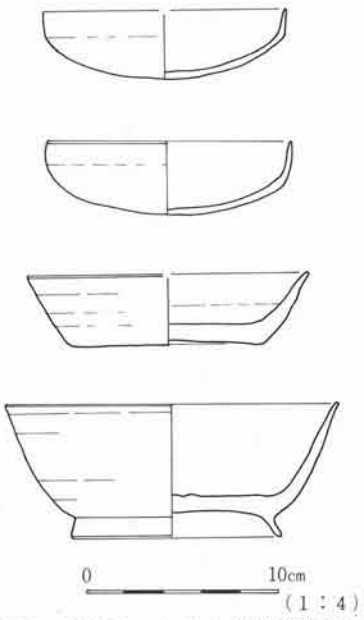


図46　1号ピット出土遺物実測図

断面にややロート状を窺わせる。底部に粘質土を貼り付ける。覆土の下位より高台付椀等出土。1号ピットの時期を国分期と捉えたい。

Ⅲ　ま　と　め

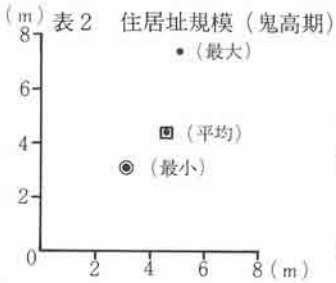
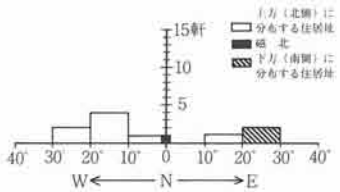


表3　住居址西壁の走向（鬼高期）



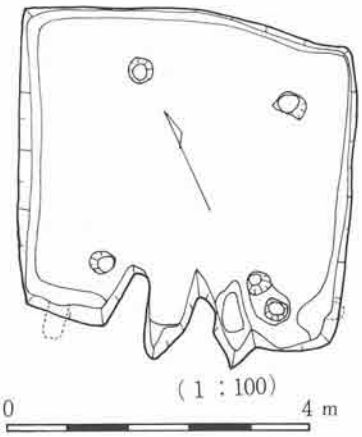


図47　50号住居址実測図

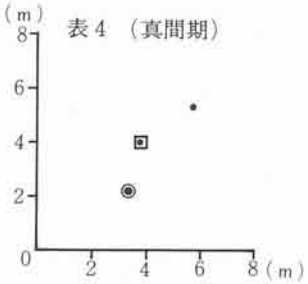
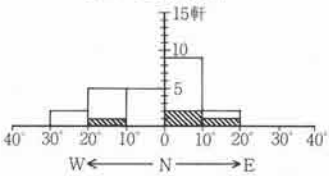


表5（真間期）



1　遺　　構

今回の調査では、竪穴住居址76、掘立柱建物跡１、溝１、ピット２が確認された。以下、遺構について概観する。

(1)　集落について

本遺跡のある台地は、巨視的には南に傾斜し、微視的には上方が南東に、下方が南西に傾く。76の住居址は集落の一部として、鬼高Ⅱ期ごろから国分期（10世紀半頃）まで営まれていたと考える。住居址は遺跡の上方に密集する様相を呈し、真間期から国分期と下るに伴い下方にも集落の拡散していく姿が捉えられる（図50）。限られた範囲の発掘調査に加え、周辺のマッピングやトレンチ調査から推測すると、集落の広がりは北東から南東に求められよう。

(2)　住居址構造について

a　鬼 高 期

住居址の規模は14号の5.1m×7.4mを最大に、比較的大といえる（表２）。西壁の走向は、磁北から西偏するもの７、東偏３であった。西偏する住居址は全て台地の上方にあって、東偏は下方で確認されている（表３）。床は貼床が施され、床面全体が固くしまり永い時間の居住を窺い知ることができた。

竈は東壁に構築されるもの６、西壁２、北壁２、南壁１であり、次期の前段階であることが改めて印象づけられた。11基の竈は主に白色粘質土で、住居内に大きく突き出す形で構築されている。従って、壁外へ伸びる煙道も短かい。また竈燃焼部の奥壁立ち上がりは直角に近くなる。袖部芯の長甕使用例は４件を数える。21号では片側に３個の使用が確認された。竈のつくり替えは21号（図９）と50号（図47）に認められたが、その新旧は不明である。

貯蔵穴の位置は竈の右脇６、左脇２であった。柱穴を床面に４箇確認されたものは７を数える。

b　真 間 期

住居址の規模はやや小振りとなり、ロームの掘り込みが深くなる（表４）。床は概して竈前が固くしまる。西壁の走向は西偏12、東偏11を数え、いずれも10°内外に集中する傾向にある。北東～南西に走る等高線が南東～北西に変換するあたりを境にすると、上方（北側）では西偏11、東偏８、下方（南側）では西偏１、東偏３であった（図

50・表５）。

竈は住居の掘り込みに伴い、燃焼部奥壁の立ち上がりが急勾配である。平面的には焚口に比して煙道部がすぼみやや長めになり、補乳瓶のゴム乳首に似る。竈を設ける壁も１例を除いて全て東壁である。住居内の突き出しは弱まり、燃焼部が徐々に壁外へ移行する様が看取できる。長甕を袖部に使用する例も４件見られ、42号では４個を使い焚口を鳥居状に築いている（図48）。

図48　42号住居址竈

貯蔵穴および貯蔵施設は16確認されたが、全て竈の右脇であった。その中には８号および76号でみる甕の使用もある（13頁および52頁参照）。柱穴を床面に認めるもの10で全てが４箇のものであった。

c　国 分 期

住居址の規模は一段と小型化し、ローム掘り込みは浅くなる。形状的には長方形が主流である。そんな中にあって、18号、31号、72号では張り出しが認められる（図50）。床は全般に軟弱である。

西壁の走向は西偏、東偏とも10°内外に集中する。等高線走向の変換を境に上方では西偏18、東偏10、下方では西偏１、東偏７となる。鬼高期から国分期を通じての西壁走向の結果は、傾斜地における住居の方位に、地形が関わってくることを示唆しているといえよう（図50）。

表６（国分期）

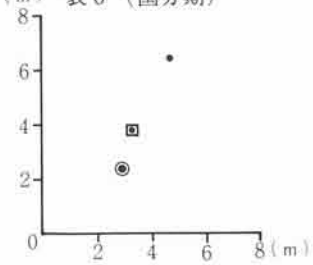
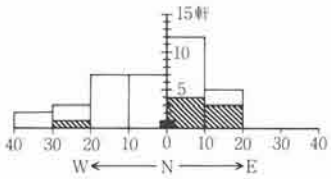


表７（国分期）



竈は東壁に設置され、中央からやや南に偏在し燃焼部の壁外移行が前期よりも増える。構築素材の中では長甕が全く姿を消し、袖部に凝灰岩使用が２例確認された。また粘質土の補強か土器破片や繊維植物を混入する例がみられる。甕の煙道部転用が４号でみられた。

貯蔵穴は23確認され、床面上に柱穴が検出されたもの６と少なくなっている。柱穴では46号のように３壁下に設けるもの、40号のように四隅に内傾する柱穴を有するもの等、張り出し施設とともに住居内空間を有効に使おうとする意識を窺い知ることができる。なお、４号では南壁下に５個のピットが並んで検出されている（図49）。対応する北壁下には確認されなかった。

図49　４号住居址ピット

(3)　溝について

遺跡を北から南に走る溝は、最大幅1.5m、深さ75cmを測る。地層断面に砂粒まじりの固い層が幾層もあり、水流の時期が７～８回にもおよんだことが認められた。固い層の上にはＢが厚く堆積している。住居址との切り合いから本址を平安時代以降と捉えた。

表8　住　居　址　一　覧

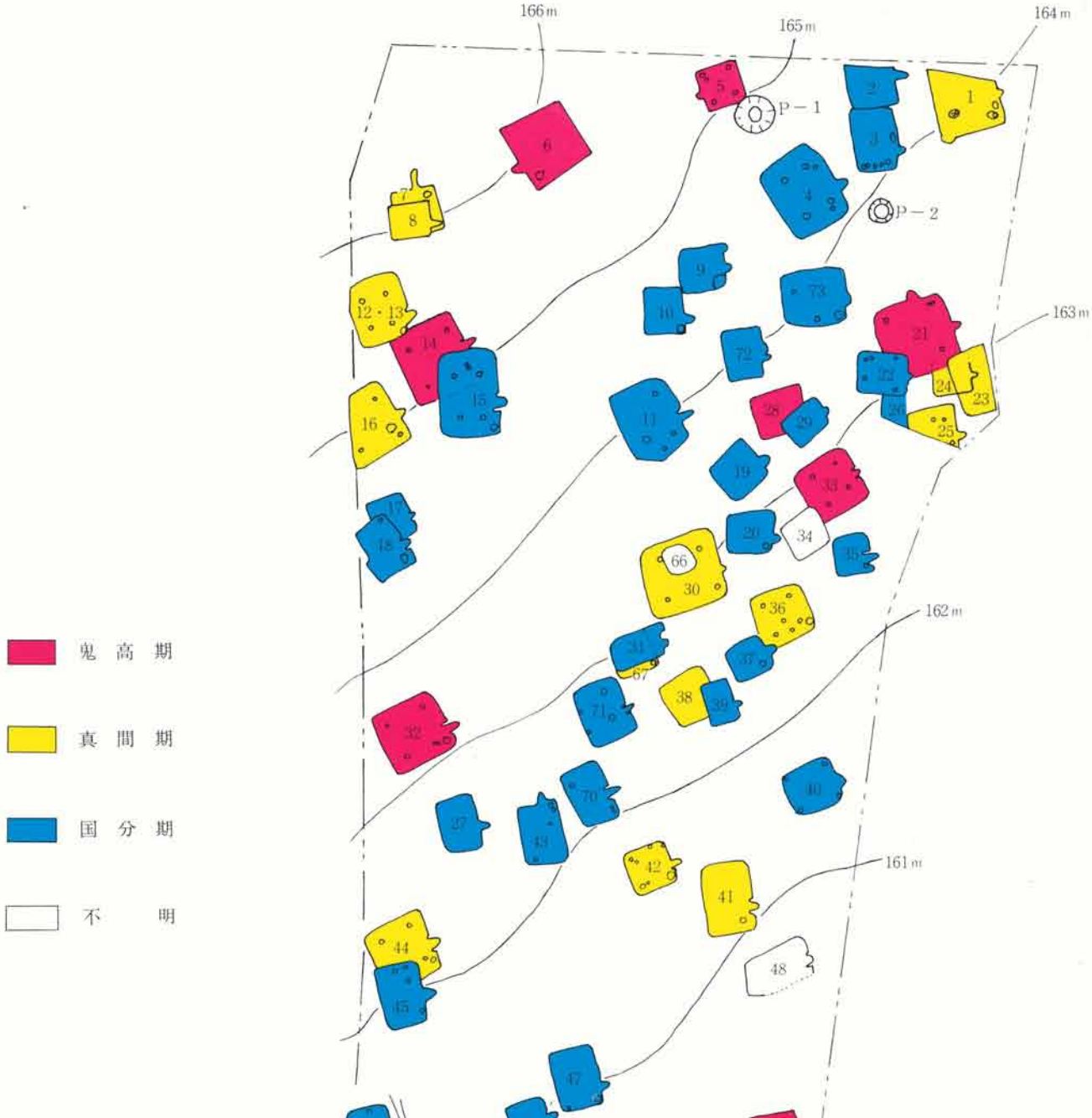
住居番号	(東西長)×(南北長) 形　状	西壁走向	(燃焼部1)壁内 竈(　〃　2)壁中 (　〃　3)壁外	周溝の有無	柱穴の有無	貯蔵穴	床	重　複	備　考　(土)土師器 (須)須恵器
1	m　m 5.1×? ?	N-5°-W	東壁、ほぼ中央か、燃焼部1	有 西壁下のみ	4　個	有	貼　床		南西隅にピット1ケ、2～3回の建替えか。道路敷により北壁出ず。
2	3.5×? ?	N-1°-W	東壁、燃焼部2	有 全周か	無	無	貼　床		竈中より甕破片（土）等。高台付椀底部（須）。道路のため北壁未確認。
3	3.2×4.6 長方形	N-1°-E	東壁、南寄り。石使用、燃焼部2	有 全　周	無	無	貼　床		南壁下にピット5ケ確認。煙道部先端に甕(土)使用。高台付底部（須）、坏破片(須)。
4	4.8×6.0 台　形	N-23°-W	東壁、南寄り。袖石に凝灰岩、燃焼部1	有 全　周	4　個	有			竈北側に張り出し部。甕、坏破片（土）、坏破片(須)。
5	3.2×3.1 正方形	N-12°-W	西壁、ほぼ中央。袖甕、燃焼部1	無	4　個	無	貼　床		P.9～P.12参照。
6	4.8×5.0 台　形	N-21°-W	西壁、南寄り。袖石、燃焼部2	有 全　周	無	無	貼　床		甕破片（土、須）。
7	3.3×2.2 長方形	(東　壁) N-6°-W	北壁、東寄り。燃焼部2	有 北壁下一部のみ	無	有	貼　床	8 7	煙道が長い(約1.5m)。甕、坏破片（土）。
8	3.0×2.7 長方形	N-3°-E	東壁、南東隅近く。燃焼部3	有 西壁下、南壁下	無	有	貼　床	8 7	P.13～P.14参照。
9	3.3×3.4 正方形	N-4°-E	東壁、南寄り。石使用、燃焼部1	有 ほぼ全周	無	有			南東隅、南壁下中ほどにピットあり。台付底部、甕破片（土）、底部(灰釉)。
10	3.0×3.6 長方形	N-9°-E	東壁、南寄り、石使用。燃焼部3	有 全　周	無	有	貼　床		脚付甕脚部、甕破片(土)、紡錘車（粘土）。
11	5.9×6.4 五辺形	N-15°-W	東壁及び南東壁、南寄り。燃焼部		3　個	無			最初東壁南寄りに竈を構築。その後南東隅を縮少し、新しい竈を南東壁に構築。台付底部（須）。
12	4.3×5.0 台　形	N-8°-W	東壁、南寄り、石使用。燃焼部2	有 ほぼ全周	4　個	有		13 12 14	甕、坏破片(土)、蓋破片(須)、金環
13	不　明	不　明	東壁か	不　明	不　明	不　明	不　明	13 12 14	12号住の埋土を掘り込み構築する。竈煙道部のみ12号住東壁に残。遺物等不明により時期不明。
14	5.1×7.4 長方形	N-18°-W	東壁、ほぼ中央。粘質土と石使用、燃焼部1	有 北壁下～西壁下	4　個	有	貼　床	13 12 15 14	北東隅から住居中央部にかけて遺物多数流れこみ、長甕3個体、鉢形土器（土）。
15	4.7×6.4 長方形	(東　壁) N-8°-E	東壁、ほぼ中央。粘質土使用、燃焼部2	有 東壁下一部のみ	4　個	有	貼　床	15 14	南西部壁は重機の剝土により削られる。甕破片(土)、坏破片（須）。
16	?×5.3 ?	(東　壁) N-21°-W	東壁、南寄り、粘質土。燃焼部1	有	3　個	有			民地にて北西隅部出ず。柱穴も1個出ると思われる。甕、坏破片（土）。
17	3.0×3.5 長方形	(東　壁) N-16°-W	東壁、南寄り、燃焼部2	有 東壁下～北壁下	無	有	貼　床	18 17	貯蔵穴近くより甕破片（土）。

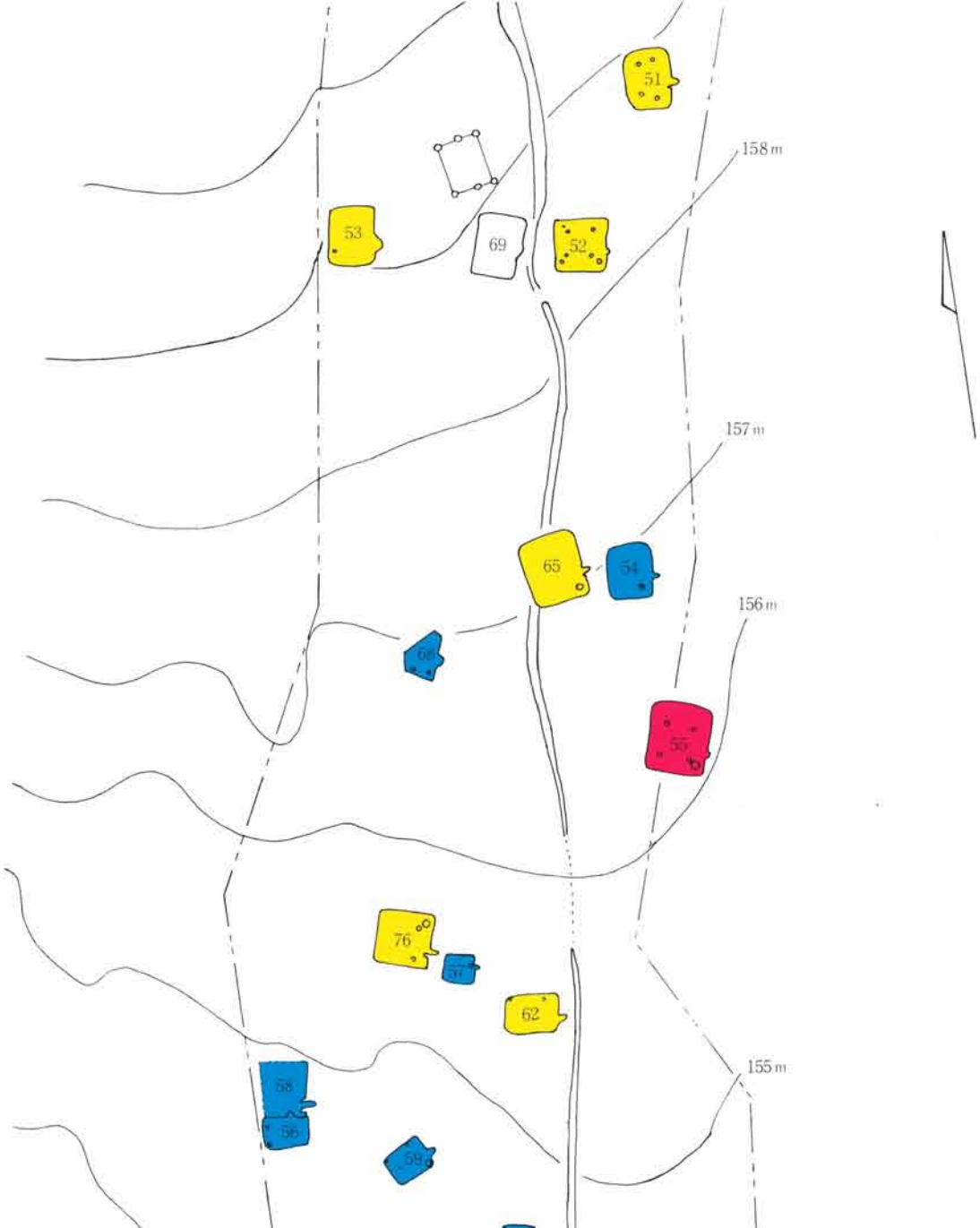
18	2.6×4.6 張出部東西長 3.3	(東 壁) N-22°-W	東壁、南寄り、袖石。燃焼部2	有 ほぼ全周	無	有		18 17	西壁南寄りが張り出す。坏破片（土）。
19	3.5×3.3 正 方 形	N-32°-W	東壁、南寄り。燃焼部3	有 全 周	無	有	貼 床		竈中より甕破片（土）。
20	3.6×3.0 長 方 形 (やや歪む)	N-10°-E	東壁、南寄り。燃焼部3	有 全 周	無	有			竈中より甕、坏破片（土）。
21	5.5×5.8 長 方 形	N-10°-W	北壁、東壁、袖甕、燃焼部1	有 全 周	4 個	有	貼 床	22 23 21	p.15～p.28参照。
22	3.7×3.0 長 方 形	N-9°-E	東壁、南寄り、粘質土使用。燃焼部2	無	無	有	貼 床	26 22 21	甕破片（土）、坏(土) 2個体
23	? ×4.8 ?	不 明	有	2 個	不 明	貼 床		24 23 21	
24	不 明	N-4°-E	東壁、23号住居埋土に構築。	有	無	不 明		24 23	西壁の一部しか残存せず。
25	3.2× ? ?	(東 壁) N-2°-E	東壁、石使用。燃焼部2	有	無	有		26 25	牧草貯蔵施設により南壁は破壊。甕、坏破片（土）。
26	不 明	N-8°-E	不 明	不 明	無	不 明		26 22 25	西壁の一部しか残存せず。西壁下より高台付椀(須)。それに「本」の墨書あり。
27	2.8×4.2 長 方 形	N-5°-W	東壁、南寄り、石使用。燃焼部2	有 全 周	無	無			甕破片（須）。
28	3.9×3.1 長 方 形	N-8°-W	29号住居に壊され位置等不明	有 西壁下 ～南壁下	無	不 明		29 28	坏破片（土）。
29	3.5×2.4 長 方 形	N-33°-W	東壁、南寄り。燃焼部1	有 西壁下 ～南壁下	無	無	貼 床	29 28	坏破片（土）。
30	5.7×5.3 長 方 形	N-4°-W	東壁、南寄り、袖甕。燃焼部1	有 全 周	4 個	有	貼 床	66 30	竈前より長甕破片（土）。
31	3.9×2.4 長 方 形	N-12°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部3	有 北 壁 下	無	無		31 67	甕、坏破片(土)、坏破片(須)に「田」のヘラ書あり。
32	5.2×4.8 長 方 形	N-16°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部3	有 全 周	4 個	有	貼 床		p.29～p.32参照。
33	4.4×4.5 正 方 形	N-23°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用、袖甕。燃焼部1	有 全 周	4 個	有	貼 床	34 33	p.33～p.36参照。
34	3.1×3.0 正 方 形	N-21°-W	無	無	無	無	貼 床	34 33	遺物が出土しないため、時期不明。
35	2.9×3.1 長 方 形	N-1°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部1	有 全 周	無	有	貼 床		坏破片(土)、西壁下に長10cm、幅4cm位の転石10個がまとまって検出。
36	4.4×4.2 長 方 形	N-6°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部1	有 南壁下を除く	4 個	有	貼 床	37 36	甕、坏破片(土)
37	3.1×2.7 長 方 形	N-17°-W	東壁、ほぼ中央、白色粘土使用。燃焼部1	有 ほぼ全周	無	有	貼 床	37 36	坏破片(土)

38	3.8×3.9 正方形	N-22°-W	39号住居により破壊され不明	有 全周	無	不明		39/38	甕、坏破片(土)
39	2.1×3.1 長方形	N-7°-W	東壁、南寄り。燃焼部3	無	無	無	貼床	39/38	甕、坏破片(土)
40	3.8×3.6 長方形	N-10°-W	東壁、ほぼ中央、袖石に砂岩。燃焼部2	有 北壁下	4個	無	貼床		柱穴が四隅にあり、いずれもやや内傾している。坏破片(土)。
41	3.6×5.4 長方形	N-2°-E	東壁、南寄り、袖石に砂岩。燃焼部2	有 全周	無	有			坏底部(須)、紡錘車(滑石)。
42	3.3×3.4 正方形	N-10°-W	東壁、ほぼ中央、袖甕。燃焼部3	有 北西隅中心に	無	月	貼床		竈の冠材に2個体、両袖に1個体ずつ。都合4個体の長甕(土)使用。坏破片(土)。
43	3.1×4.5 長方形	N	北壁、東寄り。燃焼部3	有 ほぼ全周	無	有			P.37～P.38参照。
44	4.6×4.8 長方形	(東壁) N-13°-W	東壁、ほぼ中央、白色粘土使用、袖甕。燃焼部2	有 ほぼ全周	4個	有		45/44	甕2個体(うち1個体は甑)(土)。
45	3.2×4.9 長方形	N-8°-W	東壁、南寄り、袖石に凝灰岩。燃焼部2	有 北壁下を除く	無	有	貼床	45/44	甕、坏破片(土)。
46	3.1×3.9 長方形	N-1°-E	東壁、南寄り、袖石。燃焼部2	有 ほぼ全周	3個	有	貼床		P.39～P.40参照。
47	3.5×4.8 長方形	N-6°-W	東壁、南寄り。燃焼部2	有 南壁下を除く	無	有	貼床		P.41～P.42参照。
48	4.9×? ?	(東壁) N-17°-W	東壁、袖石に凝灰岩。燃焼部1	有 北壁下のみ	無	不明	貼床		住居址の約⅔は牧草貯蔵施設により破壊。遺物が出土しないため時期不明。
49	3.6×3.3 長方形	N	東壁、南寄り。燃焼部1	有 ほぼ全周	無	有	貼床		竈より南側の東壁は少々孤を描いて張り出す。甕、坏破片(土)。
50	4.2×4.0 長方形	N-23°-E	南壁に2つ設置。燃焼部1	有 全周	4個	有	貼床		東寄りの竈を放棄後、西寄りの竈を構築。南西隅、南東隅に壁に対し垂直なピットを掘り込む。甕、坏破片(土)。
51	3.2×3.9 長方形	N-1°-E	東壁、ほぼ中央。燃焼部1	有 全周	4個	無	貼床		4個の柱穴痕を結ぶと台形状を呈す(西側(東側)甕破片(土)。
52	3.7×3.8 正方形	N-7°-E	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部1	有 ほぼ全周	4個	有	貼床		南東隅壁上にピットあり。甕、坏破片(土)、坏(土)。
53	3.2×4.2 長方形	N-15°-E	東壁、南寄り、袖石。燃焼部3	有 ほぼ全周	無	無	貼床		掘込みが深い。甕破片(土)、長頸壺(?)の頸部(須)
54	3.0×3.5 長方形	N-3°-E	東壁、南寄り。燃焼部2	無	無	有	貼床		掘込みが深い。坏破片(土)。
55	4.2×4.8 長方形	N-20°-E	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部1	有 全周	4個	有	貼床		P.43～P.46参照。
56	3.3×2.3か	N-2°-E	北壁か	無	無	無		58/56	重機の剝土により北壁及び竈は削られ、灰や焼土の集積がみられそこを竈跡と推定。甕、

									坏破片（土）。
58	2.1×1.8 長方形	N-19°-E	東壁、中央、袖石。燃焼部3	無	無	無			規模の極小住居址。甕破片（土）、壺頸部（須）。
58	3.7×？	（東　壁） N-11°-E	東壁。燃焼部2	無	無	不　明		58 56	北壁から西壁にかけては重機の剝土により削られる。坏底部（須）。
59	2.9×2.4 長方形	N-25°-W	東壁、南寄り。燃焼部3	有 東壁下～北壁下のみ	無	有	貼　床		甕、坏破片（土）。
60	2.8×3.6 長方形	N-3°-E	東壁、ほぼ中央。燃焼部2	有 ほぼ全周	無	無	貼　床		甕、坏破片（土）。
61	3.5×3.6 正方形	N-17°-E	北壁、ほぼ中央、石・白色粘土使用。燃焼部1	無	無	有	貼　床		貯蔵穴は北西隅、南壁下に長10cm、幅4cm位の転石7個がまとまって検出。甕、坏破片（土）。
62	3.5×2.6 長方形	N-2°-E	東壁、南寄り、石使用、袖石。燃焼部3	有 北壁下を中心に	無	有	貼　床		p.47～p.50参照。
63	2.4×2.4 正方形	N-8°-E	東壁、ほぼ中央、袖石。燃焼部2	無	無	有			甕破片（須）。
64	5.6×3.2 平行四辺形	N-5°-E	東壁、南寄り、石使用。燃焼部2	有 全　周	2　個	無		64 74	東～西が極度に長い。遺構平面はやや平行四辺形を呈す。甕、坏破片（土）。
65	4.1×4.5 長方形	N-10°-W	東壁、南寄り、石使用、袖石。燃焼部1	有 全　周	無	有	貼　床		西壁下に長10cm、幅4cm位の転石5個まとまって検出。竈前より甕破片（土）。
66	2.5×2.5 正方形	N-17°-W	不　明	無	無	無	貼　床	66 30	遺物が出土しないため時期不明。
67	3.0×3.0 正方形	N-12°-W	東壁、南寄り。燃焼部2	有 南壁下を除く	無	有	貼　床	31 67	竈前より甕（土）、坏破片（土）
68	2.3×3.6 長方形	N-19°-E	東壁、ほぼ中央。燃焼部2	無	無	有			北壁から西壁にかけては、牧草貯蔵施設により破壊、甕破片（土）、坏破片（須）。
69	3.2×4.1 長方形	N-18°-E	無	無	無	無	貼　床		遺物が出土しないため時期不明。床面は整備されておらず、構築途中に放棄された住居予定跡か。
70	2.9×4.4 長方形	N-18°-W	東壁、南寄り。燃焼部3	有 ほぼ全周	無	有	貼　床		竈周辺より甕、坏破片（土）
71	3.4×4.7 長方形	N-14°-W	東壁、南寄り、白色粘土使用。燃焼部1	有 全　周	有　か	無			柱穴痕らしいものが4個不規則に配置されている。その径もまちまち。竈周辺より坏（土）、壺（？）の頸部（須）。
72	2.7×4.0 長方形	N-1°-W	東壁、南寄り、燃焼部3	有 北壁下～西壁下～南壁下	無	有	貼　床		竈北側に張り出し部、煙道より甕破片（土）がまとまって出土。紡錘車（滑石）、砥石。
73	4.9×4.0 長方形	N-4°-E	東壁、南寄り。燃焼部2	有 全　周	無	有			北壁と西壁はやや曲線（外反）を描く。竈北脇より甕破片（土）。砥石。

74	4.5×5.3 長方形	N-2°-E	東壁、南寄り	有 南壁下と北壁下のみに認められる	4 個	有	貼 床	64 74	竈は64号住構築により破壊される。貯蔵穴近くより甕破片（土）。
75	2.9×？ ？	N-13°-W	東壁、南寄りか。燃焼部２	無	無	有	貼 床		南壁は重機の剝土により破壊、坏底部（須）。
76	4.0×3.8 正方形	N-15°-E	東壁、南寄り、白色粘土使用。袖甕、燃焼部２	有 ほぼ全周	無	無			P.51～P.55参照。


166m
165m
164m
163m
162m
161m
P－1
P－2
鬼高期
真間期
国分期
不明


51
158 m
53
69
52
157 m
65
54
156 m
68
55
76
57
62
155 m
58
56
59

2　遺　　物

多くの住居址で、何らかの形で土器の出土をみる。全体としては土師器の出土が多く、須恵器は少ない。器形は、坏・埦類と甕類が多く、他に甑、須恵器の高坏（図26―３、図41―３）、蓋（図31―６、図51―１・２）等がある。また、「宅」の墨書のある土師器坏（図39―２）、「本」の墨書のある須恵器坏（図51―５）、「田」のヘラ書のある須恵器埦の破片（図51―６）、及び「×」印のヘラ書のある須恵器埦（図31―４）の出土がある。灰釉陶器（図29―28、図51―３・４）もみられる。

他に、石製紡錘車（図51―７～９）、金銅製耳環（図51―11）、鉄製品（図51―10）砥石等の出土がある。なかでも、47号住居址からは、鉄製の鎌と砥石の出土があり、鉄製の農具の使用を示すものと考えられる。変わった器形としては、62号住居址より出土した匙状の鉄製品がある。また、同住居址より出土の三彩小壺が特筆される。

以下、本遺跡出土の土器のうち、出土例の多かった甕・坏・埦類について、その様相をみたい。

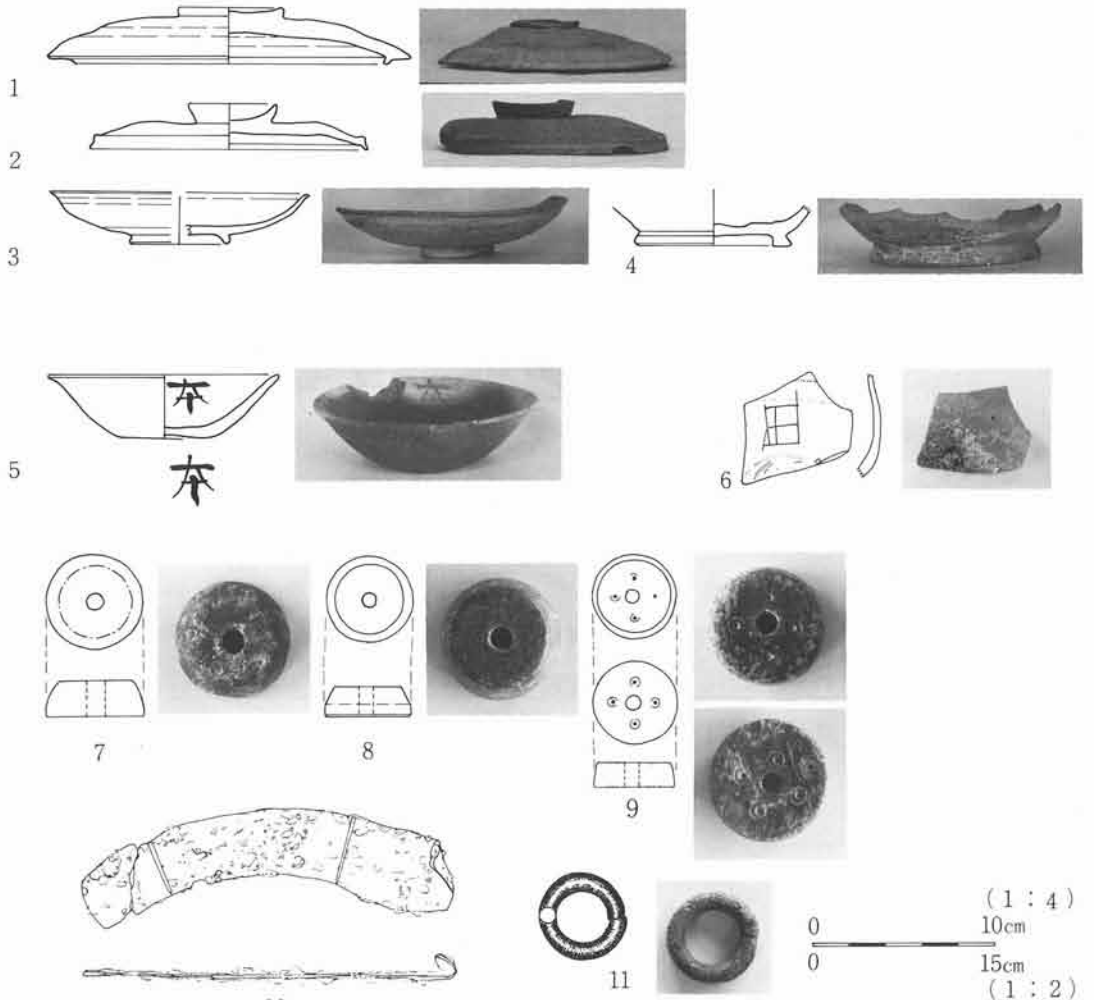


図51　遺物実測図

Ⅲ　ま　と　め

・甕（図52）

A　類　口縁部に最大径を有し、長胴を呈するもの。竈の袖やしんとして利用されていた例も多
—1　い。胴部はゆるやかな膨らみがあり、最大径は上半部にある。頸部はしまりがあり、口縁部は稜をもつ。

A　類　砲弾状を呈する胴部は、A-1類よりスマートな形となり、胴部の膨らみがさらに少ない。
—2　頸部のしまりも弱く、ヘラ削りにより生じた稜がみられる。胴部よりこける様に続く底部は、きわめて小さく、不安定な平底を呈する。

A　類　胴部は膨らみがなく、ほとんど直線的に底部へ至る。口縁部はゆるく大きく外反し、端
—3　部では、水平に近くなる。口唇部はやや肥厚する。口径と胴部最大径との差が大きい。頸部のしまりを欠く。

B類　頸部のしまりは強く、口縁部は大きく開く。胴部の膨らみが強くなる。

C類　所謂「コ」の字口縁を有す。ヘラ削のため、器肉はきわめて薄い。肩が張り、最大径を肩部に有す。

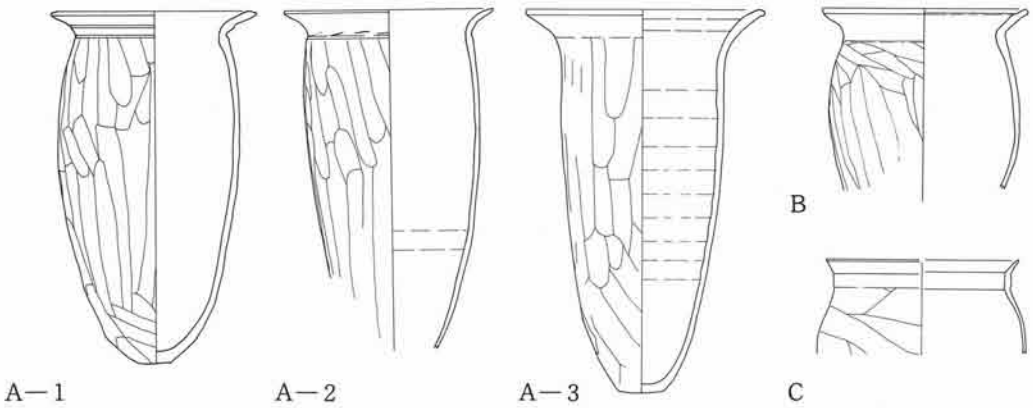


図52　甕実測図

・土師器坏（図53）

a類　やや平坦な底部。外面に稜を形成して、口縁部は直立ぎみに外反する。体部は全体に浅い。

b類-1　丸底より、外面に不明瞭な稜を有し、短かく内彎する口縁部へ続く。

b類-2　平底気味の丸底より、内彎する縁部へスムーズに続く。

c類　平底状で、体部はやや内彎ぎみに立ち上がり、斜方向に開く口縁部へ続く。器肉はきわめて薄い。

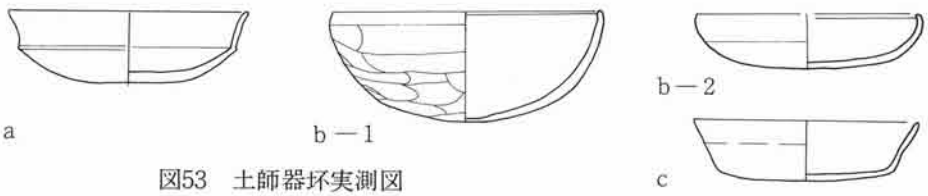


図53　土師器坏実測図

・須恵器坏椀（図54）

イ類　大きい平底で、口縁は斜上方に直に開くもの。底部は切り離し後、回転ヘラ削調整。周辺部ヘラ調整のものも含まれる。高台の付くものは、ほとんどみられなかった。

図54　須恵器坏椀実測図

ロ類　比較的小さい底部より、彎曲の強い体部が、斜方向に大きく開く。底部は回転糸切未調整。高台椀は、椀の底部端部に、低い高台を付す。

本遺跡でみられる、甕・坏椀類の主たる形態は以上のようであるが、①甕A-1・-2類と土師器坏a類、②A-3類とb-1類、③B類とb-2類、須恵器坏イ類、④C類c類とロ類が対応し、それぞれ鬼高Ⅲ期（①）、真間期（②、③）、国分期（④）に相当するものと考える。しかしながら、A類の甕は、多くの住居で伴出関係にあり、a類とb-1類の坏を伴出するものも多かった。

以上のことと、鬼高期の33号住居址の出土遺物、国分期の住居址からの出土遺物を考えて当遺跡をみると、6世紀半頃より10世紀半頃まで集落が営まれていたことが予想される。

3　奈良三彩小壺

三彩をはじめとした彩釉陶器の多くは、官衙跡、祭祀跡、神社跡、古窯跡など特殊な遺跡から発見されている。そこでの使用形態も(1)火葬蔵骨器、(2)副葬品、(3)神に対する供献用、(4)官衙等での祭儀用、(5)仏教用具などが考えられている。(注1)

所　在　地	遺　跡　名	遺跡の性格	備　考
三重県鳥羽市神島八代神社			
奈良県奈良市佐紀町	平城宮跡	宮殿跡	蓋
奈良県奈良市七条山(伝)			
奈良県山辺郡都祁村都介野甲崗	小治田安万侶墓	墳墓	
奈良県山辺郡都祁村都介野蘭生	土師器山遺跡		
兵庫県氷上郡山南町生田1845			小銭が入る
岡山県赤磐郡熊山町奥吉原	熊山戒壇址	祭祀遺跡	
岡山県笠岡市大飛島洲	洲遺跡	祭祀遺跡	
福岡県宗像郡玄海町	沖ノ島遺跡	〃	
福岡県早良郡(伝)			
長野県上伊那郡箕輪町	中道道跡	集落址	東山道に近い。蓋
福岡県筑紫郡太宰府町	宝満山遺跡	祭祀遺跡	
奈良市大和郡山市	平城京西市跡	官衙跡	
香川県	大浦浜遺跡		

表9　奈良三彩小壺出土遺跡

・五島美術館編「日本の三彩と緑釉」1974
・香川県教育委員会「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅳ)」1981
・奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部工楽善通、森郁夫両氏ご教示による。

Ⅲ　ま　と　め

今、奈良三彩小壺（以下、三彩小壺と略す）関した発見例を概観すると、全国では表９の通りである。

上記表に記載された三彩小壺、蓋およびそれらの破片に共通していることは、材質や釉調が極めて似ていることである。(注2) そして、供給した窯も必要に応じて平城京内または近くに築かれた官窯と考えられている。(注3)

今回、桧峯で出土した三彩小壺は蓋が発見されなかったものの身は口径4.3cm、最大径８cm、器高5.3cmを測り、緑釉を主体に白釉、褐釉を配する。その胎土は卵殻色で、右回転のロクロ水挽き成形である。これは、今までに発見された三彩小壺に多く見受けられるところである。作調は丁寧で、器形は扁球形をなし強く肩を張り、外張りの高台をつける（図55）。

ここで、器形、施釉および色調に的を絞って、桧峯の三彩小壺と近似するものを他遺跡に求めてみよう。器形では沖ノ島１号遺跡出土の№12三彩小壺が挙げられよう（図55）。(注4) 直に立つ短い口縁部、肩の張り、器高よりも大きな胴部径、高台の外張り加減等が指摘できる。さらに、口縁径：胴部径、口縁上端から胴部最大径に至る長さ：器高の値が桧峯のものとほぼ一致をみることも興味深い。相違点は高台端部にみられる。高台端部に着目した場合、奈良県山辺郡都祁村出土のものが注目される（図55）。器形も全体的に桧峯のものとよく似てくる。

次に施釉のあり方をみると、沖ノ島出土奈良三彩小壺の施釉第Ⅱ形式（この場合二彩）に近い（図55）。桧峯も側面周囲を緑と白で交互に８分割し、緑釉の中に褐釉を配し口縁部から底部までは３段に分かってある。しかし、底部周囲では８分割が崩れ10分割になっている（口絵写真）。

色調は奈良県大和郡山市の平城京西市跡出土の小壺破片（口縁部から肩部にかけて残）に酷似する。とくに、緑釉の淡い色調が指摘できよう。(注5)

以上ごく簡単に比較を試みたが、沖ノ島のものをはじめとして多くの三彩小壺がその供給窯を畿内周辺の官窯に求められている現段階にあっては、桧峯の三彩小壺も供給先を官窯とし、小壺と共伴した土器をも考慮すると時期は８世紀を与えることが妥当といえよう。

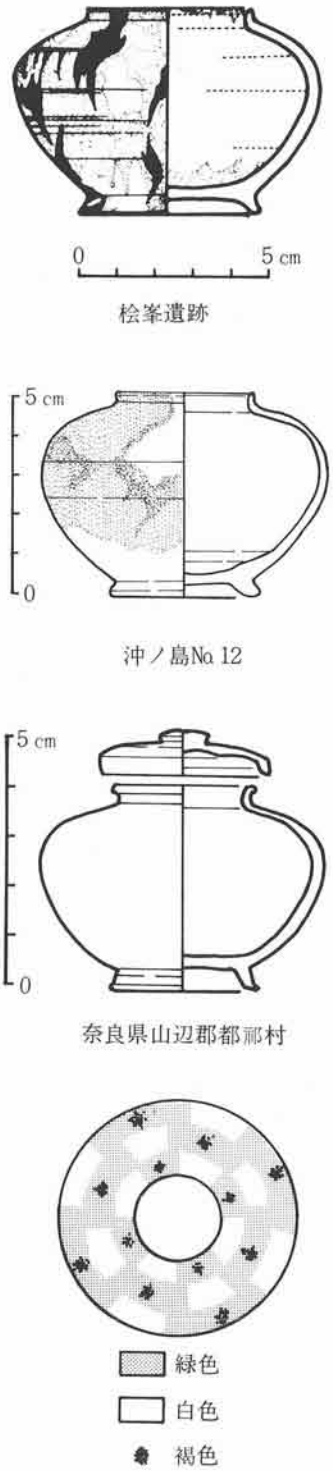


図55　奈良三彩小壺実測図

Ⅲ　ま　と　め

さて、何故このような三彩小壺が桧峯の一住居址から発見されたのだろうか。今後の可能性をふまえつつ少しく述べてみたい。

最近、住居址からの三彩発見が多く報告されている。例をとれば、長野県中道遺跡や千葉県荒久遺跡(注6)、県内では十三宝塚遺跡(注7)、山王廃寺跡(注8)等が挙げられる。中道遺跡は東山道に沿っており陸路での祭祀に関連が求められ、荒久遺跡は国分寺付属の集落跡であることが確認されている。また、十三宝塚遺跡や山王廃寺跡もそれぞれ郡衙（？）や寺院跡と推定され、特殊な遺跡と結びつく住居址の場合が多いわけである。

しかるに桧峯の場合、Ⅰ遺跡の位置と環境でみる如く国分寺からは9.5km、緑釉水瓶等を出土した山王廃寺跡からは8.3km、推定国府跡と称されている元総社の地からは8.4kmと隔たりをもつ。加うるに三者とも桧峯とは古利根川を挾んで対峙する位置にある。また、推定東山道からもだいぶ離れる。いずれにしても近年みる住居址出土例のように三彩の意味づけが桧峯の場合不可能なのである。

そこで、可能性の１は芳賀東部工業団地遺跡との関りに求めてみたい。現在、同遺跡は資料整理中ゆえ憶測の域を出ないことを断っておく。

「倭名類聚鈔」勢多郡の項には、深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、時沢、藤沢の８郷が記されている。しかし、現在までそれら郷の同定は行われていない(注9)。その中にあって同遺跡では約40haの発掘調査を行い真間、国分期の竪穴住居址420、掘立柱建物跡189を検出している。とくに掘立柱建物跡にあっては、総柱や廂、隅丸方形の大きな柱穴をもつものが確認されている。さらに、同遺跡の南にある７―３区では、空閑地を囲むようにして建物跡や溝が分布している。遺物としては坏や甕をはじめとして、「神木」「林殿」「干万（か）」「鴬所（か）」などの多くの墨書土器、銅製の巡方や丸鞆等が発見されている。

こうした状況にあって、今回隣接地桧峯で三彩小壺が発見されたことにより、芳賀東部工業団地遺跡に何らかの公的施設が存在したと仮定すると、そこと何某かの結びつきをもった集落跡が桧峯であったとする考え方が生じてくる。

次に可能性の２として、芳賀東部工業団地遺跡以外の未発堀な公的施設を有す遺跡、または祭祀遺跡等が近くに存在するかも知れないということである。

可能性の３として、三彩小壺が発見された62号住居址の性格である。同住居址の規模や造りはごく一般的であるが、床中央に大きな平たい石が据えられ、匙状の鉄製品が出土しており、他住居址とは異なった様相を呈することから、62号住居が桧峯の集落にあって何らかの祭祀的な役割りを演じた特殊な遺構とする考え方である。三彩陶器を出土する遺構に、石と祭祀とが結びつく傾向をみることからも、62号住居址＝祭祀的遺構の線もあながち否定し切れない面があろう。しかし、これが公的祭祀とどう結びつくかは不明である。

以上、三彩小壺について愚考をめぐらしてきたが、三彩陶器を日常の容器として位置づけていない現在、可能性を官衙をはじめとする公的施設や祭祀との関りでみていかざるを得ない。しかし、多分に意外性を孕むのも歴史である。そこで、全国の多くの住居址から出土する三彩や今回の桧峯

出土例をみるときに、三彩陶器は貴重品として扱われ、ごく限られた有識官人などの特権階級の人々の日常生活の中に入りこんでいたのではなかろうか、という考え方が少しく残る。

それにしても、ごくありふれた竪穴住居址からほぼ完形の三彩小壺が出土した例は、全国的にみても稀である。極めて少ない例だけに大胆な予想もまたできる。願うことは今後こうした出土例が増え、桧峯遺跡から発見された三彩小壺の意味づけがはっきりすることである。

付　記

県下で三彩小壺の完形品を伝えるのが、富岡市の貫前神社である。上杉管領家より奉納されたものだが、奉納年月日は不詳。

胎土は砂粒含みの卵殻色土で、ロクロ水挽き成形をしている。施釉は口縁周囲を黄と緑で六分割し、緑彩はムラのある濃緑で、肩部より曲線を描いて底部に至る器形は重量感を醸し出す（図56）。なお、蓋は桧峯同様無い。

図56　貫前神社と桧峯遺跡の奈良三彩小壺

注1　楢崎彰一「日本陶磁全集5　三彩・緑釉」中央公論社

2　1に同じ

3　堀江門也「多彩陶器焼成窯について」『考古学ジャーナル　No196』1981

4　宗像大社復興期成会「宗像沖ノ島」1979

5　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第一調査室長工楽善通、同所第二調査室長森郁夫両氏のご教示による。

6　1と同じ

7　群馬県教育委員会「十三宝塚遺跡発掘調査概報　II」1976　現在、郡衙跡として確定するには至っていないが、火舎獣脚や小壺、鉢、埦等の多彩釉陶器の一部を出土している。

8　前橋市教育委員会「山王廃寺跡第4次発掘調査概報」1979

9　前橋市史編さん委員会「前橋市史第I巻」

桧峯遺跡発掘調査報告書

昭和57年３月15日　印刷
昭和57年３月31日　発行

編集者　前橋市教育委員会
　　社会教育課文化財保護係
発行者　佐田建設株式会社
印刷所　朝日印刷工業株式会社